
魔法少女リリカルなのは ~ 自称魔法使いの幻想録 ~

セフィロード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～自称魔法使いの幻想録～

【Nコード】

N6495K

【作者名】

セフィロード

【あらすじ】

ある日、俺は子供を庇って死んでしまった。

しかし、気がつくと俺は雪降る草原にいて、そこには一人の幼い少女がいた。

少女は俺にリリカルなのはの世界に行って私を助けてほしいというが、さてどうなるやら。

利用規約改訂に伴い、注意書きとして

「今作に登場する人物設定、世界観、技名の一部に原作以外の作品（ライトノベル及び小説、コミック及び漫画、ゲーム等）からの引用が一部ございますのご注意ください」

……をこのあらすじに追記させていただきます。可能な限り転載・転用した内容は伏字等によって表現させていただきますが、内容について何かしらの不備がありましたらご連絡をお願いします。

プロローグ（前書き）

どうも初めまして、作者です。

なるべく原作基準と考えておりますが、少しずつ原作とは違った内容になると思われまので、ご注意ください。

かなりの駄文になりますが、どうぞ宜しくお願いします。

プロローグ

アニメや漫画、そしてゲームが好きなく普通的大学生、それが俺だった。

そして毎日を平凡に過ごすこと、それが俺の人生的な目標で一応達成したと自負はしておく。

しかし何故「達成した」、という過去形を使ったのかということ……俺は死んだのだ。

思い返せばありきたりな光景といえるが、公園から飛び出した子供を車から庇ったのだ。

声を出しても間に合わない、周囲に助けられる人は誰もいない。

いや、そういうことなど頭になかったんだと思う。

助けなきゃという気持ちに頭がいっぱいになって、身体はいつの間にか子供を助けていたんだから。

その後のことは、正直はつきりとは覚えてない。

ただ俺にとんでもないほどの衝撃を加えられたことと、子供の泣き声を耳にしながら意識が遠のいていったのは覚えている。

やってしまったなあという少々の未練、そしてあの子を助けられて良かったなあという気持ちもあつたが、俺は後悔してない。

家族には本当に悪いことをしたと思っっているが、もうごめんと謝ることすらできない俺を許してほしい。

さて、本題に入るが何故俺はこんな場所にいるのだろうか？

一説によれば親より先に死ぬと賽の河原に行くということから、俺が行くのはそつちしかないはずなのだが……その説は間違っていたらしい。

目に映るのは雪降る草原、そこは河原というには無理がある。だっ

て河すら見当たらないのだから天国とも地獄とも表現できないのだから。

「ここは、一体。俺は……」

「死んだはず、ですか？」

「!？」

声をするほうに顔を向けると、一人の少女が立っていた。

あどけなさを感じる顔に腰までかかる長い茶色の髪にリボン、そして白のワンピースを身に着けている。

その姿から何となくえいえ のせかいの子に見えたけど、きつと気のせいだろう。

「君は一体誰だ……？」

「私は人の使われていない意識の集合体、そしてここは私の世界」

人の使われていない、という言葉で思いついたのは無意識、集合無意識に無意識世界………何処のギアスだ。

そう、内心自分にツッコミを入れるが、それでは疑問も解決しない上にここにいる意味すらわからないので記憶の隅に置いておくことにする。

「とりあえず聞きたいんだけど……」

「どうしてこの場所にいるのか、ですか？」

「!？ ……その通りだ」

「貴方は確かに亡くなりました。けれど、それで終わるわけではないのです」

もしかして俺の場合、死んだけど何か理由があつてここに呼び出されたということだろうか？

実際、死後の世界というのは現実でもよく漫画等の架空の要素として取り上げられており、様々な解釈がフィクションとして挙げられている。

幽霊になるとか、地獄へと墮ちるとか、天国へ逝く等と例を挙げればきりがなくらいだ。

まさか自分がそういうことを体験するとは夢にも思わなかったけど、これは本当に運が良いのか悪いのかわからないな。

「その通りです」

「……なあ、もしかして俺の考えがわかったりするのか？」

「はい、私の世界ですから……その、全部」

ははは、俺のプライバシーというものが欠片も見当たらない世界だな。

それなら目の前の少女はN、いやサトラ？ いやいやもしかしたら0 ユニット……って最後の隠れてないから！

と、とにかくうかつなことは考えられない、って俺のことを全部知っているとされる少女に隠すことは無理があるか。

まあ、どっちにしる隠す理由も意味も無いから別に構いはしないのだが。

さて、それじゃあそろそろ本題に入るとしようかな？

「それで、俺はどうしてここに呼び出されたんだ？」

「はい、貴方を呼んだのは貴方に資質があったから、そして貴方にしかできないことを成してほしいのです」

「……一応聞いておくけど、資質ってというのは？」

「わかりやすく言ってしまうえば魔法です。けれど貴方がいた世界では魔法の存在は完全に空想へと成り代わり、力を持っていても世界が認めることがなかったのです」

「……つまり、『魔法なんてありえない』っていう世界の意思が俺の力を認めなかったということか？」

「細かく言えばもっと複雑ですが、概ねその通りです」

つまりは世界からの修正力というやつか……世界は矛盾を嫌うという設定は確か型でもあったな。

俺の場合、知らないうちに世界の修正力という鎖によって拘束されていた感じだろうか。まあ、あっても振るうことは無かったと思うけど。

俺は普通に過ごすほうが楽しくて十分満足してたし、元々そんな力が必要な時なんて一度も無かったのだから。

けど、もしそんな力が俺にあるとするなら、今ここで俺に対するプライベートの保護を最優先にしたいけど。

「だが俺にはそんな力は無いよ、何よりあつたところで何もできない」

「貴方がいた世界では力を振るうことはできませんでしたが、これから向かう世界であれば魔法は存在していますから修正力については問題ありません。」

そして貴方の持つ力を呼び起こすキツカケを、今ここで授けます」

少女の手から俺の手に渡されたのは、一つのアクセサリだった。

一見すると、どこかで見たソードライフル……ってこれスパロ」のラ トクラン が持つ武装じゃないか!？」

あのソードライフルはかつこよかったし、武器も機体も改造しまくって無双してたなあ。

「これから行く世界での矛盾が限りなく少ないモノを、私が作らせていただきました」

「少女が一瞬で作ってくれました」

「はい?」

「いや、何でもない。これってさ、もしかして変形とかするの?」

「はい、それにこの子はロストロギアと呼ばれるものになるでしょう」

うはっ、ご都合主義というか色々とありえないだろうに。

……ん、ちょっと待てよ? これから向かう世界においてデバイス、ロストロギア……って言葉はどっかで聞いたことがある。

まさかとは思うけど、それって某魔法少女の世界だったりするの？

「その通りです。実は貴方も知っているリリカルなのはの世界に行つて、ある存在を破壊してほしいのです」

「……はあ、拒否権は無いみたいだな」

「はい、非常に申し訳ないのですが……」

「別にそこまで気にしてないよ。あと話は変わるが、俺の身体と破壊してほしい存在っていうのは……どうなんだ？」

「身体は貴方に近いイメージが形になりますから心配は要りません。そして破壊してほしいものは、永遠の闇と呼ばれる存在です」

永遠の闇……ってF？のラスボスじゃないのか！？

プレイしてももう何年も経ったけど、今でもあのペプ 顔は忘れられない……凶悪な攻撃と共に印象が強く残っているし。

だが何でゲームという空想の世界の存在であるはずのものを、俺に破壊してほしいと言うのだろうか？

「永遠の闇は、元々貴方の世界における空想の一つでした。

けれど人の闇を無尽蔵に吸収し続け、ついには他の空想にまで現れる力を持ち、あらゆる世界を無に帰そうとしています。

そして現実の世界にも消滅の予兆が現れ、それで問題解決の為に……」

「丁度良く資質を持って死んだ俺が選ばれた、というわけか」

「はい……これは貴方にしかできませんから。それに、この雪も滅

びの予兆なのです」

そこまで言われれば行くしかないだろうし、事態が深刻なのであれば尚更断れない。

まあ俺としても最初から断る気など無いし、俺にしかできないなら何とかしないとイケないだろう。

それに、一度死んだ俺にチャンスを与えてくれるという礼も兼ねて行ってくるでしょうか。

「わかった。それじゃあ魔法少女の世界への転送、お願いできるか？」

「はい……ご武運を、」

彼女が俺の名前を口にした瞬間、俺の視界は光に包まれたのだった……。

プロローグ（後書き）

とりあえず、ネタを色々入れすぎた気がするけど後悔していない。

…すみません、調子に乗りました許してください。あ、石投げないで！

よろしかったら、この物語がどうなるかを見てやってください。

追記：全体の改訂をしました。

第一話 出会いは突然だった（前書き）

なんて、駄文。

自分でもそう思えるくらいなレベルですが、宜しく願います。

第一話 出会いは突然だった

うん、ある程度のことは予想してたんだ。

リリなのの世界に送られる以上、ハプニングや危険はつき物だっということは。

魔法なんてもんがあるし、俺なんて永遠の闇をどうにか破壊しないといけないしね。でもさ……

「なんでさ？」

目を開けてみれば見たこともない、荒れ果てたビルの隅に俺は座っていた。

立ち上がってビル周辺を見ると、使われていない廃ビルが連なり人氣がまるで感じられなかった。

窓から見える空は暗く、星や満月が出ているところを見ると時刻は大体真夜中くらいだろうか？

「とりあえず、現状確認だな」

服装：何処にでもある服装、あえて言うなら白いジャケットに黒いシャツに黒いズボン。

持ち物：少女からもらったデバイス（？）。

身体の特徴：おおよそ身長140センチくらいで年齢は9歳ほど、体型は筋肉質タイプ。

顔：近くのガラスで確認すると、その容姿はリト スの主人公にそっくりだった。

「……って、財布も鞆とかも何も無いんかい!？」

なんかもう、色々とツツコミを入りたいが何も変わらないのでとりあえずこのことは忘れておこう。

まず一番の問題は食料と水が近くに無いこと、これはどうにかしないとマジでヤバイ。

ライフラインが何も無いというか、既に破綻しているに等しい状況……戦いの前に早速ピンチです。

こんな、魔法を磨く前に俺が餓死するだなんてみっともない有様など洒落にもならない。

「うっむ、これからどうするか……」

『……あの』

「せめて水場があれば……いや、場合によっては飲めないから駄目だし」

『あのー!!』

「ウヲ!? びっくりした……って確かお前は」

『初めましてですね、マスター』

「ああ、初めましてだな」

食料のこととかを考えててすっかり忘れてたが、こいつのこともあったんだよな。

戦闘とかには絶対にお世話になる存在だし、一緒に今後のことを考えてやらんといかんよな。

……あれ？　そういえばこいつ、何て名前だったかな？　あの少女も名前については何も言っていなかったし。

「えっと、最初に悪いんだがお前の名前は？」

『実は、まだ名前が無いんです。貴方が名付けてくれませんか？』

「そっか……それじゃあ、フォルセティでどうだ？」

『フォルセティ、北欧神話における司法神の名前ですね』

「あ、えっと、確かそうだったと思う」

思わず俺が強くてかっこいい名前をつけようと、咄嗟に思いついたのがこれだった。

今でもこの名前を聞くと思わず最凶の風使いの王族を今でも思い出すことができる。ちなみに誤字ではないと俺は思っている。

実は名前の元ネタについては全く知らなかったんだが、どうしてフォルセティにはわかったのだろうか？

『別に隠さないでいいですよ、マスターのことですから大体のことはわかりますので』

「……なあ、俺の考えてることってそんなにわかりやすいのか？」

『いえ、私はマスターの前世の記憶を全て認識させてもらっていますから……その、大体のことは予想できますので』

ジーサス。俺の過去は全部知ってる上に、考えることもある程度予

想ができるそうだ。

さっきのえいえの少女といい、俺にプライバシーもとい人権というものは適用されないのだろうか？

どうせ適用されないに決まっているんだらうけど、ここまで来ると泣いていいと思う。

『あまり深く考えないほうがいいですよ？』

「……そうする。名前はそれでいいか？」

『はい。このフォルセティ、貴方をマスターの剣として生涯変わらぬことを誓います』

「ううむ、何かむず痒いな」

こう、結婚式みたいなノリというか、そういう口調で言われると非常にむず痒い。

俺にとって、そういうのには全くと言っていいほど無縁だったから特に免疫が無いからな。

ああ、心身共にむず痒い上に無性に恥ずかしくて今にも悶死しそうだ。

『話は変わりますが、マスターの名前は？』

「あ、そうだったな。俺は……」

転生したとなれば昔……いや、前世の名前を使うのも何か気が引ける。

もう昔には戻れないし、ある意味ここで過去との折り合いをつける意味でも自分で自分の名をつけるべきか。

そつだなあ、相方がフォルセイなら俺も風を含んだ名前にしてみ
るとして……風、カゼ、かぜ、Wind。

……よし、決まったぞ！

「……うん、決まった。今から俺の名は風樹一真だ」
かほきかずま

『風樹一真、良い名前ですね』

「ふ、ありがとな」

実はというとスクラドの主人公の名前や風の痕を参考にしたが、
苗字は適当にしたのは内緒だ。

だが予想以上にじっくりとした名前になったので、これからはこの
名前でいくことにしようと思う。

けど、問題はまだ一つも解決していないのだ。第一の問題として……

「これから何処に行けばいいんだろうか？」

『当ても戸籍もお金もありませんから、無闇に動けませんね』

「それは言わないでくれ、頼むから」

こんな夜中に9歳くらいの子供が外出している光景を目撃すれば、
俺でなくとも間違いない補導されるだろう。

その後のことは全く想像できない。多分外を自由に動けることは殆
ど無いだろうし、下手すれば施設で一生を過ごすことにもなりかね
ない。

施設に行くわけにもいかない上に、自由に動ける等の条件を付けて

いくと公共機関等とは関わりを持たないということになる。

そうなるのと今までの常識は通用しないということであり、元々が一般人の俺には本当にどうするべきなのかさっぱりわからない。こんな状態ではまともな行動もできなくて身動き取れないし、それ以前に情報収集もできない。

いや、それ以上に生きていくこと自体が非常に困難極まりないという事態であるのは間違いないだろう。

まあ、それは明日考えることにしようと思う。

さつきから考えも全然まとまらないし、少し眠って頭の中をリフレッシュしてからでも遅くはないはずだ。

どう見ても現実逃避そのものだが、煮詰まった頭では良い案など出ると思えないしな。

「さて、俺は一旦寝るよ。眠くて考えがまとまらないし」

『ええわかりました。ではおやすみなさい、マスター』

俺こと風樹一真とフォルセティの転生初日の夜は、こうして過ぎていったのだった。

ああ、全身がゴツゴツしたコンクリに当たって痛い……泣ける。

そして夜が明けてから、俺とフォルセティは色々と話し合った。

内容としては現在俺の使える魔法について、そしてこれからの方針

だった。

魔法に関してはプログラムと術式によらない魔法らしく、俺のイメージをそのまま魔法という形にして発動するということだった。

イメージ的にはハガレの賢者の石を持った状態での錬成といえはわかりやすらしく、リンカーコアも必要としないらしい。

ただ、俺の魔力量は大体A相当らしいので、魔力量には十分気をつけないとすぐにガス欠になるから気をつけることとフォルセティに言われた。

それと俺の魔法の特徴は、イメージ力と込める魔力量に比例して効果が高まるらしく、上達すれば少ない魔力で大きい効果を得られるらしい。

だが、俺がその域に達するのはかなりの時間と度重なる訓練が必要らしく、現状ではあまり期待はできそうにない。

あと確認のためにセットアップしてみたところ、フォルセティが意外と大きかったので少々ビックリしたのは内緒だ。

さて、本題となるこれからの方針だが……ヤバイ、この三文字が全てを物語っている。

先にもあったが戸籍、住居、お金、服、そして何より食べ物が無いという信じられない事態に直面しているからだ。

これでは人として最低限の生活すら送れない上に、そう遠くないうちに餓死という死に様にもなりかねない。

ここに来る前にお金とか用意してもらったのだからうけど、もう過ぎたことだからとやかく言っても仕方がないのはわかってはいるが。

それにしても、中身は二十過ぎの大学生（笑）、外見は9歳の子供が旅をするイメージ……流石に無いな。

どこそのバーローも真つ青な状況にいるが、全く嬉しくないのは当然だと思う。

ああ、色々と話してたら喉が渴いてきたな。

「とりあえず、喉渴いたし水飲める場所でも行こう」

『そうですね、公園などはいかがでしょうか？ 水を飲んでも問題無いと思いますし』

「うん、そうしよう。……というかそれしかできない」

そうして廃ビル群から抜け、俺は暫くの間道なりに歩き始める。

太陽の傾き具合を見てお昼くらいだろうと思うんだが、時計も無いのではつきりとはわからない。

ああ、こうしている間にも益々喉が渴いてくるし、腹の虫が食料よこせと暴動を起こし始めやがった。

その様相はフー ガンのようにどんどん過激になっていくが、今の俺に鎮める手立ては無いのでどうしようもない。

そうして人気がある場所まで出ると、車の案内板がここの地名を教えてくれた。

「名前が……海鳴？」

『原作における始まりの場所ですね』

「うん、そうなんだけど……ここ都合主義もここまで来ると何も言えんよな」

何となく始まりの町であるマサ タウンを思い出してしまったが、それはどうでもいいだろう。

さて、まずは公園を探して水を浴びるほど飲みたい。いい加減喉乾いてしょうがないし。

そう思いながら探し歩いていると、すぐに小さな公園を見つけるところができた。

昼頃であるはずなのに人が結構いることから、今日はおそらく休日ののだろうか？

「やっと見つかったか。それじゃあ……って何だ？」

『（何か言い争っているようですね）』

ここからでは見えにくいのが、少女二人が三人の男たちに絡まれているようだ。

少女の一人は怯えているように見えるし、もう一人の子は男たちと口論をしている。

三人の男たちの方、何か柄が悪いしこのまま見てられないな。おまけにあそこに視線が集中してるし、助けようとする人さえ見当たらない。

それに男たちの雰囲気はかなりヤバイ、少女たちにいつ手を出してもおかしくなさそうだ。

とりあえず、止めに行っておこう。

女の子が怪我をする光景など見たくもないし、大騒ぎになるのは御免こうむりたい。

騒ぎが治まったらそそくさと立ち去ればいいわけだし、それ以上は面倒見切れないしな。

「（フォルセティ、身体強化を成人男性レベルに）」

『（了解です、マスター）』

念の為、フォルセティに頼んで身体強化を成人男性レベルに補助してもらおう。

そして俺は言い争っている二組の間へとスタスタと歩き、話へ割り込むような形で仲裁を試みる。

「あゝ、皆さん？ どういうわけかは知りませんが、こういったことはここらで止めにはませんか？」

「うるせえ！ ガキは黙ってる！」

「ぐはっ……!?!」

俺の存在をまるで虫を払うように、男の一人が暴力を行使した。流石に身体強化をしても痛いものは痛い、左頬がジンジンしてすごい痛くて泣けるレベルだ。しかし、こんなところでこれ以上騒ぎを大きくさせるわけにはいかないので我慢しておく。

まあ、既に大事になってる気もするけど、早く終わらせて逃げればいいか。

「だ、大丈夫ですか？」

「ああ、問題無いよ。……さて、アンタ等に二つ聞いておくことがあって、一つだけ教えておくことがある」

「ああん？」

殴った男へと視線を向けながら、俺はゆっくりと口を開く。

この男たちを見ていると何となくイライラしてくるし、右手がぎゅつと握り締められて拳を形作っている。

たぶん、こいつらにだけ口調が変わってるのは下手に出る必要が無いと無意識で判断したからだろう。目元が怒りで引き攣ってるのが嫌でもわかる。

俺はこんなに直情的な性格じゃなかったはずだったんだが……まあ、いいや。

目の前の奴らにむかつ腹がきているのは本当のことだし、それを隠す理由など俺には何も無い。

今の俺は、戸籍も何も無い自称九歳のガキが大人げが無さ過ぎる男たちの態度に怒っている、ただそれだけなんだから。

「何でそこまでキレてるんだ？」

「そこのガキがぶつかってきたからだ！ ぶつかったら慰謝料払うのが当たり前だろうが！」

「それは軽くぶつかっただけのようだし、二人もきちんとして謝ったんだらう？」

服もそうだが何か壊れたってわけでもなさそうだし、ここは度量の大きさを見せて許してやれないか？」

「それで済むわけねえだろうが！ こっちの気がすまねえんだ……慰謝料よこしやがれつつつてんだよ！」

なるほど、こいつは典型的なキンピラ……じゃない、チンピラとかち合ってしまったというわけか。
よく見れば所々に刺青をしており、目つきもヤバイのをやってるのか、ありえないくらいトチ狂っているように見える。

それに頭に血が上って完全な暴走状態に陥っている。ここのうとは極力関わらないようにしたかったんだけど、今回はかりはしょうがないか。

「ふう、それじゃあ最後に一つだけ教えておいてやる」

そう言った瞬間、俺は殴った男の至近距離へと移動して右腕にありつた力の力を込める。

その握り締めた右手をそいつの腹に向けて力の限り、全身を使うようにして思い切りぶち込んだ。

「がっ……!!？」

「殴っていいのは、殴られる覚悟のある奴だけだ。それを弁える三流」

拳がぶつかった衝撃でジンジンと痛い上に、男の生々しい人の感触がして非常に気持ち悪い。

殴られた男は完全に気絶して路面に倒れ伏すが、これは少し身体強化をやりすぎではないだろうか？

さっきの一撃での感触からして骨は折れてないだろうけど、威力が強すぎてこっちがビックリしたくらいだ。

もしかしてフォルセティ、お前はマイ・タインくらいが成人男性レベルだと勘違いしてるんじゃないだろうか？

『（コイツラにはそれくらいが丁度いいのではないのでしょうか？）』

「（……さいですか）」

どうやら確信犯らしく、フォルセティも我慢ならなかったようだ……
…お前本当にデバイスか？

それと何でだろう？ フォルセティの言葉を聞いて急に目の前のチ
ンピラが哀れに思えてきた。

だがこれも人生の授業料ということで、彼等には無理にでも納得し
てもらおう。答えは一切聞くつもりは無いが。

「デメエー!!」

「やりやがったな!？」

「ぐえ!？」

そんなことを考えていると、他の男二人がキレて殴る蹴るの暴行を
始めやがりました。

流石に防御力を上げてても痛いものは痛い、頬殴られるのも腹蹴られ
るのもマジで痛いから勘弁してほしい。

だがまあ、これなら正当防衛になる可能性は十分あるだろうし、そ
ろそろこちらでも反撃開始といかせてもらおうか。

まあ、格闘技とかやってないから思い切り殴りつけるだけなんだけ
ど。

「ちえい!」

「ぐえ!??」

最初の男と同じように腹部への一撃を加えて倒し、すぐに三人目を見据えて右手に力をこめる。

「な、このガキイ！」

「ふっ！」

「がはっ!？」

間髪入れずに最後の一人にも同じボディブローを放つと、それも意識という糸が切れるように倒れ伏した。

ふう、ようやく終わったかな……と思つてたら何だか口から鉄の味がする。

殴られて口の中が切れたんだろうな、おかげで血の味がして気分が悪いよ本当に……ペツ、と。

感情の方も普通の状態まで落ち着いてきたけど、そのおかげで暴行を受けた部分がズキズキとして痛くなってきたし。

「あ、あの……」

「ん？」

チンピラ相手にしてたから、二人のことをすっかり忘れていた。

そういえば目の前にいる二人の顔、とてもよく見覚えがあるんだが何故か思い出せない。

まあ、それは今気にすることでもないだろうし、思い出せないなら別にいいだろう。

それよりもまずいのは、この騒ぎで人が集まり始めていることだ。
このまま警察呼ばれて事情聴取になったとしたら、本当に洒落にな
らない。

親御さんはどうしたと聞かれたら施設ルート確定なわけだし、何よ
りこの二人が怪我してないかだって心配だ。

とりあえず、場所を変えるしかないだろうな。

「二人とも、場所を変えないか？ 流石にここにいるのはちと……」

「え、ええ。そうね」

「は、はい」

そうして俺たちはそそくさと騒ぎの会った場所から離れていったの
だった。

この後チンピラは警察がおいしく連行していきましたとき。めでた
くもあり、めでたくもなし。

「「「めでたくねえよ！」「」「」

さいですか。

第一話 出会いは突然だった（後書き）

後書きに書く事が思いつかない…作者です。

とりあえず完結を目指して頑張つていききたいと思います。

いつ完結するかはわかりませんが…orz

追記：全体の改訂をしました。

第二話 問題解消？（前書き）

バニングス夫妻が出てきますのでご注意ください。

あと、アリサママについてですが、名前の記述が無かったのでオリ設定で名づけさせていただきました。

アリサパパについては記述があっただんですけどね…orz

第二話 問題解消？

え、場所は変わってとある豪邸の一室にいます。

けど、ここでは俺なんか場違いな存在としか思えない。これとは真逆の生活をしてるわけだし。

実はこの後、デパ地下の試食コーナーにでも行って腹ごしらえしようかなと考えてるしね。

みつともないにも程があるだろうけど、生きていく以上はある程度の意地汚さは必要だろうと割り切るつもりだが。

「傷は大丈夫のようね」

「ああ、おかげであまり痛まなくなっただよ。ありがとな、アリサ、すずか」

「べ、別にアンタがお礼を言わなくてもいいでしょ！ 助けられたのはこっちのほうなんだから」

「よかった、大事に至らなくて」

金髪の少女と紫がかった髪をした少女が俺に話しかけてきました。

……ええ、もうお分かりでしょう。アリサ・バニングスさん、そして月村すずかさんです。

実はというと、二人の状態に問題無かったので俺が去ろうとしたら見事に捕まってここに連れてこられましたというわけです。

俺は別にいいからと断ったのだが、アリサに「助けてくれた恩を返したいから」と言われて強引に流されてしまったのだ。

それにすずかの俺を見る目に何故か恐怖を感じて逃げられず、観念してアリサの呼んだ車に乗るしかなかったのだ。

車の中でお互いの名前と年齢の紹介をしたところで二人のことをやっと思ひ出したんだが、完全に忘れていた。

本人たちには悪いけど、影が薄くて見たことある程度でしか覚えてなかったという理由だとは死んでも言えないけど。

「そっいえば一真は何処に住んでるの？　ここら辺じゃ見かけなかったし」

「え〜と。それは、その……」

「？　どうしたのよ？」

「……実はというと、俺には帰る場所が無いんだ」

「え……？」

「それって、どういうこと？」

俺は少々迷ったが、正直に話すことにした。

嘘を言ったとしても、賢い彼女たちはすぐに見破ってしまうだろう。それに、自分を騙せない嘘はつくものではないと某先生が言っていたことでもあるしね。

まあ実際のところ、俺はこの二人には到底勝てないというのが最大の理由だ。

現に口でアリサには圧倒されっぱなしで反論すらできなかったし、今回の手当ても善意によるものだから余計に断りづらかったのもあるが、何より勝てる気がしない。

それにどっちにしる、ここからすぐに立ち去るつもりだったし、話したところで特に問題は無いだろう。

「俺にはいるべき家族も既にないし、帰るべき家も無い」

「そ、それって天涯孤独じゃない！ 今までどう生きてきたのよ！？」

「少し離れた廃ビルの一角に寝泊りしてるし、昼飯だってデパ地下の試食コーナーにでも行ってこようと思ったくらいだ」

「……本当？」

「嘘を言っても仕方ないだろうに。それに今時天涯孤独なんてありきたりだし、それがたまたま俺だっただけだ」

前世では普通に家族はいたし、住む家もあったが今は何も無い……ただそれだけだ。

既得権益とか大それたものじゃないが、当たり前にあつたものが無いというのは確かに辛い。

だが俺にもやるべきことがあるし、いつまでも不満に思ったり自分の境遇を考えてもしょうがないのだ。

さて、手当てもしてもらつたし、そろそろここから立ち去るとしよう。

いつまでもここには迷惑になるだけだし、俺のことなど早く忘れてもらったほうがいい。

本来俺はこの世界にはいないはずの人間、深く関わるわけにはいかないしね。

「さて、そろそろ帰るよ。手当てありがとな」

「……待ちなさい／待って」

「……え〜と、二人ともその手を離してくれると風樹さんは嬉しいのですが？」

「嫌よ／嫌だよ」

二人が俺の両肩に手を置き、逃がさないようにジャケットを握り締めている。

その力は俺の肩がメリメリという音を響かせる程強く、ある意味さっきの喧嘩の時より痛い。

それにしても、友人だけあってスngoイ息の合ったことだと思えますよ、本当に。

怖くて後ろを向けないから様子はわからんが、声と雰囲気だけでも妙な迫力を感じるしね。

このまま逃がしてくれそうには、無いだろうな。やはり正直に言うべきではなかったのだろうか？

……っつて、あ。

きゅくる〜

「」「」……「」「」

張り詰めた雰囲気の中、可愛らしく俺の腹の虫というか胃袋が鳴いたのですた。

ああ、この時ばかりは可愛らしい鳴き声が憎いし、おまけにどこぞの竜っぽい鳴き声が余計に憎さを倍増させている。
くそう、こんなところで世界大戦（お腹の中です）の狼煙を上げなくともいいのに！

「……はあ、鮫島」

「はい、お嬢様」

「昼食なんだけど、こいつの分も入れるように伝えて」

ははは、完全に逃げる口実を失いました。

皆さんすいません、俺のせいで迷惑をかけてしまいました本当に申し訳ないです。

そうして昼食を食べさせていただき、俺の胃袋は平和になりましたとさ。

お嬢様だけあっていいものを食べているんだなあと、今回の食事でしみじみ感じました。

出された料理は一見ありふれているように見えたけど、味がひと味もふた味も違って思わず関心してたからな。

そして昼食後、俺はアリサたちに中庭にまで奴隷のごとく強制連行されていた。

アリサは逃げようとしている俺に苛立っており、すずかは逃がさないよう俺をじ〜と見つめてくるから心臓に悪い。

この状況から逃げたい、今ほど現実から逃げたいと思ったことは前世を含めて今までに無いくらいだ。

「それで、アンタはどうするつもりなのよ」

「どうと言われてもな。昼食もご馳走になったし、そろそろ帰らせてもらおうよ」

「それって、一真君の言ってた廃ビルだよな？」

「ああ。見送りとかいらなからな、もとより行く当てなんて無いし」

あそこの廃ビル以上にいい場所があればそこに移り住むし、無ければあそこに戻るだけだ。

これ以上二人には迷惑などかけられないし、俺の問題は俺が片付けないといけない。

それに食事をご馳走になっただけでも十分すぎるほどの恩を返してもらえたし、お互いこれで手打ちでいいだろう。

「じゃあな、縁があつたらまた会おう」

「ま、待ちなさいよ！ そんなこと聞いたらほっとけるわけないでしょー!？」

「そ、そうだよー!」

「そう言われても十分恩は返してもらえたし、迷惑をかけるわけにはいかないよ」

そそくさと逃げようとする、再び二人に両肩を握り締められて逃げられない俺。

ああ、正直に話すべきじゃなかったな。二人に心配、そして迷惑かけっぱなしじゃないか。

何でもいい、この場から逃げる策は無いものかな、フォルセティ？

『（自業自得ですよ、マスター）』

「（うっさいわ！ マスターのピンチだから少しは助ける！）」

『（だが断る！ ……というより二人に勝てるような言い訳が浮かびません！）』

「（即答かよ！？ それに少しは考える！）」

フォルセティは俺に（助言的な意味で）何も言ってはくれない。

教えてくれ、五………っているわけないが、言わずにはいられたかった。心の中で言っておく。

そうしていると、二人の男女と執事の人がちらに近づいてきた。

何となく、女性のほうはアリサと似ているよう気がするが……もしかしてアリサママか？

普通に若く見える、多く見積もっても二十代後半にしか見えないくらい若い。

もう一人のアリサパパらしき人はそこまで若く見えないが、その分雰囲気は普通の人と何か違う気がする。

こう何というか、色んな意味でできる人っていう感じのオーラを発しているように思える。

やはり流石は資産家といったところだろうか。ああ、貧乏一般人の

俺には場違いこの上なさ過ぎて余計に逃げ出したくなってきた。

「パパ、ママ！」

「どうしたのアリサにすずかちゃん？ それに、その子は？」

「あ、いや、俺は帰りますので……」

予感的中、そして非常に拙^{ます}い。早く逃げないと本当に迷惑をかけちまう。

恩は手当てやら昼食やらで十分返してもらったのに、それ以上のことを望むなんて図々しすぎてできるわけがない。

それに、そこまですてもらったら、もう色んな意味で逃げる事ができなくなっちまう。

「えっと、実は……」

「ちょ、すずかさん！ 話さなくていいから！」

「「アンタは黙ってなさい！—真君は黙ってて！」」

「……………ハイ（ティウンティウンティウン）」

二人の黙れ発言に、俺は言う通りに黙るしかなかった。

今の気分は岩男シリーズで全クリ間際にゲームオーバーになった気分だ。

もう少しで逃げられると思ったのに、俺は某幻想殺しの学生みたく自分の幸運を消してるんじゃないだろうな？

『（おおマスターよ。しんでしまうとは なさけない）』

「（楽しんでんだろフォルセティ！？ それに作品に合ってねえよ！）」

『（バレましたか、流石は私のマスターです）』

「（当たり前だろう！？ バレない方がおかしいだろうが！）」

そして俺は半強制的に椅子へ座らされ、アリサとすずかが俺の事情を話している。

アリサの執事……鮫島さんが出入り口にいて逃げられないし、どうしようもない状況に陥ってしまった。

くそ、何か逃げる手立ては無いか？ そうだ、トイレに行くフリをして……って無理だろうな。

「ふむ、風樹一真君だったね？」

「あ、はい」

「まずは二人を助けてくれてありがとう」

「いえ、お礼を言われるほどのことではないですから」

俺は大したこととしていないし、見返りなんてこれっぽっちも求めていないのだ。

だからお礼を言われるのは非常に微妙な気分で、何というか気恥ずかしくて柄にも無く照れてしまう。

俺としてはありがとう、さようならで済めば一番良かったんだけどなあ。

「それと、君には家も家族も無いというのは本当かね？」

「……はい、事実です」

「そうか……」

アリサパパがそう言った後、少し考えるようにしながら俺を見つめてきた。

な、何だこの雰囲気は！？ 場の空気が重苦しい感じになってるぞ？ ヤバイ、アリサパパとアリサママ……いや、ここにいる人全員が発するだろう言葉が非常に怖い。

その証拠に、俺は冷や汗というか、脂汗みたいのが流れ出てきている気がする。

「一真君」

「……はい」

「ならばこの家に住まないかね？」

「……え？」

一瞬、自分の耳を疑ったが、すぐに現実であると理解できた。だが理解できて納得はできていない、その為に疑問符が口から出てしまっていた。

「二人の恩人をこのまま帰すのもしのびないし、事情を知った私たちとしても放っておけないのだよ。」

勿論君のことは調べさせてもらうが……」

「しかし、迷惑をかけるにはいきませんので……」

「それに、二人が君を放っておくように見えるのかな？」

「え？」

アリサパパが苦笑しながら視線を向けた先には、俺を睨む二人の子鬼っぽい夜叉がいました。

ああ、あの目は絶対に逃がしてくれそうに見えないし、たとえ逃げても地の果てまで追ってきそうだ。

もし、このまま逃亡して捕まってしまうかどうか……ある意味死ぬよりも辛い目に遭うかもしれない。

まあどっちにしろ、ここまでされれば逃げるのは困難というか、無理だと思うけど。

あとそれとは別に、アリサママがニコニコしながら俺を見つめているのが一番怖かったりする。

どう見ても笑顔はずなのに断ることなどさせない雰囲気発し、逃げようものならアリサたちみたいに追ってきそうだ。

つまり、状況としては外堀も内堀も埋まり、後は俺の降伏宣言を待つだけらしい。

さっきも言ったが断るのは無理、もとより逃げ道など何処にも残されてないのはわかっている。

はあ、やっぱり迷惑をかけてしまったなと俺は心の中で後悔から生じたため息を吐いた後……

「……はい、お世話になります」

俺は、降伏宣言を口にするしか方法はなかったのだった。

まあ、俺としても一番問題だったものが無くなって嬉しいけど、それ以上に迷惑をかけてしまつと考えると気が重い。

胸中複雑な気分のまま放つた言葉に、皆は優しくも温かい笑顔をしてくれていた。

「ごめんねすずか、こつちで勝手に決めて」

「ううん、アリサちゃんの家なら安心できると思つから」

当の本人はまだ納得いかない様子ではあるが、もつここに住むことが決定したのだ。

勝手に逃げるのは許さないし、そんなことをしたら何処までも追いかけて締め上げてやる、というのがアリサの気持ちだ。

すずかのほうはニコニコしてはいるが、おそらく似たような感情を抱いているのだろう。

「でもアリサちゃん、いいなあ……」

「何がよ？」

「だって一真君と二つ屋根の下で過ごすんだよ？」

「な!?! あ……あの、それは!」

すずかの言葉にアリサは顔を赤くし、言葉を濁らせて困っている。その様子を見てクスクスと笑うすずかは、どう見てもからかいモード（仮）みたいなものになっている。

よく落ち着いて考えてみれば、そんなわけないだろうというのは簡単にわかるだろう。

しかし、今のアリサからは冷静さが失われており、そこまで考えている余裕などこれっぽっちも無いのだ。

学校での成績は断然トップのアリサであっても、こういふところは意外に弱いらしい。

「ふふ、アリサちゃん可愛い」

「す、すずかあ！」

からかわれたことに漸くやっぴ気づいたアリサと、クスクスと笑う笑顔のすずか。

そんな微笑ましい光景があったとか、話題になっている本人は知る由も無かった。

「楽しそうだな、楓」

「ふふ、わかる？」 デビット

笑顔のアリサママ、もとい楓・バニングスにアリサパパ、デビット・バニングスは言った。

デビットも妻の笑顔につられていいのか、優しい笑顔をしている。

「当たり前だよ。それにしても風樹一真君か……中々面白そうなんだ」

「あら、あなたもそう思う？」

「ああ。それに、アリサも満更でもなさそうだ」

人を見る目に自信がある夫妻から見ても、一真は信じるに値する子であると見定めることができた。

何故なら、見ず知らずの人間を助けるにも勇気が必要であり、普通なら怪我をしてまで助けるなど並大抵の気持ちでできるわけもないからだ。

それに見返りを求めないで立ち去ろうとしたと聞いた時には、夫妻が驚きと同時に関心を抱くのは無理もないだろう。

また、何よりも夫妻が気にかけたのは、一真が天涯孤独で住む家も何も無いと聞かされたことだ。

両親も家も何も無い状況で、迷惑をかけたくないという姿勢の一真に、夫妻は放っておくことなど考えられなかった。

そんな夫妻の気持ちとアリサたちの気持ちが一致した結果、デビットはここに住むことを提案していたのだが、結果はこの通りだ。

「息子ができたみたいね？」

「違うないな。それにもしかしたら……」

「あらあら、それはまだ気が早いと思うわ。それに相手を決めるのはアリサ自身ですよ?」

「ふふ……そうだな、私たちは見守ってあげよう。早速だが鮫島、アリサと一真君のことを頼むぞ?」

「はい、かしこまりました」

しかし気が早いのではデビットさん? それに楓さんは中々にお茶目のようです。

はてさて、一真の問題は一難去ってまた一難のようである。

永遠の闇の破壊は一体どうなるのだろうか?

その答えは、先の見えない未来のみが知っている……と思わせてほしい。

第二話 問題解消？（後書き）

というわけで、第二話でした。

ぶつちやけ、やっちまった感がありますが、ごめんなさいとだけ言わせてください。

…そして、このままグダグダと無印に突入する予定となっております。

だが書きたい事は書いてるから後悔してない…って痛たた！ 石投げないで！

けど暫くこんな感じでグダグダになってしまつのは本当です。

それでも頑張つて書いていきたいと思えますので、宜しくお願ひします。

ではまた次話にてお会いしましょう^^ノシ

追記：全体の改訂をしました。

第三話 自称魔法使い、行きます！（前書き）

GW中に投稿したいと思ったのがこのザマだよ！

…とまあ、大変遅くなりましたが第三話です。

第三話 自称魔法使い、行きます！

俺の部屋もそうだが服、そして学校のことなど色々をやっていたらもう何日も過ぎていた。

学校については俺に戸籍が無いことがネックになる。そう思っていたが、特に大きな問題は起こらなかった。

実は戸籍が無いこともきちんと調べられていたようで、そこはコネやら何やらでクリアしたらしい。

恐ろしきはバニングス家といったところだろうか。

また、学校はアリサたちと同じ私立聖祥大附属小学校に行くことになった。

わざわざ学費の高い私立ではなく、近くの公立で十分ですからと言ってもバニングス一家は「却下」と素晴らしい笑顔で答えてくれました。

その間僅か一秒。どこのジヤムの人だよと思ったが、こう言われてしまえば俺には断ることもできなかつた。

それと一応学力試験もあったが、普通に合格していた。

まあ、大学生が小学生の試験を通過できなかったら本当にヤバ過ぎるし、落ちるわけにはいかなかったわけだが。

それと勉強についてはアリサがちよこちよこ手伝ってくれたが、「な、何で普通に解けるのよ!？」と怒られたのは記憶に新しい。

まあ、前世は大学生でしたからと言うわけにもいかないので苦笑いをするしかなかったが。

何にせよ、ここまでしてくれる皆さんに心から感謝している。俺も何かお返しできればいいのだが……。

さて、近況報告はこれくらいにしておこう。

俺は今、最初にいた廃ビル群の一角に佇たたずんでいる。

理由は単純に魔法訓練の為だ。イメージトレーニングはしてたが、訓練らしい訓練ができなかったからでもある。

訓練しておかないといざという時に何もできないというのは流石に嫌だし、こうして空いた時間を見計らって訓練を重ね始めている。だが少し眠い。時刻にして午前四時過ぎ、起きている子供はおそらく俺くらいなものだろう。

「フォルセティ、セットアップ」

『了解です、マスター』

その言葉と共に俺はバリアジャケット姿となり、自称魔法使い（笑）に変身する。

フォルセティも本来のソードライフルへと姿を変えて準備完了、つと。

「まずは遠隔操作系やりたいから、スフィアから行ってみよう」

『了解！』

俺の魔力でできた白い魔力スフィアがいくつも展開され、俺の周辺に浮かぶ。

スフィアを精密に操りつつ、対象の動きを正確に把握した上で緩急を加えないといけないので非常に難しい。

フォルセティにアドバイスを受けつつ俺はほんの少しずつ訓練し、やがて休憩のためにビルの屋上で寝そべっていると、空から光が降

る光景を目の当たりにした。

「あれ？ 今日って何かの流星群でもあったっけ？」

『いいえ、おそらくはジュエルシールドだと思われます』

「は！？ 確かなのか？」

『ええ、ちょうど二十一個で海鳴一带に飛来した様子ですし……間違いはないかと』

だが、ジュエルシールドが発動しない限り、俺たちは落ちた場所なんてわからないのだ。

それに、今落ちてきたなら主人公である高町なのはが魔法を持っていない状態……どっちにしろ戦力が無さ過ぎる。

俺にしても未だに中途半端な技量しか持っていないし、実戦でどれくらい動けるのかもわからないという状況に全俺が泣いた。

『どうしますか、マスター？』

「様子見をするしかない。全然納得できないが、な」

暫くしてユーノから助けてという念話が届いたが、俺には無視する以外に選択肢が無かった。

ユーノには悪いが、なのはが助けに来るまで待っていてくれ……本当にすまない。

『（そう言いながら、一通り手当てをして動物医院に置いてきたマ

スターがここにいるわけですが……」

「（べ、別にいいだろ！）」

念話が完全に途切れたところで、俺はどうしても放っておけなくなつて助けてしまった。

だって、怪我したままのユーノをそのまま放っておけなかったんだよ！ 悪いかチクセウと呆れた様子のフォルセイに半ば八つ当たりをしながら俺はバニングス邸へと帰つたのだ。

しかし、この行動が後に俺の知っている原作とは少しずつ違った話になるとは……この時の俺には想像もできなかったのだ。

「は〜い、今日は新しいお友達を紹介します。風樹君」

「風樹一真です。趣味は読書、特技は何処にでも寝れることです。宜しく願います」

俺の場合は転入というのかはわからんが、とりあえず登校初日である。

普通の自己紹介と挨拶に元気よく「は〜い！」と応えてくれたが、俺はまた小学生をやるのかという気分だ。

まあ、ここまでしてくれたアリサたちに悪いからやることはやるけど、ため息をつく程度は許してほしい。

「よろしくな、アリサ」

「ええ、何かあったらいいなさいよ？」

「了解。頼りにするからな、アリサ？」

「ええ、バンバン頼みなさい」

その後、授業後の休み時間に質問されるなど色々あったが、とりあえず無難に答えておいた。

肝心の授業の方も大学生だった俺にはさほど難しいと思えるものは無く、暇だから教科書の問題を片っ端から解いて時間を潰していた。それに転入初日だけあって、先生にもあまり指されることも無かつたし、とりあえずはこれでいいだろう。

そうして時間は過ぎてお昼休みとなり、俺たちは屋上でお弁当を食べている。

弁当は事前に手渡されたものだが、冷めても美味しそうに見える弁当は中々お目にかかれないので凄いと思う。

それを食べながら幸せだなあとと思う俺って、心底貧乏性が染み付いているようで悲しいが。

「将来かあ……」

そんな複雑な気分していると、一人の少女が何となくといった感じで言った。

ちなみにここには俺とアリサ、すずかともう一人いる……もう皆さんはお分かりであろう。

その子は茶髪のツインテールが特徴の女の子であり、物語の主人公である高町なのはさんです。

実はなのはとは今日、バスの中で自己紹介をしたので一応顔見知りであり、とりあえずは友達のようなものだ。

アリサが俺のことを紹介してくれて、お互い名前で呼ぶようになったのは本当に嬉しいと思う。

まだお互い話し慣れていないが、そこは時間が解決してくれるだろう。

しかし、俺にはこの子が十年後に魔王と呼ばれる存在とは到底思えない。

とらハ3はやったこと無いからよく知らんけど、高町家は突然変異をしやすい家系なのだろうか？

まあ、そんなに深く考えたところで答えは出ないというのはわかってるのだが。

「もぐもぐ」

「アリサちゃんも、すずかちゃんも、一真君も決まってるの？」

「私は一杯勉強して、お父さんとお母さんの会社を継がなきゃいけないかなって思ってるけど」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいかなって思ってるけど」

「そっか、二人とも凄いなあ……」

小学生という立場で将来についての授業とか、元大学生である俺の急所に軽く刺さっています。

正直な話、小学生で将来のことを考えているっていうのは少し早い

のではないかと思う。

俺も前世では大学生だったが、自分がどんな職に就くかは全然わかっていなかったわけだし……もぐもぐ。

「それで、一真はどうなのよ？」

「もぐもぐ……ん、俺は普通の人生を送ればそれでいいさ。それ以上は何も望まない」

「え……？」

俺がそう言うと、なのははどういうことかわからないような顔をしているが、事実なのだからしょうがない。

それとは別に、アリサとすずかの雰囲気は少しだけ沈んでいるような気がする……はて、何か変なこと言ったっけ？

「それじゃあ、なのははどうなんだ？ もぐもぐ」

「えっと、私は……やりたい事はあると思うんだけど、それが何なのかはつきりしなくて」

「ふ〜ん……一応これだけは言っておく。もし取り柄があったらからって、必ずしも物事はうまくいくことなんて無いし、逆もまた然りだ。

それに取り柄なんて無くとも人は生きていけるし、ましてや小学生の身で人生を今すぐ決める必要なんて無いさ。

無理に考えないで、自分がやりたいことをゆっくりでいいから探せばいい……もぐもぐ」

実はかなり情けないことを言ってるように思えてならない。

小学生が将来について真剣に悩んでいるのに、大学生だった俺は何も考えていないという有様なのだから。

まあやるべきことはあるんだけど、それ以外のことについてはとんとん無頓着になってるしなあ。

特に、永遠の闇を倒した後のこともまったく考えてないという、俺の行き当たりばったりさがそれを証明しているわけだし。

もう少ししっかりするべきなのだろうが、結局直る気がしないのは何故だろう？

『（無様ですね、マスター）』

「（さりげなく酷いぞフォルセティ！？）」

フォルセティのとても厳しい言葉に涙目になりそうだ。もうやめて、一真のライフはゼロよ！

それに、念話を使ってまで皮肉を言いたかったのか、コノヤロウ！？

「そっか、そつだよね……」

「そつだよなのはちゃん。なのはちゃんにしかできないことだってあるんだから、取り柄なんて関係無いよ」

「もしそんなこと言ったら頼つぺた引つ張るわよ？」

「にゃ！？ そ、それはやめて〜！」

うつむむ、この三人は見ていて羨ましいくらいの仲良しですな。

俺も女の子だけじゃなくて男同士でこういった友達がほしいですよ、いや本当に。

アリサたちと一緒に食事をしているだけで殺意の込められた視線を向けられるし、そのうち校舎裏にでも呼ばれるんじゃないかと思っているけど。

「……って、いい加減食べながら話すのはやめい!!」

「ひでぶ!?!」

何とも締まらないオチ、というかサーセン。

放課後、帰り道とは少し違った道を通つてある場所に辿り着いた。そこは榎原動物医院、俺がユーノに応急処置をして置いていった場所である。

「一真、ここなの?」

「ああ、ここに預けている」

「フレット、一体どんな子なんだろう?」

「確か、イタチの仲間だから……」

何故三人が一緒に来たのかというと、原因は俺の一言だった。

俺が少し動物医院に行つてくると言つと、三人が一緒に行くと言つてきたのだ。

しかもフェレットと聞いて余計に興味を持ったらしく、それなら皆で行こうということになったからだ。予想外ではあるけど、これくらいなら別に問題無いと思ったので断らなかつたけど。

医院内にいた獣医さんに話を通し、俺たちはユーノの様子を見させてもらった。

ちなみに俺は話を通す際、どうしてユーノを置いていったのかと獣医さんに怒られたが、まあそれはいいかと思えてしまった。

「……わあ、可愛い」「」

だって、あんなにいい笑顔でいる三人を見れば俺は何も言えないし。

ちなみにユーノについては命に別状は無いとのことなので、今すぐにも退院できるそうだ。

まあ軽くではあるが、応急処置は俺がやっておいたのがよかったんだろう。

初めて治癒魔法を使ったのだが、とりあえずうまくいっていたようで少しほっとしたのは内緒だ。

そう安心していると、フェレットユーノはなのはをじ〜と見つめていた。

俺の方もちらつと見てくるけど、視線は合わせたくないというか絶対に合わせない。

できるなら、物語を変えてしまったことから目も目を背けたいと思ってるからな。どう考えても現実逃避だけだ。

そうして見ていると、ユーノをどうするかと聞かれて俺たちが悩み始めると……

「それだったらこの子、明日まで預かってあげましようか？」

それを見かねた獣医さんがそう言うてくれたので、明日まで預かってもらうことが決定した。

専門知識を持っている人がいれば安心だしね……本当は人間だけど。

その後、俺たちは塾への近道を通って塾への道を歩いていた。

まあ、俺は塾には行かないし、アリサたちの送りに付き合うだけである。

それにしても、何となく嫌な感じの魔力が漂っているのを感じ取れる。

朝方俺がユーノを助けに来た時にはこんな魔力の残滓なんてなかったはずなんだけど。

可能性としてはジュエルシードが一番高いけど、とりあえずフォルセティに聞いてみるか。

「（フォルセティ、この魔力つてもしかして……）」

「（ええ、おそらくジュエルシードですね。しかも魔力の残滓^{ざんじ}だけでここまでだと、発動しているのは確定かと）」

「（そうか、なら後でこちら辺の魔力を浄化しに来よう。できるんだろ？）」

「（ええ、今のマスターでも可能ですよ。そう難しいことではないですしね）」

ここをいつまでもこんな状態にしておくわけにもいかないし、塾に着いたらまた来るとしよう。

そう考えながら三人を見ると、何か様子がおかしいことに気づいた。

「何かここ、変な感じがするんだけど……気のせいかな？」

「そう言われてみればそうね。何か、気持ち悪い」

「私も道を変えた方がいいと思う。何かここ、気持ち悪い」

意外なことに、魔力の無い人でも漂う魔力の感じの悪さは肌でわかるらしい。

ともかく、早くここを離れないと色々と拙ますいだろう。

元々ここは立入禁止になっているそうだし、こんな魔力が精神的にもいい影響があるわけでも無い。

現にアリサたちが気持ち悪いと言ってる以上、さっさと引き返すのが一番だろう。

「仕方ないわね。それじゃあ、いつもの道から行きましょ？」

「……さんせー」「」

そうして俺たちが来た道に戻り始めた時であった。

俺は何かを感じてその方向を見ると、何か近づいてくる気配がした。

しかも感じられる気配は漂う魔力とよく似ており、こちらに急接近している。

『(マスター、ジュエルシードの反応です!)』

「(ああくそ、どうしてこんな時に来るんだよ!?)」

念話を終えた瞬間、俺たちがさつきまでいた場所は地面が抉れてい
た。

すぐに何かが強くぶつかったような音がこの周囲に響き、ドオンと
いう木が倒れる音とメキメキという裂ける音に俺たち全員が振り向
いた。

「え、えええ!?!」

「な、何!?!」

「な、何よ、あれ!?!」

黒いケモノみたいな気持ち悪いバケモノ、確か原作の最初になのは
に封印された奴だった記憶がある。

それにしても少し登場が早すぎる。もしかして、俺が歴史を変えた
からこんなことになったのか?

くそ、タイミングが非常に直しくないというか、空気が嫁というか
……このKYめ!!--

それはともかく、この状況はかなり拙ますいといえる。

なのははまだ魔法を手にしてないし、アリサとすずかはそもそも戦
う手段すら無いからどうしようもない。

加えてなのはが魔法を手に入れるにはユーノとレイジングハートの
存在が不可欠だが、生憎とこの場にユーノはいない。

つまり、対抗手段を持っている俺が魔法を使つてるところを見られ

ないように何とかするしかないということだ。

「皆は逃げる、ここは俺が引き受ける」

「む、無理よ！ だから早く……」

「一真君、無理だよ！」

「一真君！」

そうしていると、バケモンはぶつかった場所から俺たちの方に目を向けた。

せめて逃げる時間くらい稼ぎたかったが、これではおそらく逃げ切れないだろう。

スピードも破壊力も子供である俺たちでは到底歯が立たないし、追いつかれてやられるのは目に見えている。

もう、この状況で魔法のこととか今後のことを考えてる場合じゃないな。

そう考えた俺はポケットのフォルセティを取り出し、黒いバケモンを睨みながら言葉を紡ぐ。

俺が持っている力を、今はただ護る為の剣として振るうトリガーとして発動する為の決意をフォルセティに込める。

「大丈夫……フォルセティ、セットアップ！」

『了解！』

俺は白い光に包まれるが、それはほんの一瞬。そして俺は……

「自称魔法使い……ただいま参上、つてな」

俺は、白い戦士を模したバリアジャケットを身に纏い、黒いソードライフルを手にした魔法使いへと姿を変えていた。

第三話 自称魔法使い、行きます！（後書き）

ようやく無印に突入しましたが、長くなった上に詰め込みすぎた感があります。

それに、そろそろ番外編というか外伝も書いてみようかなとは思ってますけど、いつになるやら。

…何はともあれ、頑張って書いていきたいと思しますので宜しくお願ひします。

では、また次話にて会いましょう^^ノシ

追記：全体の改訂をしました。

第四話 これ以上に無くバシたぜ（前書き）

さくつと書けたので早めに投稿してみました。

後で誤字脱字の修正、そして加筆修正もするつもりです。

第四話 これ以上に無くバレたぜ

ジュエルシードのバケモンがかなりのスピードでこちらに向かってくる。

あんなものに当たれば大怪我は免れないだろうが、こちらには対抗手段はあるので心配す必要はない。

どっちにしろ、後ろには三人がいるからバケモンの攻撃を避けるわけにも行かない。なら、バケモンを一撃で倒す魔法をぶつけるだけだ。

「
「!」

「悪いが、俺がいる時点でチェックメイトだ！」

そのまま飛び掛ってくるバケモンに、フォルセティの銃口を固定する。

体の魔力をフォルセティの銃口に集中させながら、俺は魔法のイメージを想定する。

イメージするのはフォルセティの原型の武装の一つであるライフル攻撃。

それを魔力と共に撃ち出すイメージを一撃に込めて、俺はバケモンの核しんぞうを穿うがつ引き鉄を引いた。

「穿うがて、ストライクブラスト！」

「
「!?!」

そう言った瞬間、白い魔力の奔流がバケモンを呑み込み、奔流は空

に向かつて消え去っていく。

そして、その場に残ったのは青い宝石……もといジュエルシールドだが、とりあえず回収しておこう。

また暴走したら周囲に危害が及ぶ可能性もあつて大変だし、もしかしたら何か使い道があるかもしれないしな。

「封印、及び回収完了。ふう、終わったぜ」

『お疲れ様ですマスター』

疲労によるため息を隠すこと無く吐き、どうしてこうなったのかを考えたくなった。

俺は別に大したことはしていないはずなのに、どうしてこんなことになつてしまったのだらうと。

しかし、俺に対して厳しい現実はそのような時間を与えてくれるわけが無かつた。

何故なら後ろの三人から放たれる強い何かで振り向いてみると、俺に考える時間など無いことが直感で理解できたからだ。

イメージ的には「J〇J」の背景音みたいなゴゴゴつてやつが三人、特にアリサからはそれが目に見えるほどのオーラが発せられている。

こんな三人を普通の男の子が見たら腰を抜かすだらうな。俺だつて一目散に逃げ出したいくらいだ。

「一真、今のアンタの姿……一体どういうこと？」

「どう、というのは何のことやら理解できないな。それに塾に行かないといけないだろ？」

「と・ぼ・け・る・な！ それに塾どころの話じゃないのよ！」

やれやれ、誤魔化すことはできないとは思ってたけどやっぱり無理だったか。

アリスの後ろにいる二人も俺のことをじっと見つめているし、言い逃れはできそうにもない。

でもアリスさんや、せめて塾は行きましょうぜ？

君のような成績優秀者がそんなことを言ったら、講師の人たちはきつと涙目になるのは確実ですよ？

まあ、言っても聞いてくれないのは既にわかっているので、もう言うつもりは無いが。

「やれやれ、バラすつもりはなかったんだが仕方ない。とりあえず場所を変えよう」

「ええ、洗いざらい吐いてもらうから覚悟しなさいよ」

「ははは……お手柔らかに」

もしかしたら、今の三人ならさっきのバケモンだって倒せるんじゃないだろうか？

そんなありもしないことを考えながら、俺たちはその場を後にしたのだった。

「つまり、アンタは魔法使いで、さっきの黒いのはジュエルシード

ってというのが暴走して生まれたというわけね？」

「ああ、その通りだ。フォルセティは魔法使いの杖といったところだな」

『私の場合、杖じゃなくて正しくはソードライフルですけどね』

「揚げ足取りはやめい、フォルセティ」

『サーセン』

結局のところ、三人は塾をサボった。

そして俺はというと、近くの公園で白状しているというわけです、チクセウ。

ちなみに、俺の魔法のこととジュエルシードのことは話したが、こんなことになった原因と俺の目的は伏せておいた。

永遠の闇って言われても一般人は絶対に理解できないだろうし、今回の事情はユーノが話すべきことだからだ。

「それにしても、何で話さなかったのよ？」

「魔法は必ずしも良いことばかりじゃないし、気軽に話せることでもないしな。信頼してても言いにくいことなんて誰にでもあるだろう？」

「それは、そうだけど……」

『マスターの使う魔法は特殊でして、目立つわけにはいかなかったのですよ。』

それにマスターの力を利用してしようとする組織も無いとは言えませんが、マスターも戦いを好みませんので』

理解はしたけど納得できないといった表情のアリサだが、事実なのだからしょうがない。

魔法だって確かに便利で凄いい物だ。しかし、便利であるが故に悪用される可能性があるのも事実だ。

夜天の魔導書が闇の書になってしまったという例だってある以上、某強欲の人の言うようにありえないなんてことはありえないんだから。

まあ、本当の理由は管理局に目を付けられたくないからでもある。

下手すれば管理局の腐った部分に目を付けられる可能性もあるので、それだけは避けたい。

もしかしたら永遠の闇と何らかの関係があるかもしれないが、今はジュエルシードに専念したいしね。

「だから悪いんだけど、このことは内緒にしておいてくれ。その代わり、全力でアリサたちを守ってみせるからな」

「……ふ、ふん！ まあいいわ、私も聞きたいことは聞けたし。二人はコイツに聞きたいことある？」

「う、うん、私も聞きたいことは聞けたから、特には無いよ」

「わ、私も、特に無いかな」

何故か顔を赤らめている三人だが、一体どうしたのだろうか？

聞いたら殴られそうだから聞かないでおくけど、何か大事なことを忘れてる気がする。

何だったっけ……ああ、ユーノのことを完全に忘れてたな。

「そういえば話は変わるんだが……あのフェレット、どうするつもりなんだ？」

「あ、そういえばそうね。でも私の家は犬を飼ってるし……」

「私も猫を飼ってるから、その……」

「私の家も喫茶店をやってるから、難しいと思う……」

俺は言うまでもなく、バニングス邸に住んでいるので除外される。けど全員駄目というわけでもない、原作通りなら高町家でOKが出るはずだ。

それなら、三人に飼っていいかどうかを聞いてもらうことにしよう。

「それじゃあ、これは親御さんと相談してみるといいか？」

「「「そうね／＼うん／＼そうだね」「」」

とりあえず、こうしてこの話はお開きになった。

それにしても結構遅くなってしまったな、塾をサボった言い訳どうするんだらう？

俺のせいといえば俺のせいだけど、願わくば三人がうまく誤魔化してくれることを祈っておこう。

バニングス邸に戻って夕食を頂いた後、俺は部屋のベッドに横になつていた。

全身から力が全部抜けたような大きいため息を吐き、今思っていることを口にした。

「ふいふ、これからどうなるかな？」

『正直わかりませんね。けれど原作知識が少しずつ役立たずになつていくのは確かだと思えますよ？』

「それは言うな、頼むから」

ユーノを助けたことは後悔してないけど、まさかここまで変わるとは思わなかった。

三人に魔法のことがいきなりバレて、なのはには魔法の存在を先に知られてしまった。

この出来事が良いことなのか悪いことなのかわからないが、問題は増える一方だ。

正直、頭の中がこんがらがっている。深く考えても仕方ないのはわかってるが、これからどうすればいいんだろうか？

一寸先は闇という諺ことわざがあるが、今の俺はまさにそんな感じだろう。

「これで高町家の人たちがユーノを引き取ってくれるのかもわからなくなつたし……」

『そこは彼女に任せましょう。多分大丈夫だと思いますよ？』

「そっだといいんだけどな」

少しだけのズレがどう影響するのかがわからない以上、俺たちは結果を待つしかない。

それがわかっていても歯がゆいわけで、やるせない気持ちがこみ上げてくる……そんな時だった。

「む、なのはからのメールか。何々？」

フェレットのことは家族の皆がOKしてくれたので、飼うことになりましたという内容だった。

ついでに明日の帰りにでもフェレットユーノを引き取りに行くとのことだ。

やはり、原作における大本の部分は変わらないようだ。まあ、結構変わってるけど気にしないほうが良いだろう。

それと、俺が何故携帯を持っているのかと聞く奴がいるだろうが、数日のうちに用意されたものだと思ってくれ。

本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになっているし、これ以上俺の口から言いたくない。

渡された小遣いだって使うのが勿体ないくらいに思えるんだから、これ以上は勘弁してほしい。

『よかったですね、マスター』

「ああ……って、今度はさすがから？」

なのはに続いて今度はさすがからの電話だけど、こんな時間にどうしたんだろうか？

まあ出ない理由なんて無いし、別に気にするほどのことでもないか

ら別にいいんだけど。

「もしもし、一真君？ こんな時間にごめんね？」

「いや、別に構わないよ。それで、どうしたんだすずか？」

「今度の日曜の午後、時間空いてたら一人で私の家へ来てくれないかな？」

「日曜？ いきなりで大丈夫なのか？」

俺は別にいいが、すずかの方に色々と迷惑をかけてしまうと思う。日曜というのは家族と出かける絶好の機会でもあるため、俺が行くのも気が引けるからだ。

それに、一人で来てほしいというのは一体どういうことなのだろう？ なのはたちに聞かれたくない話でもあるのかと思ったが、俺には心当たりが無いからわからない。まあ色々と気になることはあるが、折角のお誘いを断る理由も無いから別に構わないけど。

「こっちは大丈夫。もし都合が悪ければまた今度にするんだけど…」

「いや、こっちもOKだ。帰っても宿題をこなすくらいだけだし、基本的には暇人だからな」

「そっか、ありがとう一真君」

「別にいいさ。それじゃあ日曜の件、了解したよ」

「うん、それじゃあまた明日……」

「ああ、また明日な」

そうしてすずかとの通話を終え、携帯を枕元に置く。

今更だが、本当に良いことなのか悪いことなのか正直よくわからなくなってきた。本当にどうすればいいんだろうな俺は。

『忙しくなりそうですね、マスター』

「俺としては、本当に穏やかな生活を送りたいんだけどな」

『それは無理でしょうけどね、マスターですから』

「おいおい、俺だからっていつのはいくらなんでも酷いぞ。でも、何故か否定できないのが非常に悔しい」

とりあえず、これから忙しくなるだろうし、休めるときに休んでおいたほうがいいだろう。

体はともかく、今回は精神的な疲労が嫌でも自覚できるレベルになっ
てきてるしな。

「ともかく、今日は早めに寝るとするよ。精神的に疲れたし」

『その方がいいでしょう。それではおやすみなさい、マスター……』

目を瞑り、視界は黒一色に染まる。

そうしていると、少しずつ自分の意識が遠のいていく……ああ、お
やすみなさい。

……………え……………か？

五月蠅い、俺の貴重な睡眠を邪魔しないでくれ。

今日はただでさえ精神的に疲れているんだから休ませてくれよ。

……………声が……………ますか？

夢の中っていうのはこんなにも喧しいものだったのか？

それだったら悪夢だな、こんなにも喧しい夢なんぞ悪夢以外の何物でもない。

頼むからこんなにも五月蠅い悪夢なら直ちに覚めてくれ、本当に。

僕の声が、聞こえますか？

いい加減、現実逃避は止めておくか。

それにしても念話って安眠妨害だよな、寝てても響いてくるし。

特定人物からの念話妨害装置でもあればいいのにな。需要は俺だけだと思っが。

『マスター、二十分と十五秒ぶりにおそようございます』

「ああ、おそよう……………ってフォルセティにも聞こえたか？」

『はい、十中八九ユーノからの念話ですね。応じなくていいんですか？』

「……別にいらないだろ。傷は一通り治ったみたいだし、これ以上俺がお節介をする意味は無い」

なのはが原作通りに魔法を手にしないと困るし、俺はできることなら裏方に徹したいのだ。

俺の願いとして、永遠の闇を倒す以外にはごく普通の少年として生きていきたいと思っている。

それに考えすぎかもしれないが、俺の魔法はある意味破壊と創造というコインのようなもので、一介の人間が持つには大きすぎる気がするからだ。

だから気軽に使いたくないし、使う機会が無いならそれに越したところなど無いのだから。

あと、俺の魔法について管理局が目をつける可能性が極めて高いことに注意しないといけない。

自分たちとは異なった魔法を使える人間は魅力的だろうし、人手不足の管理局が放っておくのも考えにくい。

最悪、管理局（自分たち）に恭順しないなら貴様は次元犯罪者だと決め付けるかもしれないし、逆にしつこく勧誘されるかもしれない。

まあ、どちらにしても従うつもりは無いし、徹底的に抗わせてもらうつもりであるが。

「それじゃあ寝直す。どっかのフェレットもどきのせいで気分も最悪だし、余計に疲れた」

『はい、二度目になりますがおやすみなさいマスター』

そうして、俺は再び眠りにつくのだった。

第四話 これ以上に無くバレたぜ（後書き）

魔法についてバレました、の話でした。

作者もここから話はどんどん進んでいくかと思ったら、そんなことは無かったという（・・・）
それと次の話は前編・後編になりますので、あらかじめご理解ください。おまけに本編は進みませんorz

…それにしてもありきたりな話になってきてるような気がしてならない今日この頃。

加えて、書きたい事を書きなぐっているようなイメージなので色々と荒くなってきたしなあ…精進せねば！

…これからも頑張って更新をしていきたいと思しますので、宜しくお願ひします。

追記：全体を改訂しました。

第五話 自称魔法使いの憂鬱（前編）（前書き）

連続投稿その一です。

ちなみに五話と六話（後編）の主演はさすがにだったりします。ぶっちゃけ、ありえねえというツッコミがあるとは思いますが、生暖かな目で見てもらえると嬉しいです。

誤字脱字には気をつけてますが、何かありましたらお気軽にご指摘下さい。

第五話 自称魔法使いの憂鬱（前編）

翌日の放課後、なのはは無事にフェレットユーノを引き取ることができた。

俺としては喜ばしいことではあるが、今後どうなっていくのかが読めなくて怖かったりする。

まあ希望がある反面、不安も同じくらい大きいのは仕方ないといえはそれまでだが。

さて、本題に入ろうと思う。俺は今、魔法のことを話した公園にいる。

何故此処にきているのかというと、夜中であるのにもかかわらず呼び出されたわけです、はい。

しかも呼び出した本人がまだ辿り着いていないという事態、ぶつちやけ勘弁してほしい。

「フォルセテイ、俺ってどういう目で見られてるんだろっな？」

「私にはわかりませんよ、人の見る目など」

「かつこよく言ったつもりか？ それにお前は人じゃないだろうに」

『サーセン。しかし遅いですね、約束の時間から三十分経ってますよっ。』

ええ、呼び出しをされてからもう三十分も経過してるわけですよ。

流石に事故にでも遭ったのかと心配になってるし、同時にまだ来ないのかと苛立ちもするのは当たり前はずだ。

これですっぽかされたとなったら腹いせに頬つぺたを引っ張ってや

ろつかない……って、ようやく来たか。

「ごめんね、遅くなっちゃって」

「いや、別に構わないさ。それで、呼び出した理由を教えてくださいか……なの？」

俺は虚偽などを許さないつもりで強くなのはを見据えた。
当の本人は少しだけ怯えたように見えたが、すぐに元に戻って俺を見る。

それでも少しオドオドしてるというか、どう言ったらいいのかわからなそうにしてるけど大体の事情はわかる。

だってなのはだけじゃなく、フェレットユーノと一緒に来たんだから今回のことで確定だろう。

十中八九ジュエルシード関係、もとい魔法関係だ。

「えっと、それは……」

「それは僕から話させてください」

「……ふむ、いいだろう」

「え？　一真君驚かないの？」

「別に驚くほどのことでも無いだけだ。で、何だ？」

フェレットが言葉を発することに驚いているようだが、原作を知ってるからどつっていうことも無い。

さてさて、一通りの話を聞いてやるか。内容はわかりきっているけど。

ユーノから聞かされた内容は一部を除いて原作と同じであった。

自身が異世界の魔導師であり、遺跡発掘を生業としているスクライアー族出身であること。

今回発掘したジュエルシードを輸送中に事故で海鳴にばら撒いてしまったこと。

それに責任を感じて一人で集めようとしたが封印に失敗して大怪我をして動けなくなったこと。

助けを求めるために念話で呼びかけたが、たまたま俺に助けられたのはに引き取ってもらったこと。

そして現在に至るところまで、ユーノは話し終えたのだった。

「……話はわかった。つまりジュエルシード回収に手伝ってほしいということだろ？」

「はい、その通りです」

フレットユーノが何やら可愛いらしく落ち込んでいるように見えるが、それもそうだろう。

任された仕事で事故とはいえ大失敗をしたんだから、当然と言えば当然だ。

そして、なのは経由で俺が魔法使いであることを聞いて、協力をできないかと頼みに来た、か。

だが、今の俺は色々入り混じった怒りで頭がいつぱいになった。

「ユーノ、お前どこまで人のことを侮辱するつもりだ？」

「なっ！？ そ、そんなつもりは……」

「一真君！ どうしてそんなこと言うの！？」

「俺にはな、コイツがやるべきこともしないで失敗を覆い隠そうとする馬鹿にしか思えないんだよ。」

はつきり言つて不愉快極まりないし、俺じゃなかったら真っ先に手が出ていてもおかしくないくらいだ」

「……………」

「それに、今回のことだつて一人でやれることじゃないというのも、極めて危険であることもユーノ自身が一番わかっていたはずだ。」

なのに今回の有様は何だ？ 危機管理能力や先見性が欠けていると言われても文句は言えないはずだ」

アクシデントがあれば直ちに連絡するべきだし、ジュエルシードが危険とわかっているなら一人でやること自体がおかしい。

専門家であつてもミスは付き物である以上、何事においても万全を期すのが当たり前なのだ。

それなのにユーノはそういうことを考慮してない上に、自身の力不足で一般人であるなのはたちを巻き込んでいる。

「それにな、お前は最初にやるべきことをやらないで協力を求めるつていうのもお門違いだ。」

たまたま俺がいたからよかったものの、なのはたちはジュエルシードの一つで危ない目に遭ったんだ。

それなのになのはたちへの謝罪はおるか、その家族への謝罪や事情説明も何も無しに協力してほしいだと？ ふざけるのも大概にする！」

「くっ……う……！」

別に今回はユーノだけの責任じゃないということは俺だってわかっている。

だが、魔法が使えることと多少の知識があることを除けば、なのはたちと同じで子供でしかないのだ。

そんな年場もいかない子供に重圧をかけるスクライアー族、そして責任を取る上で必要なことをしないユーノに怒りを感じている。

その怒りの捌け口をユーノに向けてしまったが、俺には言わずにはいられなかった。まったく、大人気なさ過ぎるな、俺って奴は。

「それになのは、お前杖と契約したんだろ？」

「う、うん。ユーノ君が私に才能あるって。それでレイジングハートと契約して……」

「その力が、お前の思ってる以上に重い代物だと知ってて言ってるのか？」

「え……？」

「今は非殺傷設定があるが、一つ間違えば取り返しのつかないことを引き起こすことをユーノから聞いたんだよな？」

「……聞いて、ないです」

どうしてこつも重要なことを後回しにするんだろつなと思ひながら、俺はため息を吐いた。

下手すりゃあ、核ミサイルの発射スイッチを幼児の手の届くところに置くのと同じなんだぞ？

まあ、そんなことはしないだろうが、簡単にでもいいから伝えておくべきだろうに。

とりあえず、今後のこともあるから二人には少しくらい考えてもらおう。

俺としては手伝ってやってもいいんだが、今はお互いに頭を冷やす時間が必要だろう。

それにこれ以上ユーノと話していると、いらぬことまで口にしてしまいそうだしな。

「ユーノは人に頼む前にやるべきことを済ませること。なのはは力について今一度よく考えること。」

これを達成したら俺はいつでも手伝ってやるし、その時には俺に言え。それじゃあな」

俺は二人にそう言って公園を後にしたのだった。それにしても精神的に疲れたな、早く帰って眠ることにしよう。

日曜日、すずかとの約束の日である。

前もって場所を聞いていたので特に迷うこと無く辿り着いたわけだが……

「なあ、この目の前にある豪邸をどう思う？」

『すごく………広いです』

ええ、門前でもわかるくらい広い上に威圧感みたいなのが感じられましたが、はい。

今の俺が言つべきではないが、広すぎる豪邸に住むってというのは色々と勿体ない気がする。

貧乏性な俺なんて、固定資産税とかでいくら払ってるのかと真剣に考えちまうし。

「ま、気にしていても仕方がない。とりあえず、ポチツとな」

呼び鈴、というかブザーと思われるものを押すと来客を知らせる音が響く。

しかし何だろう、この音を聞くと無性にダッシュして逃げたくなるのは何なんだ？

まさか、俺にピンポンダッシュの才能があるとでもいうのか！？いや、あつたら困るが。

「はい、どちら様でしょうか？」

「本日、お招きいただいた風樹一真と申します。月村すずかさんはご在宅でしょうか？」

「はい、少々お待ちください」

ブザー越しの返事を終え、特にやることもないのでぼくと空を眺めて時間を潰す。

そういえば今日は雲一つ無い青空で、実に清々しい日だと改めて思う。

こんな日には縁側で茶菓子と緑茶でまったりとするといいんだよねあ……ジジくさいって言わないでくれよ？

「お待たせいたしました、どうぞお入りください」

「あ、はい」

門が開き、俺はゆっくりと本邸までの道のりを歩く。

そういえばバニングス邸も門から本邸まで少し歩くんだよねあ。

待てよ？ 何で名士の家は無駄に邸宅までの道が長いのか、中々面白い疑問かもしれん。

まあ、特に理由が無いと答えられたら問題も何も無いんだけど。

「一真様、いらっしやいませ」

「あ、はい。お招きにあずかります」

軽く会釈を交わした後、メイドさんの後についていく。

ちなみに後でわかったことだが、この人はメイド長をやっているノエルさんというらしい。

ノエルさんが扉に手をかけて開くと、すずか以外にもう一人女性がいた。

皆さんにはわかると思いますが、すずかのお姉さんである月村忍さんでした。

服装はお嬢様らしくなく、結構ラフというか庶民的な格好であったが美人であることに変わりはない。確かなのはお兄さん、高町恭也さんの恋人なんだよな……くそう、羨ましいぜ。リア充爆発しろ。

「一真君、いらっしやい」

「ああ、少し遅れちゃったかな？」

「ううん、ちょっと早いくらいだったかな」

「そうか、遅れてなくてよかった」

すずかが笑顔で迎えてくれたけど、何となくいつものすずからしくないような気がする。

たぶん、この後に話す内容が影響しているんだろうけど、心なしか笑顔に元気が無い。

こんなすずかは見ていられないな、早く話を終わらせてこれ以上落ち込まない程度に事情を聞いてみるとしよう。

「それで、すずかのお姉さんとお見受けしますが……その、凝視するのは止めていただけませんか？」

「あら、ごめんなさいね。すずかが初めて興味を持った男の子だから、つい気になっちゃってね」

「別にいいですよ。大切な家族に寄りつく男を良く思わないのは至極当然ですしね、気にしていませんよ」

原作を見た限り、すずかたちと親しい仲であった男性は殆どいなか

つたと記憶している。
タイトルに魔法少女が付いてるだけあって登場するのが女性ばかりだったし、男性陣はさぞ肩身が狭かっただろう。
実際、俺も周りが女の子ばかりで男の子の友達があまりいないって
いう状態……ああ、泣ける。

「あらら、怒っちゃった？」

「いえいえ、怒っていませんよ。それと紹介が遅れましたね、風樹
一真です。以後お見知りおきを」

「すずかの姉の月村忍よ。すずかを二度も助けてくれた君にお礼を
言いたくてね、直接来てもらいたかったのよ」

「当然のことをしただけなので、お礼を言われるほどではありませ
んよ。実際俺は大したことはしていませんしね。」

……それはともかく、月村さんが俺を呼んだのはそれだけではな
いのでしょうか？」

お礼を言うだけであれば、わざわざすずかを通じて俺一人だけを呼
ばなくてもいいのだ。

つまり、今回招いた理由が内密な話であり、すずかが無理して平静
を装っていることに関係しているのだろう。

まあ、これは無い頭絞って考え出した推測で、証拠も何も無いから
精々心当たり程度だ。

おそらく魔法のことだと思っけど、それではすずかがそこまで無理
をする理由になりにくいんだよね。

それに、もしかしたら魔法のこととは関係無い話である可能性も十
分あるし、結局は推測の域を出ないのだが。

「よくわかったわね」

「まあ、さすがが何となく無理している時点で何かあるなと疑問に思いましたが……月村さんの視線で何となくわかりました」

「そう。まあ、立ち話もなんだからその席に座ってもらえるかな？」

「はい、ありがとうございます」

忍さんに席に座るように促され、俺は宛がわれた椅子に座る。

この椅子も高級品なんだろう、色とか材質とかがとても良い感じで高級感が感じられる。

しかしそんな考えとは別に、この場の空気が重苦しくピリピリとした空気になっていることに気づいた。

それに、さっきからすずかは微妙に俯いていて表情は見えないし、月村さんは俺を真剣な眼で見つめてくるし、一体何なのだろうか？

……どっちにしろ、真剣な話であるのは間違いないようだけど。

「それで、話というのは何でしょうか？」

「……風樹君、君は吸血鬼って知ってる？」

「世間一般的な吸血鬼という知識程度ですが……」

俺の知ってるのは型月の吸血鬼とか、幻想郷のおぜうさまとか、どこぞの魔法先生の真祖の吸血鬼など様々いる。

俺の知る吸血鬼と呼ばれる存在は、日の光を浴びると消滅したり火傷を負ったり弱まったり、水が苦手という話などがある。

だけど、俺には例外が多すぎてどれが正しい基準なのかわからないんだよ。全部アニメやゲームの話から得た知識だし。

それに実際の吸血鬼を見たことも無いから詳しく知らないのだが、それがどうしたというんだろう？

「実はね、私たちは夜の一族っていう吸血鬼の末裔なのよ」

「……吸血鬼、ですか。でも、それがどうかしたんですか？」

「……は？」

「いや、だから……貴女たちが吸血鬼であったとして、それがどうかしたんですか？」

別に驚かなかったわけではないが、俺自身が非常識の塊なので驚きが薄く薄かった。

まあ、今回の話はすずかたちにとって重要なことだろうけど、俺は吸血鬼だからといって接し方を変えるつもりは毛頭無い。

たとえ吸血鬼であったとしても、幸せになつてはいけないということなど無いし、人として生きたいと願う人だっているのは当然だろう。

それに、俺なんて永遠の闇を倒す為に転生し、アニメの世界に送られた人間だ。

こんな俺みたいな人間と比べれば、吸血鬼なんてまだまだ可愛いレベルにしか感じない。

これは多分一度死んで魔法使いになった影響からか、こういうこと

に対する感覚が麻痺してるのかもしれない。

これで本当に「異常」への仲間入りを果たしたことを認めるのは悲しいけど。

「どうって、吸血鬼だよ!? ほ、ほら!」

「うん、目が赤いですね。充血ですか? それとも写 眼ってやつですか?」

「ち、違っわよ! それに 輪眼って何!?!」

「……とまあ、ボケるのはここまでにしておいて、本題に入りましよう」

「ちよ、ちよつと〜!」

和ませようと思ったのに、場の空気が何とも形容しがたくなってしまった。

とりあえず、これ以上ボケると月村さんから出ていたカリスマ(?) っぽい何かが崩壊しかねないから止めておくけど。

『(見ことにシリアスブレイクしましたね。流星は私のマスターです!)(』

「(褒めるなよ、褒めたって何も出ないぜ?)」

俺たちが念話でふざけている間に忍さんも落ち着いたようで、目も普通に戻っていた。

だが月村さんとすずかが何かどつと疲れたような顔をしているが、

それは見なかったことにしておこうと思う。

さて、ここからは俺の気持ちを正直に伝えるとしよう。忍さんもきちんと話してくれたしな。

「たとえ吸血鬼であったとしても、すずかや月村さんとの付き合い方を変えるつもりは一切無いですよ。

ああ、誰にも言わないで欲しいというのだって死んでも守りますし、そちらも俺の魔法についてもできるだけ口外しないよう、お願いいたしますね？」

「それはこっちもお願いしたいけど、吸血鬼って聞いて怖くないの？」

「怖がる理由も無いし、それ以前に月村さんは危害を加えるつもりも無いでしょう？」

それに、こうして真剣に話してくれましたから、信頼するのには十分と判断できましたしね」

「……私が嘘をついているかもしれないのに？」

「それは無いでしょう。貴女が嘘をつく理由が無いし、自分たちの立場を危険に晒してまで正体を明かしたのがいい証拠です。

俺を試すとか、記憶を改竄する等の目的や手段があればどうなるかはわかりませんけどね。

それに、念を押したところに月村さんの優しさが見受けられましたから、疑うなんて俺にはできませんよ」

まあ、最初から月村さんとすずかを信じられると思ったから信じただけで別に他意は無い。

これですずかに元気が無かった理由が何となくわかったけど、俺には拍子抜けといったところだな。

てつきり俺の魔法についてだと思ってたから、ある意味ほっとしたというかなというかなのだが。

「まいったな。君、歳とか誤魔化してない？」

ええ、歳を誤魔化してますよ。見た目の二倍くらい中身は歳を取ってますけどね。

無論、そんなこと言えるわけも無いし、言ったところでドン引きするか信じられないだろうけど。

「いえいえ、俺は無い頭を使って精一杯取り繕おうとしている九歳児ですよ。何処までいっても子供であることには変わりません。

それで、吸血鬼と言われましたが……そちらの話をお聞かせ願えませんか？」

「そうね、その代わりに君のことも教えてくれないかな？」

「いいですよ。まあ、話すほどのこともないと思いますがね」

こうして俺たちは色々と話というか、自分たちのことについて話し合ったのだった。

第五話 自称魔法使いの憂鬱（前編）（後書き）

なのはたちとの距離感と月村家との相互理解の話でした。

ちなみに一真の口調がいつもと違うのは真面目な話の時にはスイッチが入るだけです。

でも長続きはしません、本人も精神的に疲れるので。

追記：全体の改訂をしました。

第六話 自称魔法使いの憂鬱（後編）（前書き）

連続投稿その二です。

後編はすずかと一真の話ですが、ぶっちやけ外伝でやった方がよかったですかなと思ってたりしてます。

けど折角前後編というように分けたのだからという事で、このまま投稿させていただきました。

誤字脱字には気をつけていますが、何かありましたらお気軽にご指摘ください。

第六話 自称魔法使いの憂鬱（後編）

月村さんが夜の一族について話してくれたが、正直あまり驚きとかは無かった。

普通の人間よりも身体能力や治癒能力が高く、魔眼等の能力を持つが殆ど人間と変わらないらしく、また吸血されても吸血鬼にはならないらしい。

それと今回も俺を試すというか、危険ではないかの見極めをしたことへの謝罪もあつたが俺としては正直どうでもよかった。

むしろ俺の魔法とか、生い立ちについて聞かれたことに困った。

魔法を見せてほしいと言われ、セツトアップしたら月村さんの目が変わったのには驚いた。

あの目は正直言つて怖いってレベルじゃない、見ただけで命の危機に陥ったと錯覚するくらい怖かった。

そして少しフォルセティを弄らせてと言ってきたが、それだけは勘弁してくださいとフォルセティ共々全力で拒否させてもらったのもついさつきだ。

それで今の俺はというと、客室のベッドに一人腰掛けている。

すぐに戻るとのことでのんびりと部屋の中を見渡しているのだが、やっぱり月村家はセレブなのだなあと改めて実感している。

俺もこんなに大きくなっていいから、将来小さい一軒家でも建ててみたいなと思いつながらため息を吐いた。

そんな時、コンコンとドアをノックされたので入室を促すとずずかが入ってきた。

「ん、どうしたんだ？ 具合でも悪いのか？」

「うっん、違うの」

何でかさつきより元気が無くなってるように見えるんだが、忍さんに何か言われたのか？

それとも本当に体調が悪いんだろうかと考えたけど、風邪にしては呼吸が浅くなってないし。

そうになると、やっぱり今回のことが原因になっているんだろうか？

「一真君、どうして魔法のこと話してくれたの？」

「正直知られたくないと思ってたけど、すずかたちには言っても大丈夫かなって」

「それ、だけ？」

「まあ、付き合いは短いけどな。でもすずかたちなら信じられる気がしたんだよ。だから信じることにしたのさ、何があっても」

「……後悔、してないの？」

「後悔なんて微塵も無いし、それは今回だって同じだよ。」

それに吸血鬼だからと嫌う理由にならないし、吸血鬼であることも全部ひっくるめて俺は信じるってもう決めてるからな」

「でも、私は化け物なんだよ？ 一真君の血を吸いたいって思ってる化け物なんだよ！？」

別に吸血鬼が全て化け物ってわけじゃないだろうし、何もそこまで自分を苦しめなくともいいのに。

それに、そんなことを言ったら俺だって一度死んだ人間だし、むしろ化け物っていうのは俺みたいな人間だろう。

「すずかは何処からどう見ても人間だよ。人の為に苦しんで、人と一緒に喜びを分かち合いたいと願ってる優しい女の子だ。」

だから俺はすずかを信じる。たとえ誰にも認められなくても俺はすずかを信じるし、誰が何と言おうともすずかのことを認めるからな。

ちなみに俺は馬鹿だから頼まれたって拒否はさせないし、勝手に信じさせてもらうつもりだから何を言っても無駄だからな」

自分でも理想論というか、ここまでクサイ台詞を吐けるとは思わなかった。

だがこれは俺の嘘偽りの無い気持ちで、すずかが自分を化け物だと言いつけてもすずか自身を信じ続けるつもりだ。

それに、すずかは俺のことを信じてくれたのに、俺がすずかを信じてやれなかったら誰が信じるんだか。

まあ結局のところ、俺には自分のこと以上に相手のことを想い、真剣に悩んでいるすずかを俺には化け物だなんて到底思えないんだよね。

「……馬鹿だよ、本当に馬鹿だよ」

「ええ、馬鹿ですとも。行き着くところまで行った馬鹿ですから」

「うっ、うっ、うっ」

他の人とは違うという苦しみ、これは辛いことだろうが俺にはよくわからない。

けど、自分のことを受け入れられたのが、何よりもすすかにとって救いになったのだろう。

俺の前で涙を流しているすすかを見れば、ほんの少しであつても救われたのが何となくだけどわかつたしな。

「今は泣けるだけ泣いておけ、俺でよかつたらいつでも受け止めてやるからさ」

俺は立ち上がってすすかの傍に行つて、優しく抱きしめた。

せめて今だけでも苦しみを忘れられるように俺は優しく、優しく抱きしめた。

暫くそうしていると、ご本人は落ち着いたらしく恥ずかしそうにしていた。

まあ、男に抱きつかれるのは恥ずかしいだろうし、そういうことを意識する年頃でもあるから余計にだろう。

俺は中身が二十歳過ぎの大学生であるし、ロリコンでも無いから普通に妹をあやしているようにしか思えなかった。

だから可愛いとか綺麗だと感じることはあつても、それはLikeであつてLoveじゃないから結局は微笑ましいと思つくらいなんだよね。

まあ、男としてそれは非常に拙いのではないかとは思つけど、やっぱり枯れてしまったのかなあ。

「それで一真君、私たち夜の一族と契約を結ばなければいけないの」

「ああ、確か秘密を守るっていう契約なんだろう？」

「そ、そうなんだけど……実は」

そういつてすずかは何か言いづらそうに、口ごもりながら話し出した。

表情は恥ずかしいというか困ったかのようなのであるが、とりあえず聞いていこう。

それで聞いたことを簡単にまとめると、自分たちの秘密を話したら秘密を守るのと身内になれという契約内容だった。

はて、そもそも身内ってどういう意味だったか？ 記憶違いで無ければ家族とか血縁関係のことだったはずだ。

そして血縁というのは文字通り血が繋がっているという意味だけど、それには相手が必要になってくる。

……あれ？ そうなると血縁関係とかって、もしかして、いやありえないだろうに。

「な、なあ、もしかして……俺に婿に来いと？」

「う、うん」

「一応聞いておくけど、その相手ってまさか……」

「……………一真君の考えてる通り、私、です」

あ、ありえない……俺みたいな奴なんかがすずかと許婚！？

そいつは絶対に認めるわけにはいかない、すずかの将来が台無しになるのは目に見えている。

色々胡散臭い俺なんかよりいい人は沢山いるだろうし、契約だからといって納得なんてできるはずも無い。

「ちょ、ちょっと待て！俺なんかですずかの人生台無しにするな！！」

それに、そういうのはまだ早いつて。すずかだって好きでもない奴と一緒になんて俺は認めないし、契約であったとしても納得できないって！」

「……………やっぱり、そう言おうと思った」

「あつ？」

「それなら、好きだったらいいんだよね？」

一瞬、すずかが何を言ってるのかが俺には理解できなかった。

好きだったらいいんだよね、って聞こえたけど絶対に聞き間違いだろつ。そうでなくてはいけないんだ。

確かにすずかはとても魅力的な女の子であるが、まだ色々早すぎる。

それにお嬢様であるすずかと、その友人のヒモに成り果てている俺なんかじゃ到底釣り合わない。

たとえ月村家の人たちが納得しても世間体でどう見られるかもわからないし、何より俺が納得できるわけがない。

「えつと、すずかさん？じよ、「冗談ですよね？」」

「ううん、私は本気だよ。それに……………」

「な、お、おい!？」

「私を好きにさせた責任、取ってもらうんだから」

その台詞、人違いならぬ吸血鬼違いだから!？ …… って笑顔で強く抱きついてくるなっばー!？

その後、契約に関しては俺からの全力の懇願によって一部を保留扱いにしてもらった上で受諾することになった。

さらに誓いの言葉についてだが、俺とすずかの双方が顔を赤らめるほど恥ずかしかったとだけ言っておく。

出会った時には喧嘩の強くて、何となく不思議な感じのする男の子だった。

それから彼のことを知る度に不思議に思えて、気がついたら彼のこともをもっと知りたいと思う私がいるのに気づいた。

天涯孤独のこともだけど、魔法使いだっただことを知ってから私の中で何かが変わったと思う。

普通の人、そして私たちも違っってわかったら一真君のことがどんどん気になっていったから。

お姉ちゃんにそのことを話したら、真剣な顔をして直接会って確かめたいと言って一真君に今日来てもらった。

けど、私は拒絶されるのが怖くて一真君の顔を見るのが怖くてたまらなくて、震えが止まらなかった。

ただ、私たちのことを知っても一真君は受け入れてくれて、私自身を信じるって言うてくれた。

その言葉に、私は今まで抱えていたモノが無くなったように感じて、気づけば思い切り泣いていた。

抱きしめてくれた一真君の温かさが優しく、とても嬉しくてたまらなかった。

どうして一真君のことが気になっていたのか、それが今日のことではっきりとわかった気がする。

私を月村すずかとして認めてくれた一真君とずっと一緒にいたい、そして好きになっていたのがわかったから。

「これでよかったの、すずか？」

「うん、今はこれでいいと思うから」

私も一真君のことはまだよく知らないし、一真君も私のことをよく知らない。

でも、これからお互いのことを少しずつ知りたいと思うから、今はこれでいいと思う。

「でも面白い子だったなあ。魔法が使えるっていうのもそうだけど、アレを調べつくしてみたいなあ……」

「お姉ちゃん、それは無理だと思うよ？」

「うつつ、そうなんだよね。悔しいなあ……」

「あはは……」

お姉ちゃんは一真君のフォルセティに凄く興味があるみたいだけど、何となくわかる気がする。

私は一真君が気になるけど、それ以上は言わない。絶対にお姉ちゃんにからかわれると思うから。

……でも、好きっていう気持ちは変わらないから、覚悟しててね一真君？

「うおっ!?! な、何だ!?!」

『(マスター、どうしたんですか?)』

「(い、いや、何でもない)」

一瞬、背筋に冷水をぶっかけられたような寒気を感じたが、気のせいだろう。

帰り道に人がいなくて良かった。傍から見れば、「何だコイツ」と思われるだろうしな。

それにしても、九歳で許婚というのは駄目だろ。特に俺みたいな得体の知れないガキに。

まさに怪しさの塊といえる存在、裏の組織の人間だなんて言われてもおかしく無いのだから。

まったく、どうしてこうも人のことを簡単に信じるんでしょうね？
そりゃあ、裏切るつもりはこれっぽっちも無いし、できれば期待に
応えたいとは思ってはいるけどさ。

『（それにしてもマスター、婚約おめでとございます）』

「（ちよ、まだ許婚なだけであって結婚するだなんて決まってい
ないよ！）」

『（でも将来絶対に美人になりますよ、すずかさん。それにお嬢様
で気立ても良さそうですし。』

まさに、非の打ち所無い相手じゃないですか（）」

「（だが、すずかが俺をずっと好きでいるっていう保障は無いよ。
それに、俺なんかには勿体なさ過ぎる）」

あの時、俺にできたのは苦しみや悲しみを知り、少しでも受け入れ
てあげるくらいだった。

肝心のすずかは俺のことをどう思っているのかは知らないけど、俺
は別に大したことなどしてないはずだ。

ぶっちゃけ、クサイ台詞を口にしてすずかを泣かしたただけだし。

『（マスター、自分を卑下しすぎるのはやめてください。相手にも
失礼ですから（）」

「（はいはい、以後気をつけます先生）」

『（私は先生じゃないですよ。それに「はい」は一回です（）」

「（はい、わかりました）」

そんな会話をしながら、俺たちは帰り道を歩く。

時間もまだあるし、気分転換に公園で森林浴でもしてこよう。少しは気が晴れるだろうから。

それにしても、何だか見えない鎖が俺を縛っていくような気がするが、気のせいだろう。

今はそう思わせてほしい、現実逃避だとわかってはいるが。

第六話 自称魔法使いの憂鬱（後編）（後書き）

一真、許婚が出来た！？ の話でした。

ぶっちやけ夜の一族の話にもっていく過程が強引になりすぎた気がしてます。

だが後悔はしてない！ …… すいません、嘘ですからその巨大な岩を投げないで下さい。

力量不足で夜の一族、もといとらハ3の内容が殆ど生かされていませんが、話の中心はリリなのですのでそこは大目に見てやってください。

とりあえず、これからも精進して生きていたいと思いますので、どうぞ宜しくお願いします。

ではまた次話にてお会いしましょう^^ノシ

追記：全体の改訂をしました。

第七話 やるべきこと、やりたいこと（前書き）

前書きの場をお借りしてご報告させていただきます。

PV28000、ユニーク4800、お気に入り登録30件、総合評価110を突破いたしました。

この小説を読んでくださる読者の皆様、本当にありがとうございます。

これからも頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願
いしますm(_____)m

第七話 やるべきこと、やりたいこと

月村家に行って数日過ぎたが、変わったことが二つほどある。

一つはなのはが俺を見ると気まずそうにすることだ。これはしょうがないと言えばしょうがないだろう。

俺は何一つ間違ったことは言っていないはずだし、こればかりはどうしようもない。

きちんと家族に話した上で手伝ってほしいというのであればいつでも手伝うが、問題はユーノになるだろう。

そして二つ目だが、さすがが俺と一緒にいようとすることが多くなつたことだ。

契約を交わしてからというもの、地味に俺の横にすることが多くなつた気がする。

特に、弁当を食べる時にそんなことが多くなつたとアリサに言われなければ気づかなかつたかもしれない。

その時のすずかは心から嬉しそうにしている様子に、俺は複雑な気分んでいるが。

さて、今の俺はというと、アリサと一緒にとあるグラウンドに来ていた。

実は三日前、翠屋JFCの試合があるから見に来ないかと誘われたのだ。

俺も特に断る理由は無いいし、原作では大惨事になった事件を防げるかもしれないと考えて了承した。

「土郎さん、こんにちは」

「こんにちはアリサちゃん。それと……」

「風樹一真です。本日はお世話になります」

「お、君が風樹君か。俺は高町士郎、翠屋JFCのコーチをやっている。よろしくな」

原作通り爽やかな人ですな、と内心思いながらお辞儀をする。

その後、簡単な挨拶と雑談を終えて周辺を見渡すとなのはとさすがが席に座っていた。

マネージャーの子もいるけど、やっぱりGKの子をチラチラ見ているようだ。

とりあえずそんな二人に心の中で言わせてもらおう。

この熱々カップルめ、幸せになれよ！　ただしジュエルシードはもらってくがな！！

「アリサちゃん、一真君、こっちこっち」

「あ……」

さすがが俺たちに気づいて手招きしてくれたのでそちらに向かう。笑顔なさすがとは対照的に、なのはは俺を見て一瞬だけ複雑な顔をするが、すぐに普段通り振舞っている。

それでもなのはの笑顔にどことなくぎこちなさを感じるあたり、まだ考え込んでいるのだろう。

ユーノに関してはフェレット形態ではつきりとはわからないが、なのはと同じように考えているみたいだ。

あ、ヤベ。士郎さんに一つ頼んでおくべきことがあったのを忘れて

た。

とりあえずこの仕込みを済ませとかなないと作戦が実行できなくなるし、さっさと行ってくるとしよう。

まあ、この作戦が成功するかは正直わからないけど、やらないよりはマシだろうしな。

「すまん、ちょっと士郎さんに話したいことがあるから行ってくる」

「ええ、わかったわ。早く戻ってきなさいよ?」

そうして俺は士郎さんのところに向かい、アレを用意しておく。

「すみません士郎さん、少しお願いをしたいのですが……」

「ん? どうしたんだい風樹君?」

「えっと、実は……」

士郎さんに頼んだこと、それはGKの子が所持している可能性があるジュエルシードについてのことだ。

勿論ジュエルシードのことについては一切内容を話すつもりはないが、この作戦には士郎さんの協力が必要なのだ。

さて、頼みごとならぬお願いをしておきましょうかね。

「アンタがそんなことを考えてたなんてね」

「まあ可能性はあったしな。もしかしたらと思ったんだけど、当た

って良かったよ」

「でもよくわかったね、一真君」

「偶然だよ、偶然」

翠屋JFCの練習試合も2-0の勝利に終わり、俺たちは昼食のために翠屋に来ていた。

そしてアリサとすずかが話しているのは、GKの子が持っているはずのジュエルシードを俺が持っていることだ。

とりあえずパニックになるかもしれないからさっきまで黙っていたんだが、今回はそれが幸いしたようだ。

士郎さんがジュエルシード（嚴重に封印済み）を見せたら、アリサたちびっくりしていたし。

ちなみに作戦の内容といっても、士郎さんにジュエルシードを持っていたら俺に返してほしいと言ってももらうように頼んだだけだ。

これについては素直に出してくれるか心配であったが、GKの子はジュエルシードを出してくれて見事に大成功という結果だった。

これは嘘も方便だろうと思う。双方に良い結果を生む嘘ならついてもしょうがないだろうし、今回だけは不可抗力だ。

まあ、このままではGKの子に悪いので、後でお礼を兼ねて何かを送ってあげたいと思っている。

デビットさんから貰ったお小遣いを使うのは正直気が重いが、今回はばかりはしょうがないと割り切るしかない。

「何はともあれ、前みたいな黒いのが出てこなくてよかったわね」

「今回は運が良かったよ、いや本当に」

今回は原作知識という情報を知り得ていたのから必然といえば必然だが、それは口に出せるわけもないので黙っておく。それと作戦時から微妙な表情で俺をチラチラと見ていた存在、なのはとユーノがいたのだが、俺はそれを無視し続けた。条件を満たしたら手伝うと既に伝えているし、それを満たさない二人（？）が悪い。

別に風邪の特効薬を作れなんていうレベルの難しいことは言っていないので、決して意地悪をしているわけじゃないんだから。

「そういえばアリサとすずか、二人は午後から用事があるんだっかな？」

「うん、私はお姉ちゃんとお出かけ」

「私はパパとお買い物……なんだけど、一真は本当に行かないの？」

「ちとやっておきたいことがあってな。それに折角の親子水入らずなのに邪魔はしたくないんだよ」

この後アリサはデビットさんと買い物に行くのだが、俺は事前に行かない旨を伝えておいたのだ。

デビットさんもアリサの為に時間を作ったのだから楽しんでもらいたいし、何よりそれについていく俺を想像すれば行く気が失せる。高価な品ばかりのお店にセレブ親子とその親子のヒモがいる光景を思い浮かべれば、誰だって空しくなるに決まってるのだから。

「そんなこと無いのに、どうして一真は……」

「うん？ 何か言ったのか？」

「べ、別に何でもないわよ！ ……でも本当にいいの？」

「ああ。アリサだって久々なんだろうし、思い切り楽しんでこいよ？」

「……うん。でも今度は一緒に行くんだからね？」

「ああ、わかってるよ」

何処となくツンデレのアリサに俺は苦笑いをしながら相槌を打つ。その様子を見ていたさすがの表情が少しだけニコニコしているような気もしたが、おそらく気のせいだろう。

そうしてアリサとすずかが一緒に行くのを見た後、俺もそろそろ行くころかなと思っていたところだった。

「あ、あの、一真君。ちょっといいかな？」

「ん？（条件満たせたのか？）」

「（え？ ま、まだです）」

「（なら手伝うつもりは無い。ユーノと勝手にやってる）」

わざと突き放すように、念話で二人に言い放った。

俺は間違ったことを言っただつもりは無いし、特に難しいことを強要しているわけでもない。

確かに事情を話す勇気がいるかもしれないが、いつまでも隠し通せるわけでもないのは二人だって理解できているはずだ。

なのに家族に何も言わずに心配させ、ジュエルシードの回収を続けるのはとユーノに手伝う気なんて俺には無い。

俺は忍さんやバニングス夫妻にも既に魔法のことを話してあるし、全力で皆を守るという気持ちも伝えている。

だからなのはとユーノにも最低限のフォーローはするが、それ以上の手伝いをするつもりは今のところ微塵も無い。

「(どうして、そんなこと言うの?)」

「(それにさ、家族にずっと心配させてることに気づいてないのか?)」

「(え……?)」

「(土郎さんたちもなのはの行動に気づいてるだろうし、間違いなくお前を心配してるはずだ。

それなのにお前は家族を大切するどころか、家族を蔑ろにしてるよ。にしか俺には思えないんだよ)」

「(そ、そんなことない!!)」

「(だったら、何故土郎さんたちに事情を話さないんだ? お前が家族を大事にしていると思うなら、どうして向き合おうともしないんだ?)」

「(そうやって家族を大事にせず、心配させているお前等なんかを手伝う気なんて起きると思うか?)」

何度も言っているが、俺は難しいことを言ってるつもりは無い。

結局は土郎さんたちに事情をきちんと話し、納得してもらった上で手伝えと言っているだけだ。

魔法のことを話したくない理由は俺にもわかるが、ここは意味の無い意地を捨てて事情を話しておくべきだろう。

まあ、当人からすれば余計かつ、大きなお節介でしかないわけだが。

「(でも……)」

「(まあ、早く事情を話して家族を安心させてやれよ。それと、やりたいこととやるべきことを間違わないようにな)」

俺はそう言っただけで翠屋を後にしたのだった。

一真君が魔法使いで、私も魔法使いになった時は同じになれて嬉しかった。

そして、私にもできることがあるってわかった時には本当に嬉しいと思っただ。

アリサちゃんたちの前では言わなかったけど、私には取り柄が無かったってずっと考えてたから。

けど、一真君は魔法のことよりも私とお父さんたちのことを気にしていた。

それに、やりたいこととやるべきことを間違わないようにって一真君は言っていた。

ユーノ君のお手伝いをする前にまずやるべきことをやれと言われて、私は何も言い返すことができなかったから。

「……なのは、今回のことをなのはの家族や巻き込まれた友達に話したいと思う」

「ユーノ君？」

「彼に言われてからずっと考えてたんだ。確かにジュエルシードは回収しないといけない。」

でも、その前になのはたちにも迷惑をかけて、なのはの家族にも心配させてた。

落ち着いて考えてみれば、どうしてこんなに大切なことを黙ってたんだろうつて気づいてさ」

「うつん、それは私も同じだから」

ユーノ君も一真君と話した時からずっと考え込んでるようだった。

お話をした後も、私たちはジュエルシードの回収をしていたことが間違いとは思っていなかった。

でも、一真君の言っていたことも間違っているとは私には思えなかったから。

思い返してみると、ジュエルシードの回収に行く時はお父さんたちには内緒のままだった。

夜だったら見つからないようにして探しに行つてたけど、お父さんたちに余計に心配かけてたのかな？

だとしたら、お父さんたちにきちんと話さないといけないし、謝らないといけないよね。

「今更だけどこめんね、なのは。最初に君たちに謝らないといけない
かったのに……」

「ううん、そんなこと無いよ。そのおかげで私もユーノ君と出会え
たし、これでおあいこだよ」

「なのは……」

「それじゃ、ご飯の後にでも話そっか？」

「ううん、そっだね」

やるべきこととやりたいこと、私にはまだよくわかっていません。

でも、今はやりたいことの前にはやるべきことをしていきたいと思っ
ます。

第七話 やるべきこと、やりたいこと（後書き）

最近中々時間が取れなくて厳しいセフィロードです。

書きたいけど時間が取れない…おまけに執筆速度は亀以下な自分に軽く絶望してます。

でも反省してな…すいません、嘘です。きちんと反省してますのでメテ スフォームは勘弁してください。

それでは中途半端になりましたが、今回はこれにて失礼いたします。

ではまた次話にてお会いしましょう…では^^ノシ

第八話 約束された地獄へのフリーパス（前書き）

中々時間が取れない…書きたいけど時間が取れないのがこんなにも辛いとは思わなかったぜ。

…さて、今回は一真強化フラグのお話です。

だがフラグを立ててもすぐに強くなるという事はないし、オイシイ話があるわけでもないのがうちのオリ主です。

では、第八話をどうぞ。

第八話 約束された地獄へのフリーパス

サッカー観戦をした翌日、俺たちは高町家に遊びに来ていた。だがそれは表向きの理由であり、本当の理由は別にある。

実は、今回の事情についてユーノが事情を話したいと言ってきたのだ。

聞くところによれば昨日の夕食後、なのはたちは家族に今回のことを全て打ち明けたらしい。

そしてその手伝いをしたいとなのはが言ったところ、家族全員で反対されたことも聞いた。

けれど、結局なのはの頑固さ……もとい強い決意に士郎さんたちは折れ、条件付きでOKを出してくれたということだった。

そして今日は巻き込まれたアリサとすずかに話をしたい、ということとで高町家に来ている。

しかし、何故か俺だけ三人とは別の場所にいるのだ。

その場所とは高町家が所有する道場、しかも目の前にいるのは高町恭也さん……なのはのお兄さんだ。

俺は恭也さんによって道場へと連れてこられ、現在に至っているわけなのだが……あまり良い予感がしないのは何故だろう？

「話は聞いている、君も魔法使いらしいな？」

「ええ、でも自称ですけどね」

「自称？ 君は魔法使いじゃないのか？」

「確かに俺は魔法使いですけど、俺は魔法を好まないんです。

今は非殺傷設定という代物がありますが、それがあっても俺は人を傷つける力を簡単に振るいたくないんです。

そんな、魔法を好まない半端な魔法使い、そしてそれを振るうことが怖いと思っている臆病者……だから俺はどこまでいっても“自称”魔法使いなんですよ」

人を傷つけるならば、自分も傷つくことを覚悟しないといけない。これは魔法も同じことで、俺としてもできれば使う機会が無ければどれだけいいだろうと思っているくらいだ。

フォルセイもそのことについて深く理解してくれたし、俺たちもゆったりとした平穩の方が好きなわけだしね。

それに、俺は戦いが好きな戦闘民族やバトルジャンキーでもない、ただの一般人に限りなく近い異常者まほうつかいでしかないんだから。

「……そうか、だが君は臆病者なんかじゃないさ。きちんと自分の魔法という力と向き合っている、むしろ誇っていいはずだ」

「ははは、でもこういうのは誇るものじゃないですよ。それに俺にとって戒めみたいなものなんですから、褒められても困りますよ」

別にこれは誇るものじゃないし、力を持つ者として当たり前なことだろうと思う。

ある意味魔法なんて薬と同じようなものであり、薬も過ぎれば毒となるのと同じだ。

俺は魔法という薬を使う薬剤師のような立場として、薬の効果と用法用量を理解し、厳正に管理しているだけなんだけどね。

「ふっ、そうか。それで話は変わるが、少し体を動かさないか？」

「えっと、俺って剣道とかはやったことがないんですが……」

色んなアニメとかでは剣の動作とかを見たことはあっても、俺には剣道の経験は殆ど無いといってもいい。

高校の授業で一通りの基礎は勉強したが、それ以降竹刀を持ったことすらない。

一応素振りをメニューに取り入れているけど、恭也さんは雰囲気からしても上級者以上のそれだ。

こんな俺と打ち合うなんて時間の無駄でしかないし、何より恭也さんに一撃を入れられる気もしない。

いや、一撃入れられるだなんて最初から思ってもいないんだけどね？

「軽く打ち合うだけだから加減もするし、心配しなくてもいい」

「えっと……それなら、お願いします」

「よし、それならその木刀を使ってくれ。少々大きいと思うが、大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

「それじゃあ、始めるとしよう」

そうして、俺は恭也さんと木刀での打ち合いを始めた。

けど、この選択が後に約束された地獄へのフリーパス交付への第一

歩であるとは思いましなかつたんだ。

「う、うう……」

「あ、気がついたようね」

「……あれ？ アリサにすずか？ どうして……つう！？」

「む、無理しないで一真君！」

気がつくと、俺は高町家の道場の天井と一緒にアリサとすずかが見えた。

妙に頭がズキズキと痛んでいて記憶が混乱している。まずは思い出せることから思い出していこう。

確か恭也さんと木刀で打ち合ってた、それで……って、ああ、なるほど理解した。

「見事に脳天直撃だったからなあ、完璧に油断した」

「一真、大丈夫？」

「ああ、まだ少し頭がズキズキするけど問題無い。それで恭也さんは何処に行ったんだ？ 道場にはいないみたいだが」

「一真君、実は……」

すずかの話をもとめると、俺は恭也さんの一撃で意識を失っていたらしい。

なのはたちの話が一段落し、俺の様子見をしようということでの道場に来てみれば、俺が頭に一撃を入れられて倒れる光景を目にしてしまったとのことだ。

それを見た三人は恭也さんに対して大激怒、特になのはの怒りが何か超えてはいけない壁を越えてしまったらしい。

そんななのはの様子に、怒りを忘れて呆然とする二人を置き去りになのははユーノを引き連れ、恭也さんを何処かへ連れ去ってしまったそう。

その時の様子を見ていた二人曰く、あんな笑顔が怖いなのはを今まで見たことが無い、と。

「そう、か。とりあえずなのはと恭也さんを探しに行こう」

「本当に大丈夫なの？」

「もう痛みは殆ど無いから大丈夫だよ」

その代わりに小さなコブができてしまったが、それ以外には特に目立ったことはない。

まあ、後でフォルセティに頼んでメディカルチェックしてもらったつもりだけど、多分コブ以外に悪いところは無いと思うから大丈夫だろう。

多分フォルセティのことだ。悪ふざけで「残念ですが、頭が悪くなりましたねマスター」、とか言うだろうけど。

「それならいいんだけど……」

「あ、言い忘れてたけど看病してくれてありがとな、アリサ、すずか。おかげで助かった」

「……ふ、ふん。ほっとけなかつただけよ」

「はい、どういたしまして」

顔を赤くしてテレているアリサと、ニコニコと笑顔で返事をしてくれるすずかに、俺は思わず笑顔になる。

そうして二人にお礼を言った後、俺たちはこの場にいない二人を探す為に高町家を歩く。

すると何かの話し声が聞こえた。この声は聞き覚えがある……間違いなくなのはの声だ。

聞こえてくる場所は客間のようだが、ドア越しであってか声が少々聞き取りにくい。

とりあえずコンコンとノックをすると、なのはの声で「どうぞ」と聞こえたので入ってみたが……

「ナニゴト、コレ？」

俺はそう言わずにはいられなかった。

だって笑顔であるはずのなのはと、正座をして真っ白に燃え尽きた恭也さんを見れば誰だってそう言うだろう。

ユーノも変わり果てたなのはの様子に、ガクガクブルブルとフェレット姿で震えているのが余計に恐怖を感じさせる。

それで、なのはから発せられている魔王気（オーラと読んでほしい）には寒気がするし、正直ここにいるだけでも辛い。

むしろそう思わない人は、よっぽど図太い人が現実逃避をしているかのどつちかに違いない。

けど、このままだと話が進まないし、とりあえずなのは落ち着いてもらうか。

「え？　一真君をいじめたから、お兄ちゃんとお話してるんだよ？」

「なのは。俺は大丈夫だし、打ち合いのお願いをしたのは俺なんだ。俺の為に怒ってくれるのはいいけど、もう十分だからさ？」

「……わかったの」

まだ納得し切れていないようだが、とりあえず魔王まのほうは落ち着いてくれたようだ。

恭也さんの目が一瞬、助かったと言ってるように思えたので、俺も同じようにどういたしましてと目で答えておく。

あれ？　何となく恭也さんと妙なシンパシーを感じるんだけど、これってもしかしたら苦勞人氣質同士だからか？

「少し恭也さんと話がしたいから、悪いんだけど三人は席を外してくれないか？」

「あ、うん。それじゃあ私の部屋にいるから」

「了解、終わったらすぐ行くからな」

そうして三人と一匹はこの部屋から出て行くと、恭也さんは安心したのか大きいため息を吐いた。

おそらく、あんな表情をしたのは見るのは初めてだったのだろう。まだ少しだけ体が震えているように見える。

俺も目の当たりにしたわけだが、できれば二度とお目にかかりたくない。

とりあえず、また現れた時に備えて大規模送還術でも習得しておくべきだろうか？ いや、無駄なのはわかってるけど。

「さつきはすまなかった。手加減すると言いながら、つい力を入れてすぎてしまった」

「いえいえ。もう気にしてませんし、痛みも無いので大丈夫ですよ」

「そうか、本当にすまなかった」

もう痛みは無いが、頭に小さなコブができていることは黙っておこう。

そういえば何で恭也さんは俺なんかと打ち合いをしたいって言ったきたんだらうか？

素人の俺なんかと打ち合ったところで体を動かすことなんて殆ど無かったし、それだったら素振りでもしていた方が有意義だったはずだ。

ここは少し理由を聞いておきたいな、この人は意味も無く打ち合いをしようなんて言うような人には思えないし。

「ところで恭也さん、どうして俺なんかと打ち合いを？」

「そつだな……色んな意味で君自身を見たかったのが理由だな」

「えっと、どういうことですか？」

「忍から君のことを聞いてな。君もすずかのことを聞いたんだろう？」

「ええ、その様子だと恭也さんも忍さんにですか？」

「ああ、君の考えてることに間違いは無いだろう。だがそれは俺たちにとって口実にすぎない。

どうしても放っておけないのもあるが、その……好きなんだな」

そういえば、恭也さんも夜の一族のことを知っているというか、忍さんと付き合ってるんだよな。

原作だとよくわからなかったけど、どうしてもあんなにラブラブ（死語）だったのかも今では何となくわかる気がする。

やっぱりなのはお兄さんだけあって、思った以上にいい人だなと納得できた。

でもここでノロケは勘弁してほしい、聞いている俺が辛い。

俺も普通の男だから、リア充かチクショーと内心叫びたいと思ってるんですよ？

まあ、そんな勇氣は持ち合わせてないし、そこまで命知らずな人間でもないから黙っておくが。

「それでするかとなのはのこともあったから、俺を試したかったということですか？」

「まあ、な。なのはがジュエルシードという危険なモノに関わると聞いた時には皆びっくりしてな。

随分反対したんだが、なのははどうにも譲らないままで結局こっ

ちが折れる羽目になったしな。

それで今日、君が家に来ているとわかったから、少し俺からも試させてもらった」

「なるほど、そういうことだったんですか」

つまり、ずずかのこととなのはが魔法少女になったことが原因ということがあるか。

まあ、ずずかにしても恋人の妹、なのはは自分の妹ということ心配するのは無理からぬことだろう。

二人とも恭也さんにとっては大切な存在だと思っし、関わる俺を試したいと考えるのだから当然か。

「それで俺からの頼みなんだが、時間ができたらここに来てくれな
いか？」

「えっと、さっきも言ったとは思いますが剣は使ったことが無くて
……」

「先程も見させてもらったが、君も剣を扱っなら少しでも技術と経験
を積んでおいたほうがいい。」

それに、なのはたちを守ると言った以上、その言葉に見合うだけの
実力を身に付けてもらうべきだと俺は思っている」

守ると言うのは言うに易く、為すのに難しい……つまり言うのは簡単
で、実際やるうと思っても難しいものだ。

魔法や剣術などの戦闘関連の技術や心構え、両方とも中途半端な俺
には恭也さんに反論することはできない。

それにこのままではなのはたちを守るところか、自分の身すら守れ
ないなんてことになる可能性は非常に高いのも事実だ。

あと話はズレるけど、恭也さんに鍛えてもらうことは俺にとってこの上ないチャンスでもある。

先程の打ち合いでも恭也さんは相当な実力者だってよくわかったし、素人の俺を鍛えてもらえるというのはこれ以上無いほどオイシイ話だ。

だったら恭也さんには迷惑をかけてしまっただろうけど、ここはお世話になっておくべきか。

「そうですね。ご迷惑おかけしますが、宜しくお願いします」

「ああ、わかった。父さんにもそう話は通しておくから、こちらこそ宜しく頼む」

こうして俺は時間がある時には高町家に来ることになった。

後に恭也さん経由で土郎さんや美由希さんにも伝えられ、打ち合いの度に俺の意識が飛ぶことになったけど、それは割愛しておこう。

第八話 約束された地獄へのフリーパス（後書き）

一真、強化フラグを成立させるの話でした。

けどすぐに強くなるわけでは無く、強さの程度は物語が進んでいくうちに何となくわかるように書いていきたいと思っています。

きちんと描写できるかが怪しいけど、頑張って書いていきたいなあ。。。

それと、外伝もとい本編で省かれた話って書いた方がいいのかなと迷ってます。

個人的には書いてみたいとは思ってますが、書くとしても無印終わったところで外伝とA・s突入前の日常話も3〜4話くらい書きたいなあと考えています。

つまり現時点では書いてないというか、何の用意もしてないという事なわけですがorz

まあ、暫くは無印が続きますので、そんな事言ってたなあ程度の認識でお願いします。

では、また次話にてお会いしましょう^^ノシ

第九話 その日、運命の少女に出会う（前書き）

タイトル通りですが、ようやくフェイトが登場します。

漸くフェイトを出してあげる事が出来た！文才もプロットも無いから行き当たりばったりになってしまつてゴメンナサイorz

…それと、主人公がほんの少しずつであります、強くなつてきています。

第九話 その日、運命の少女に出会う

高町家に遊びに行ってから、俺の生活は少しずつ変化していた。

俺はというと、時間があれば積極的に高町家に行つて剣の修行もとい打ち合いをするようになった。

どつかれては気絶してのパターンを飽きずに繰り返してるが、そのおかげで動体視力と打たれ強さに磨きがかかってきている……と思う。

あとジュエルシードについてだが、俺たちは力を合わせて回収を行い始めていた。

魔法を使えないアリサとすずかは、ジュエルシードの目撃情報を集めることで俺たちのサポートをしてくれることになった。

けれど、今のところあまり目に見える成果は上げられずにいるのは仕方がないだろうと思う。

発動しているならともかく、発動してないモノはただの石同然なのだからしょうがないと言えばそこまでなのだが。

そんな俺たちであるが、今日は月村邸に遊びに来ていた。

たまには息抜きに皆で遊ばないかと言ってみたところ、その案が見事に採用された。

まあ遊ぶといつてもテレビゲームをする程度だったが、十分息抜きにはなつただろう。

そうして暫く遊んだ後、俺たちは外でお茶会をしているのだが……

俺は真つ白に燃え尽きていた。

理由はそう、先程まで遊んでいたテレビゲームが原因だ。

「お前らひでえ……新手のイジメ？」

「勝てないアンタが悪いのよ」

「えっと、その……」

「一真君、ごめんね？」

「いや、別に気にしてないから大丈夫だ」

俺たちはマリ カート（6 版）をやっていたが、俺自身は見事に最下位になりまくっていた。

最終ラップまでは一位になるのだが、アリサが赤甲羅やトゲ甲羅を使って猛追するので毎回酷い順位になっていた。

他にもすずかが絶妙な所にバナナを仕掛けるし、なのはがスターでひき逃げするなど散々だった。

今になって改めて思う、こいつらコンビネーション良過ぎだと。

「（えっと、元気出して一真？）」

「（ふう、ユーノありがとな。よいしょと）」

下にいたユーノを膝に乗せてやると安心したのが大きく息を吐いていた。

まあ無理もないだろうな、あのままにしていたら子猫たちに捕食されてたかもしれないし。

ちなみに、ユーノは今回のことを全て話したが、最近は燃費等の理由によってフェレットでいることが多くなっている。

それとなのはの部屋で寝ることを禁止されたらしく、個室を割り当ててもらったということも聞いた。

そんなユーノに対する処遇に、なのはは納得していないらしいが、俺はそれを聞いてほっとしている。

だってユーノが淫獣と呼ばれる可能性が少なくなったのだから、男として素直に喜ぶべきことだろう。

淫獣と呼ばれるのも見てて可哀想だし、原作でも不可抗力だったのも一部あるからな。

勿論、羨ましいという感情は俺にもあるが、原作で魔法のことをバラした後のユーノを想像すると同情してしまったからだ。

「しかし、相変わらずずかの家は猫天国よね」

「うん……でも里親の決まってる子もいるから、お別れもしなきゃならないけどね」

「そっか、ちよつと寂しいね」

「おいおい、別に今生の別れじゃないし、会おうと思えばいつだって会えるさ。それを忘れるなって」

出合いあれば別れもある、よく聞く言葉だけど事実その通りだろう。猫にとつても里親との生活が始まり、ずかたちとはお別れになるけどそれで終わりなんかじゃないのだ。

まあ俺は前世にさよなら、こんにちはリリなの世界といった状態でこの世界の住人になったと思っっているが。

「う、うん。そうだね」

「にやはは、そつだよね」

「アンタもいいことを言うわね」

「おい、俺を一体何だと思ってるんだ？ 是非聞かせてもらいた
んだが……いいかな、かな？」

俺は思わず泣きそうになりながらも、右手を握り締めてやり場の無
い怒りを表情に出す。

それを見た三人は、「あはは」と苦笑しながら視線を別の方向へ向
け始めていた。

こういうところでも仲がいいんですね、このお三方さんたちは……
チクセウ。

そんな時、俺はジュエルシードの発動に伴う魔力を感じた。

場所はこの月村家の敷地内、確か原作では子猫が発動させてしまっ
たという話だったけど、おそらくそれだろう。

なのはとユーノもジュエルシードの反応に気づいたようで、俺の方
に視線を向けてくる。

「二人は先に行つててくれ。俺もすぐに行くからさ」

「「一真(君)？」」

「(アリサたちが心配するだろ？ 事情は話しておくから、できれ
ば回収までやっててくれ)」

「(う、うん)」

「(わ、わかった。それじゃあ頼むよ一真)」

念話が終わった瞬間、二人はすぐさま魔力反応のあった場所へと走っていった。

その様子をどうしたのかという表情でいた二人だが、すぐに俺の方に視線を向けてきた。

なのはとユーノが駆け出していった理由といえば、魔法関係であると理解できたからだろう。

そして俺がすぐに行かないのは、なのはとフェイトの出会いを邪魔したくないからだ。

原作通りであれば今日二人が出会う可能性が高いし、それを邪魔してもデメリットの方が大きい。

それに二人の邪魔をすれば友達になれないかもしれないし、将来的にもなのはの為にならないからだ。

「一真君、もしかして……」

「ああ、ジュエルシードの反応がこの庭から感じられた。俺もすぐに向かうのを伝えておこうと思ってな」

「はあ、なのはってば。行ってくるとか言いなさいよね、まったく」

「それじゃあ悪いな二人とも。少し席を外させてもらうぞ?」

「ええ、わかったわ。絶対になのはを守ってやりなさいよ?」

「勿論だ、それじゃあ行ってくる!」

そう言って俺もなのはが走っていった方向へと走り出した。

「ユーノ、状況は？」

「ジュエルシードはすぐに見つかったんだけど、突然……」

結界に侵入してみると、そこには巨大なぬこ（笑）となのは、そして金色の少女がいた。

金色の少女は言うまでもなくフェイト・テストロッサさんです、本当にありがとうございます。

『（ここは原作通りですね）』

「（良いのか悪いのか判断に困るけどな）」

そう考えていると、なのはが余所見した際にフォトンランサーが放たれる。

このままでは防御魔法も間に合わずに直撃するだろうけど、生憎それを放っておく俺じゃない。

フォルセティをポケットから取り出し、身体強化を施してある足で走り出す。

「（ユーノは引き続き結界の維持を頼む）」

「（わ、わかった！）」

「フォルセティ、セットアップ！」

すぐさまセットアップを完了させ、なのはの前に立って遮断のイメ

ージを込めたシールドでフォトンランサーを防ぐ。

見た目の割には大した威力は無く、攻撃を防ぎ終わった俺はフェイトを見つめながら軽く一息吐いた。

「ふゝ……大丈夫か、なのは？」

「う、うん、大丈夫」

「そうか、それならよかった。さてと……」

フォルセティを右手で強く握り締め、自らの魔力を開放させ始める。視線の先にいるフェイトは攻撃体勢を維持しつつ、突然現れた俺を見つめてくる。

「……貴方は、何者ですか？」

「そうだな、とりあえず自称魔法使いと名乗っておくよ……」（フェイト・テストアロッサ殿？）

「……！ な、何で……」

少しは動揺するかなとは思ったが、ここまで露骨に反応するとは思わなかった。

まあ、初対面の子供に自分の名前を正確に言い当てられたんだから無理も無いと思うけどね。

さて、これで二人の顔合わせも済んだことだし、とりあえず封印までの時間稼ぎをしよう。

「ここは退くことをお勧めしたいのだが、そうはいかないんだろう

な」

「……フォトンランサー、ファイア！」

これ以上の会話は無駄と判断したのか、フェイトはフォトンランサーを四発放ってきた。

だが、その弾速は恭也さんたちの剣速や動きに比べれば遅いし、今の俺でも対処できないスピードじゃないように感じる。

やはり恭也さんたちとの打ち合いが、ごく僅かではあるが動体視力などにも影響し始めているらしい。

俺にとつては拷問としか思えない打ち合いによって、色々と改造されてるんだなあとと思うのは複雑な気分だけだ。

「（なのは、自分の身は自分で守れ。それと今のうちに封印をしろ、俺が時間を稼ぐ）」

「（う、うん！）」

なのはに指示を出した後、さっきと同じ遮断をイメージしたシールドを目の前に展開して突撃準備をする。

俺にとつて、これが初めて魔法を使った対人戦だが、油断は一切するつもりは無いし全力でいかせてもらうつもりだ。

さあ、なのはが封印するまでの時間稼ぎに付き合ってもらおうか、フェイト・テストアロッサ殿？

「これぞ本当のシールドアタック、ってな！」

「なっ!?!」

俺は左手でシールドを展開して攻撃を防ぐのと同時に、飛行魔法を使ってフェイトに肉薄する。
そして近距離まで近づいたところでフォルセティを振りかぶると、フェイトも魔力刃で俺の攻撃を防ぐ。
ギリギリと魔力刃と魔力刃がぶつかり合う音が聞こえ、俺たちは鏢迫り合いへと移行する。

ふむ……力と防御力は俺の方が若干上みたいだが、技とスピードはやはりフェイトに分があるといったところか。
やっぱりリニスに戦闘訓練を施されているだけあって動きが磨かれているようだし、まともな勝負をしてたらこっちが負ける。
今の俺は素人に毛の生えた程度だし、さっさと終わらせないと地力で負けてる俺には不利でしかないからな。

「やっぱりまともになると負けそうだな。流石は優秀な使い魔からの戦闘訓練を受けてるだけある！」

「!? くっ……本当に貴方は、何者!?!」

「ふっ、それは……秘密だ！」

「なっ!?!」

その言葉と共に、俺は体を反らしつつ、鏢迫り合いの状態から思い切りフォルセティを引いた。

押し合いなどで急に相手が急に力を抜いたりすると、自分の力でバランスを崩してしまうことがあるのを多くの人は知っているだろう。俺はそれを利用して鏢迫り合いをしているフェイトの体勢を不安定

にさせ、一瞬の間という小さくも大きなチャンスを生み出した。

フェイトもすぐに崩れた体勢を戻そうとするが、俺は既に次の行動に入っている。

右手に握り締めたフォルセティをフェイトの首元に突きつけ、決着がついたことを互いに知らしめる。

とりあえず、これでチェックメイトといったところだろう。

まあ、これで決まらなさと先程の動揺から立ち直られ、負ける可能性がどんどん高くなるからな。

実際、戦闘経験や魔法に触れた時間は圧倒的にフェイトの方が上なのだから、その穴を埋めるには戦闘に集中させないようにはする必要があった。

だから俺は出会った時にフェイトの名前を言い当て、精神的な揺さぶりをかけて戦闘に集中できないように仕向けたのだ。

ぶっちゃけ俺のキャラじゃない上に、完全に悪役としか思えない行為だけだね。

「ふう〜……今回は俺の勝ちってところかな（なのは、封印は終わったか？）」「

「（う、うん。終わったよ！）」「

なのはがジュエルシードの封印を終えるまでの時間稼ぎも、間に合ってた何よりだった。

正直、時間稼ぎにもならないんじゃないかと思ってたんだが、これで一段落といったところだろう。

「さて、次は君の件だが……話を聞かせてもらえないか？」

「……………」

フェイトは敵意むき出しの目で俺を睨むあたり、全然諦めてないみたいだ。

しょうがないと言えばしょうがないわけんだけど、いつまでもそんな目で見られると精神的に辛い。

こちらら硝子の心を持った少年（笑）なので、粉々に砕ける前に何とかしたい。

「何、別に取って食おうというわけじゃない。相互理解の為に少しはな……ぐっ!？」

『マスター!』

突然、頭にとてつもない衝撃が加えられたのを自覚した。

その衝撃がすぐに激しい痛みに変換されるのを感じたが、これくらいなら何とか意識を保っていられる。

そのおかげでフェイトの横から離れてしまったが、そのおかげでどうしてこうなったのかを理解できた。

フェイトの横に、赤い毛色をした狼……アルフがいたのを確認できたからだ。

「くおおお、痛え……痛えぞチクシヨー!」

「くそ、なんて頑丈なやつなんだい!？」

「アルフ!」

殴られた場所を左手で押さえ、フェイトとアルフを睨みながら本音を口にする。

恭也さんたちによってでき始めた打撃への耐性と、フォルセティが咄嗟にシールドを張ってくれなかったら間違い無く気絶してたな。それに、ズキズキという鈍い痛みが取れないのは、やはり魔力とイメージが満足に込められず、衝撃を防ぎきれなかったんだろう。

「ここは逃げるよ、フェイト！」

「うん……行こう、アルフ」

「あ、待つ……」

なのはが最後まで言い切る前に、フェイトたちは転移魔法でこの場からいなくなっていた。

やはりこの状況では自分たちに分が悪いと考えての行動だろう。

それにしても見事な不意打ちというか、完全に油断してた。アルフがいることを計算に入れてなかったし。

おそらくアルフは、フェイトに何かがあった時にはいつでもフォロ―できるように見守っていたのだろう。

あらかじめ結界内を探索しとけばわかっていたかもしれないが、生憎と探索は苦手だし……迂闊うかつだったな。

「まだまだ未熟、か」

フェイトたちが消えた場所を見つめつつ、俺は誰にも聞こえないように小さい声で呟いた。

第九話 その日、運命の少女に出会う（後書き）

投稿が遅れてすみませんでした！

最近色々やる事が増えまくりまして、やっと投稿出来ました。

おまけに使ってるPCもそろそろヤバく（熱暴走的な意味で）、携帯で書くこうにも電池がすぐ切れるので泣けてきますね、冗談抜きで。

…それと、次の話は前後編となっております。温泉の話です。

前後編を両方とも一緒に投稿するつもりですが、なるべく早く投稿出来るよう頑張りたいです。

では、また次の話でお会い出来ますように…^^ノシ

追記：全体を改訂しました。

第十話 温泉で一休み！？（前編）（前書き）

投稿が遅れてしまい、本当にすみませんでした！

今回は前後編…そして温泉の話です。

第十話 温泉で一休み!? (前編)

あれから少しの時間が過ぎ、日本は全国的な連休を迎えていた。特に大きな進展も無いままだが、今回は皆さんと一緒に海鳴温泉に宿泊することになっている。

メンバーは言わずとも原作通りだが、そこに俺が加わったくらいで大きな変化は無い。

着いた後は旅館周辺を見回ったりと色々しているといい時間帯となっていたので、俺達は温泉に入ることにした。

ちなみに恭也さんと士郎さんは奥さん方とまだ歩き回っているらしく、部屋にも戻ってきていない。

その為、俺はユーノ（人間）を連れて男湯へと足を運び、温泉に入る前に体を洗っている最中だ。

「よかったな、きちんと話しておいて。知らないままなら今頃女湯にいたぞ?」

「うん、本当にありがとう。話しておいて本当によかった……」

「とか言いつつ、本当は一緒に入りたかったんじゃないのか?」

「そ、そんなこと無いよ! それに、僕はそこまで命知らずじゃないよ!」

「ああ、確かに。そんなことしたら問答無用で十七分割バラバラにされるだろっな」

言ってて非常に物騒極まりないが、事実なのだからしょうがないだ

ろう。

なのはたちの裸を見たなんていうことがバレれば、見たヤツがミンチ肉になるのは容易に想像できる。

だが生憎と俺はまだ死ねないし、そんな選択肢を選べるほどバイタリティ溢れる変態でもなく、何よりそこまでしてまで見たいとは到底思えない。

ああ、そんな恐ろしいこと考えたら思わず体が震えてきたじゃないか。

横にいるユーノを見ると俺と同じように手を震わせているのは、やっぱり俺と土郎さんたちの打ち合いを見たからだろう。

ユーノも、「……あの人たち、本当に人間？」と言ってたし、事情を話した時には凄まじい殺気を出しながら睨まれたらしいので無理もないだろう。

「……とりあえず、この話はやめにしないか？」

「……うん、僕もこれ以上この話題について話す勇氣は無いよ」

ユーノも何か悟りきった顔で同意してくれたので、俺も沈黙することと話を切り上げる。

そうして俺は体全体についた泡を洗い流し、ユーノよりも一足先に温泉に入る。

ああ、温泉なんて久しぶりだから気持ちいいなあ……前世では五歳くらいの頃に行っただけだったし。

それと、入った時に何やら女の湯から話し声があったが、全て聞かなかったことにしておいた。

この時間くらいゆったりとしたいし、話の内容だって男に聞かれた

くないと思われる内容だったからだ。
ユーノはそれを聞いて顔を赤くしていたけど、やっぱりこの歳くらいがお年頃といった感じなのかもしれないな。

「グビグビ……ぷはあ。風呂上りの牛乳は美味しいな」

温泉から出た後、俺は一人休憩室で瓶牛乳を一気飲みしていた。
ちなみにユーノはもう少し温泉に入っていたいらしく、逆上のほせないようにとは言っておいた。
まあ公衆浴場ばかり入ってたって言ってたし、今回ばかりはゆっくり入っていたいんだろうな。

「さて、やることも無いし……部屋で読書でもしてるか」

すずかに借りたオススメの本をまだ読みきってないし、夕食までの時間潰しには丁度いい。

そう思った俺は瓶を片付け、廊下を歩いて部屋へと向かっていたのだが、向かい側にある女性がいた。

オレンジ色の髪をした二十代くらいの女性、どう見ても人間形態のアルフでした。それにまだこちらに気づいてないようだ。

それに気づいた俺は少しだけ悪戯したくなってきた。けど別にえっちな意味じゃないよ？

「よ、アルフ。フェイトと一緒に来たのか？」

「！……アンタは！」

完全に警戒モードみたいなのに入っているけど、それもしょうがない。
自分の主人に攻撃し、見ず知らずの俺に名前を言い当てられたとなれば無理もないだろう。

とりあえず、この先は念話にしておいたほうがいいかな。

「（ああ、そんなに警戒するなよ。敵対するのはジュエルシードの時だけで、今は温泉を楽しみに来ているお客同士だろ？」

別にそっちが手を出さない限り俺は何もしないし、何よりもここでは無粋極まりない）」

「（……アンタ、何者だい？）」

「（私立聖祥大附属小学校3年生にして自称魔法使いであり、元ホームレスの風樹一真だ。

それと前もって言うておくが、俺は別に管理局とは一切関係無し、むしろ個人的に嫌ってるから安心してくれ）」

「（フン、信じられないね！）」

普通は信じられないだろうね、俺の言ったことが本当かどうか不明だし。

それにアルフにしてみれば、俺は胡散臭い謎の少年^{ガキ}なわけだし、当然といえば当然だ。

だから無理に信じてもらうつもりはないし、俺としても今は温泉旅行を楽しみたいから強制するつもりもない。

「（別に無理に信じてくれとは言わないし、今は心の片隅にでも置いていてくれ。とりあえず、それだけを言いたかったから声をかけ

ただけだ」

「（……そうかい、ならアタシからも言うておくよ。あんまりお痛がすぎるとガブツといくよ?）」

「（そうか、ならば気をつけておくことにするよ）」

そう言うてアルフは温泉の方へと歩き去っていった。

さて、俺も部屋に戻って読書でもしてよう。言いたいことは一通り伝えておいたし、どうせ近いうちに会うんだしな。

夕食と宴会が終わって皆が寝静まった頃、俺は部屋の窓際で一人空を眺めていた。

窓から見える夜空に雲は一切無く、真円の月は全てを優しく照らすように輝いている。

ちなみに俺は食べるだけ食べてさっさとこの部屋に戻っていた。流石に酔っ払いを相手にしたくなかったからだ。

後に、俺を探していたアリサたちと合流し、卓球をするなどであったという間にこんな時間になっていたのも少し驚いたが。

「一真、どうしたの?」

「む、ユーノか。ただ夜空を眺めてただけさ、特に意味は無いけどな」

この世界に来てからというものの、夜空を見るたびに前世を思い出

すことが多くなった。

俺にしてみればつい最近だったはずなのに、今ではそれがとても昔であった感じがする。

前世とは折り合いをつける意味で自分に名前をつけたはずなのに、やっぱり心の何処かに未練があるんだなあと改めて思い知らされた。

「一真、君は一体何者なの？ 君の使う魔法も見たこと無いし……」

「何者って言われても困るけど、ただの小学生よりかは色々と苦労はしてきた普通の日本人だよ。」

それと魔法については悪いけど秘密ということにしておいてくれ。言いたくないのもあるけど、あまり魔法が好きじゃないんでな」

「えっと、魔法が好きじゃないってどういうこと？」

「俺にとって魔法っていうのは薬みたいなもんで、用法用量を守れば良い効果を出せる反面、使い方や量によっては毒にもなる代物だと思ってる。」

それに、魔法という価値観に囚こわれて、“俺自身”じゃなく“俺の魔法”だけにしか価値を見出せない人間と関わりたくないんでな。そんな誤解を生む魔法が好きじゃないし、むしろ使わずにいらればどれだけいいとさえ思ってるんだよ」

魔法は確かに便利で魅力的だが、それを当たり前だと思っではいけないと俺は考えてる。

それに俺は魔法に人生を委ねることなんて考えられないし、自分の人生は自分で歩めることを誰よりも知っている。

平穏を望む俺にしてみれば、永遠の闇を倒すことを終えたら魔法なんて捨ててしまっても構わないというくらいだ。

俺にとって魔法が蔓延る非日常なんかよりも、平穩無事な日常を生
きることが何よりも大切だからな。

「そっか、やっぱり一真つて子供に見えないね」

「まあ色々と経験してるからな。それとユーノ、お前つて攻撃魔法
が苦手なんだよな？」

「え？ あ、うん。僕に力があればこんなことにならなか……イタ
！？ 何するのさ！？」

いつものようにネガティブ方向に考えを持っていくユーノに、少し
力を入れてチョップをかます。

どうしてユーノは色々とできるはずなのに、こうもネガティブ思考
なのが俺には理解できないね、本当にさ。

「このバカチンが、力が無いなら今あるモノを工夫すればいいだけ
の話だ。

それに誰がお前は無力だと、防御魔法を攻撃に使えないと誰が勝
手に決め付けたんだ？

少なくとも俺はお前が無力などとは思っていないし、それにお前
はまだ自分の可能性を見出してすらいないだけさ」

「で、でも今回のことだって僕がしっかりしてれば……」

俺だって、魔法使いもとい魔導師としてはまだまだ未熟でしかない
のは自覚してる。

だからこそ、俺は自分でやれる範囲で無理せずに目的を見据えなが
ら少しずつ訓練を重ねている。

ユーノも、それがわからないだけで自分を責めるしかなかったんだ

るうけど、それを言い訳しても何も変わらないのだ。

「ユーノ、俺たちは神でも、ましては悪魔でもない……人間なんだよ。」

どんなに背伸びをしたところで何かが大きく変わるわけでもないし、自分にはできないことがあるのを俺たちは誰よりも知ってるはずだろ？

だから時には助けを求めたっていい、今は無力だっていい。けど無力であることを理由にして何もせず後悔するような人生を歩むな……これだけは忘れないでくれ」

一部八ガ ンヤ アスの主人公の言葉を借りたが、実際俺たちは人間であって全知全能なんかじゃない。

できないことだって色々あるが、それを言い訳にして諦めるというのは俺にとっては何か勿体無いのだ。

現に、俺が子供を助けた時に諦めるという考えは頭に無かったし、それで死んだことについても後悔していないしな。

まあ、普通の死に方ができなかった分、今度こそ平凡な人生を全うしたいと思ってるけど、まずは目的を片付けてからだ。

それが全て終わったら、後はのんびりゆったりの普通の人生……うん、上出来な人生だろう。

「……そう、だね。ごめん、こんなことを言って」

「誰だって弱気になることはあるから気にするな。大切なのはそこからどう考えて行動するかさ」

「……うん、ありがとう一真。何だか少し気が楽になったよ」

「ふっ、それは何よりだ。それじゃあそろそろ俺は寝ると……！」
その時、俺はジュエルシードの気配を感じた。ユーノもそれに気づいたようで、こちらに目を向けてくる。

俺たちは眠っている土郎さんたちに気づかれないよう……まあ絶対に気づかれてると思うが、こっそりと部屋の扉まで辿り着く。

そうして廊下に出ると、なのはが女部屋の方向から走ってきていた。やはりなのはもジュエルシードの気配を察知し、部屋から走ってきたのだらう。

「一真君！ ユーノ君！」

「揃ったところで行くぞ！」

「うん！」

そうして俺たちはジュエルシードの場所に急いで向かったのだった。

ジュエルシードの反応があった場所に行くと、そこにはフェイトとアルフがいた。

フェイトの手に小さく光るジュエルシードがあるところ、既に封印は済んでいるのだらう。

「やはり先を越されていたか。手際がいいことですね、お二方さん
や」

「アンタは……！」

俺の姿を見るなりアルフはかなり敵意の込めた目で俺を睨む。
フェイトもアルフほどではないが、真っ直ぐな目をしながら俺を警戒している。

ちなみになのはとユーノはまだ来ていない。身体強化を施した俺に魔法無しで追いつけるわけが無いしな。

けどこれは狙い通りであり、伝えられることは伝えておきたかったのが目的だが。

「まあ、素直に聞くとは思えないけど一応言っておく。ジュエルシードではプレシアの願いは叶わないぞ」

「な、何で母さんの名前を……貴方は一体？」

「それは前にも言ったが秘密だ。さて、本題だが……ジュエルシードを渡してはもらえないか？」

「フン！ 誰がアンタなんかに渡すもんか！」

「……そう、か。それなら力ずくとなるけど、恨まないでくれよ？」

俺の言葉の後にアルフは狼形態へと獣化もとい変身する。

フェイトもバルディッシュを俺に向けて構え、いつでも交戦可能な状態だ。

俺もフォルセティを正眼の構えを取り、全身の魔力を高め始める。

正直なところ、タイマンならともかく一対二で勝つのは無理にも程がある。

前は色んな条件を重ねることによってかろうじて勝つことはできた

が、今回はアルフがいる以上、それが望めそうに無い。

でも、今回は俺たちだって前と同じ条件で戦うわけじゃないんでな。

「はあ、はあ。一真君早すぎるよ……って、どうなってるの!？」

「チツ、仲間かい!」

遅れていたなのはとユーノがようやく到着し、アルフは舌打ちをする。

俺も言っておきたいことは言ったし、後はジュエルシードをかけて戦うだけだ。

「(詳しいことは後で頼む。俺とユーノは赤い狼を相手にするから、なのはは死神っぽい彼女を頼む)」

「(え、一真君?)」

「(彼女のことを気になってるんだろう? こっちのことは気にしないで、お前の全てをぶつけてこい)」

「(あ……うん、わかったの!)」

レイジングハートを握り締め、フェイトに対して気迫に満ちているなのは。

今の時点でフェイトに勝てるとは思ってないけど、あの様子なら任せても大丈夫だろう。

それにフェイトだって大怪我させるほどのことはしないだろうし、アルフ相手になのはをフォローなんてできるとは思えないからな。

「（ユーノもそれでいいか？）」

「（うん、サポートは任せて！）」

おお、ユーノも何だか少しだけ頼もしくなった気がする。精神的に一回り大きくなったか？

これには少しびっくりしたけど、嬉しい誤算というか何と云うかだな。

今までのヘタレ具合が嘘のように消えてるし、その目はやる気満々で頼もしさが感じられる。

さて、お互いに戦闘準備はできたことだし、後は思い切りぶつかり合うだけだ。

「……よし。それじゃあ、戦闘開始といきましょうかね！」

俺の言葉と共に、この場にいる者たち全員が動き始めた。

第十話 温泉で一休み！？（前編）（後書き）

ユーノ、少しだけ強くなった…？ の話でした。

でも精神的に少しだけ強くなっただけで、魔法は何にも変わってないのであしからずといったところです。

では、続いて後編に続きます。

第十一話 温泉で一休み！？（後編）（前書き）

前編に続いてですが、後編はバトルがメインだったりします。
戦闘描写は正直あまり得意でないのですが、練習だと思って頑張っ
てみました。

…でも、バトルが短い上に内容が微妙だったりしますorz

第十一話 温泉で一休み!? (後編)

「デイバインシューター!」

「はああ!」

なのはとフェイト、互いに戦闘スタイルが対照的な魔導師二人が戦っている。

砲撃や誘導弾を主に得意とするのには対し、基本的にオールラウンダーでスピード戦と近接戦を得意とするフェイト。

双方が苦手としている相手との戦闘では、どちらかの機転によって勝負が決まるだろう。

だがそれは同じ条件で戦っている場合だけであって、今回はその限りではない。

何故なら、フェイトにあってなのはに無いものがどうしようもなく大き過ぎるのだ。

それは言うまでも無く魔法を使った経験、技術、そして自身を支えている覚悟の強さに他ならない。

このまま戦いが続くのであれば、万が一のことがないかぎりフェイトの勝ち揺らがないだろう。

さて、二人の戦闘に対する考察はここまでにしておこう。

俺とユーノは獣化したアルフと現在進行形で対峙しており、全力の戦闘を行っている。

前回、俺はアルフに後頭部への一撃をもらった恨みがあるので、手加減をするつもりはない。

「ジュエルシールドを集めて……どうするつもりだ!」

「うるさいんだよ!」

「しっ!」

ユーノがアルフの攻撃を防ぎながら問いかけるが、それを聞こうともしないアルフ。

そこに俺が近接攻撃を仕掛けるのだが、野生の勘みたいなものですぐに察知されて距離を置かれてしまう。

遠距離攻撃のパターンが限られるユーノに対しての戦い方としては確かに間違っていない、バインドを避けるだけで事足りてしまうのだから。

でも、ユーノと一緒に戦っている俺に対してその判断は正しいとは言えないんだよね、これが!

「ストライクライフル!」

俺は既にフォルセティをライフルモードへと移行を完了させており、貫通効果を付加した弾丸……ストライクライフルをアルフに放った。そのことにアルフは僅かな驚きをみせるが、すぐにシールドを張って防御体勢に入る。

だが次の瞬間、シールドは薄い紙を簡単に貫くかのようにアルフへと直撃していた。

かなり魔力を込めたライフルショットだったので、多少のダメージは残るだろう。

アルフのおかげで一つ貴重な情報を得ることができたな。並のシールドでは貫通効果を持った俺の魔法は防げないということを、ね。

「ぐ……はあ!?!」

「ユーノ!」

隙ができたところですからさまユーノがチェーンバインドを放つが、
かろうじて回避されてしまう。

流石にフェイトの使い魔だけあって実力や、ここぞという時の意志
の強さは折り紙つきといったところか。

だが、さっきのストライクライフルでのダメージが出ているようで、
結構動きが悪くなっている。

「ちい……アンタ本当に、何者だい!?!」

「ふっ、『今』は敵である君たちに話す理由があるのか……なっ!
!」

苛立つアルフに先程と同じようにライフルショットを放つと、対象
となったアルフは慌ててそれを回避していた。

シールドでの防御ができないと判断した以上、回避を選択するのは
当然だろう。しかし……

「甘いな」

「なっ……ぐうっ!?!」

放ったのは必中をイメージした弾丸……グラスパーライフルであり、
貫通をイメージしたストライクライフルとは効果は違う。

相手に防がれるか中^{あた}るまで自動追尾するという性能を持つが、こい
つは命中を意識しすぎたので威力がストライクライフルよりもかな

り劣っている。

仮に命中したとしても、何の強化もしてない俺が拳骨ぶちかましたくらいだからそれ程の威力でもないはずだ。

「チエツクメイト……！」

「くっ……があ!？」

だが威力がどれだけ低くとも、一瞬の隙を生み出すフェイントには十分使える。

俺はアルフが怯んだ瞬間を見逃さず、魔力刃を展開したフォルセテイでの一撃で薙ぎ払った。

その一撃でアルフは吹っ飛び、どさっという落下音の後に呻き声を口にしていた。

「く、くう……」

「……さて、これで決着はついたし、回復魔法かけてやるとしようかね」

「え……？ で、でも彼女たちがやってることは……」

まあ確かにジュエルシードで対立しているけど、決着がついた後の話は別だ。

俺とて無闇に魔法を使って人を傷つけないわけでもないし、今回は火の粉を払っただけだ。

最低限の自衛と恨みを晴らす目的はあったけど、それも一通り片が付いたからこれでおしまいだ。

「確かにジュエルシードで対立する立場にあるのは俺も理解してる。

けど決着がついたとなれば話は別だ。それに俺たちは誰かを傷つける為に力を振るうわけじゃなく、今回もあくまでジュエルシードの回収が目的だろ？」

「それは、そうだけど……」

「それに俺のせいで怪我したとなれば放っておくのも嫌なんだな。そんなわけでフォルセティ、メディカルチエックを頼む」

『了解です。メディカルチエック開始……』

特に大きな怪我はしていないと思うけど、念の為に軽く検査くらいはしておきたいしね。

それにまだなのはとフェイトは空で戦っているみたいだし、アルフを治療する時間はまだ十分にある。

「な、何で敵のアタシたちに……」

「ん？ 別に深い意味はないけど、あえて言うなら俺はお節介焼きなんでね。ここは黙って治療されておけ」

「……………」

『マスター、打撲と擦り傷だけのようです』

「了解。そんじゃ、治療開始……」

俺の言葉を聞いた後、アルフは特に暴れもしないで大人しく治療を受けてくれた。

少しだけ信用してくれたのかはわからないけど、暴れないでくれる

のは正直助かる。
さて、打撲による内出血の跡も残らないよう、綺麗さっぱり治してやらないとな。

治療魔法を使って十秒ほど経ち、アルフの治療は無事終わることができた。

アルフはすぐに体を起こした後、俺たちから距離を取ってじつとこちらを見つめてくる。

まあ警戒されても当然ではあるが……って、なのはがバルディッシュ突きつけられて負けてるがな。

結果はわかりきっていたことではあるけど、やはり今の時点では勝つのは無理か。

「なのは、やっぱり負けたか。あ、とりあえず二、三日は安静にとけよ。無理すると痛むと思うからな」

「……礼は言わないよ」

「別に構わないよ、それに言ったろ？ お節介でやったことなんだからさ」

簡単な治療を終えることのできたアルフは主人のところへと飛んでいく。

そして、その主人であるフェイトと、負けたなのはがそれぞれ待ち人の場所へと降りてくる。

やっぱりというか何というか、なのははまた思い悩んだ顔をしている。

「アルフ、大丈夫？」

「あ、うん……大丈夫」

フェイトが心配そうな声で様子を探ねるが、アルフは大丈夫と返事を
する。

そしてフェイトたちがそのまま去ろうとした時、なのはが俺たちの
前に出て口を開いた。

「あなたの、あなたの名前は……！？」

「……その男の子がもう知っているはず」

ご存知の通り、俺はなのはの手伝いをしてはいるけど、フェイトた
ちのことについては何も話してない。

これは別に意地悪してたわけじゃなく、こうなるだろうと思ったか
らこそ黙っていたのだ。

どうせなのはのことだから、「本人の口から聞きたいの！……と
言うのが何となく想像できるし。」

「私はあなたから聞きたいの！」

「……フェイト、フェイト・テストロッサ」

そう自身の名前を口にした後、フェイトとアルフはこの場から立ち
去っていった。

なのはもそうだけど、フェイトの言葉も態度も予想通りだったが、
やっぱり複雑な気分だ。

「なのは……」

「……旅館に戻ろう、ここは冷える」

「……うん、そうだね」

そうして俺たちは旅館の方角へと戻ったのだった。

それと、旅館までの道で何故フェイトのことを知っているかを戻る時に聞かれたが、もっともらしいことを言って誤魔化しておいた。まだなのはたちが知る必要は無いし、それ以上に今は知られてはいけない話なのだからな。

次の日の早朝、俺は朝風呂ならぬ朝温泉をしている。

流石に早朝だけあって男湯には人の気配は無く、温泉特有の香りと湯気が周辺に充満している。

ちなみに何故朝温泉をしているのかというと、訓練をする習慣のおかげで見事に早起きをしてしまい、それなら温泉に入るかということまでここに来たのだった。

幸いこの温泉は早朝でも入浴可能とあったので、少しのんびりと考えるにも丁度良いのもあったわけだが。

「それにしてもフェイト、いやプレシアの望みか……」

プレシアの望み、それは自身の娘であるアリシアを生き返らせる」

と。

俺はその想いが間違っているとは思わないが、フェイトに対する態度には酷いとしか俺には思えない。

プレシアも病気のことで色々あったとは思うけど、俺としてはフェイトのことを大切にしてほしいと思ってる。

だから何とかしてやりたいとは思っているけど、問題はどうやって三人を救うかだ。

「一番の解決策はアリシアの蘇生だけど、俺の力でどこまでやれるかも不明だしな……」

俺の魔法はイメージを形にするモノであり、単純に蘇生をイメージすることは可能といえば可能だ。

けれどそれに関しては色々と不安要素が存在するし、俺の技量で蘇生というイメージを完全に再現できるかという問題もある。

「なあフォルセティ、アリシアの蘇生って可能なのか？」

『……二つほど前提条件がありますけど、可能といえば可能です』

「ふむ、その前提条件の内容っていうのは何なんだ？」

『まずは蘇生への強いイメージ、これはアリシアの魂を肉体に引き戻す為に必要です。』

そして術式維持のバックアップの為に必要となるのが膨大な魔力です。しかしこれはジュエルシードで補うことができますので大きな問題にはならないでしょう』

要するに、俺のイメージが不安材料となっているというわけか。

確かに俺のイメージ……もとい、人間のイメージは正直言って穴だらけと某型月の宝石魔術師が言ってたのを覚えている。

実際、俺が未熟というのが大きいのかもしれないが、それは全てを懸けてやるしかないか。

『……ですが、私としてはマスターに蘇生をさせたくありません』

「どうしてだ、フォルセティ？」

『アリシアを蘇生させるのは私としても賛成です、彼女たちの笑顔は私だつて見たいですから。』

けれどジュエルシードの膨大な魔力にマスターの体が耐え切れる保障はありません。

勿論私もサポートしますが、それでもマスターが無事でいられる可能性は……絶対に無いんです。だから、私は賛成したくありません』

「……そう、か」

フォルセティは俺のことを思つて反対しているのだろう。

何だかんだでこの世界に来てから一番付き合ひの長い相棒だし、誰よりも俺のことを知っている存在だ。

だからこそ、賛成したいけど反対するしかないということか。でも

……

「だけど、俺はアリシアを、プレシアを、そしてフェイトを救いた
いんだ。」

あんな結末は俺には納得できないし、少しでも救える可能性がある
るなら俺は助けてあげたいんだ」

『……そう、ですか。はあ、やっぱりマスターはマスターですね。そう言うのはわかってましたけど』

「悪いなフォルセティ。こうなったら最後の最期まで、俺のどうしようもない程の我俣に付き合ってもらうからな？」

『ふふっ、上等ですよ。こうなれば地獄の底まで付き合いますからね』

こうして温泉に入りながら、俺たちはアリシアを蘇生させる決意を固めたのだった。

けれど、この選択と決意で失うものの大きさを、この時の俺は知る由も無かった……。

第十一話 温泉で一休み!? (後編) (後書き)

一真、決意するの話でした。

でもその決意が叶えられるかは、もう少し先になるのでお待ちになってください。

…さて、ここからは作者の愚痴というか近況報告みたいなものになります。

毎回フラグみたいなのを立てていますが、果たして作者は回収し切れるのか…ぶつちやけ不安です(え
あと、すずかたちが登場していないというのは、外伝とかにでもまとめて書こうかなと思ってます。
本編で長々しくしすぎるのもちょっと…と思ってるので、そのところは勘弁してやってください。

そして遅くなりましたが、更新が長らく出来なくて本当にすみませんでした!

現在忙しい状況が続いており、執筆環境もかなりヤバイ状況(活動報告を参照)で泣けてきた作者です。
でも別にサボるつもりは無いので、気長に更新をお待ちいただけると助かります。

では、また次話にてお会いしましょう。ではでは^^ノシ

PSっぽいもの:時々活動報告を更新しています。もしよろしければ見てやってください。

追記：全体の改訂をしました。

第十二話 目的と覚悟と思惑（前書き）

またしても投稿が遅れてしまって申し訳ありません。

ここ最近体調が芳しくない状態で、寝たきり状態になってました。今は少しずつ良くなっているので無理をせずじっくりと書いていきたいと思えます。

…ちなみに、この話から原作とは違った展開になったりします。ぶっちゃけ上手く書けるか心配です（え

第十二話 目的と覚悟と思惑

温泉旅行から数日が経ち、俺たちは比較的平穏な生活を送っていた。

魔法関係、もといジュエルシードについては旅行の時から特に大きな進展もせず、穏やかな時間が流れている。

俺としては嬉しいのだが、いつジュエルシードが発動するのかとヒヤヒヤしているのも事実だ。

できれば発動しないでほしいとは思っているけど、それは無理だとわかってるからさっさと終わらせたいのだが。

そして日常でも大きな変化は無い……と思っていたが、一つだけ悪い意味での変化があった。

実は温泉での一戦以来、なのはの様子が少し変というか……何ににおいても上の空なのだ。

まあ無理も無いとは思っけど、今日は抱え込んでいる悩みを洗いざらいぶちまけてもらうつもりだ。

その為に、俺はなのはを公園にまで強引に連れ込んだわけだし。

「一真君、その……聞きたいことって？」

「ああ、単刀直入に言うておこう。お前フェイトのことで悩んでるだろ？」

「にゃ！？ ど、どうしてわかるの！？」

「あんだけ私悩んでますオーラを出してれば誰だって気がつくわい」

これは全て本当のことで、アリサやすずかもそれに気づいて心配していたしね。

そこで俺が一通り話を聞いて、それでも駄目なら二人に任せたいと一応話してはある。

まあ、その悩みもここで解決できるようにしてあげたいとは思いつけど、はてさてどうなることやら。

「それで、お前は今どう考えてるんだ？　どんなに変な表現でもいい、考えてることを出してみな？」

「案外それですつきりするかもしれないからさ、遠慮無く言ってみろ」

「……私、迷ってるの。この前フェイトちゃんと向き合って私の意思を伝えただけど、それが本当に正しいのかわからなくなっちゃった。」

あれからずっと考えてたけど、私の方が間違ってるのかな……？」

そう言つて、なのはは俯むすぶいてしまった。

今までの結果が上出来すぎたのもあるんだろうけど、これで見つめ直すべき場所に直面したといったところだろう。

それはフェイトにあつて自身に無いもの……それは『覚悟』であり、何の為に自分は力を振るうのかという『目的』だ。

なのははユーノの手伝いをしたいという気持ちはあつたけど、それはユーノのことであつて高町なのはがやりたいと思つたこととは違つた。

与えられた理由では絶対乗り越えられない自分自身の岐路に、なのはは苦しんでいるんだろう。

だったら年上から少しばかりのヒントでも与えてあげよう、そう考えながらなのは頭をくしゃっと軽く撫でる。

「にゃ！？　一真君？」

「なのは、お前はそんな一度駄目だったくらいで簡単に諦めるのか？」

「そ、そんなこと無い！　諦めたくない、諦めたくないよ！」

「ふう………だったら答えは出てるじゃないか」

「ふえ………？」

なのははよくわからないといった表情をしているが、俺はそれを聞きたかった。

これでほぼ八割方悩みは解決したも同然だし、わざわざ嫌な言い方にした甲斐があるってもんだ。

だって、なのははどうしたいのかという自身の明確な目的と覚悟を自分ではっきりと持てばいいだけの話なんだから。

「諦めたくないなら可能な限り、何度だってぶつかっていけばいいだけの話ってことだろ？」

それに、お前は今までそうやって結果を出してきたんだろう、高町なのは？」

「あ………うん、そうだね、そうだよね」

「ふふ、これにて本日の悩み相談は終了かな。」

それじゃあ俺は用事があるから帰るけど、後でアリサたちに心配かけてごめんって伝えておけよ？ 二人も本当に心配してたんだから」

「うん……あ、一真君」

「ん？ どうした？」

「……ありがとう、何となくわかった気がするの」

なのはの感謝の言葉に、俺は頑張れ魔法少女と言ってその場を去っていった。

なのはとの話が終わって少し経った頃、俺は廃ビル群に来ていた。最早ここでの訓練はお馴染みとなってきたが、今日は少し内容が違う。

勿論訓練もあるが、メインはバリアジャケットの形態を変更するのが目的となっている。

「うん、とりあえずはこれでいいかな」

『何となく、旅人のようなバリアジャケットですね』

「まあね、俺もこんな感じがいいかと思ってな。それに色々使えるようにしたわけだし、役立ってもらおうな」

何故こんなことをしているのかというと、そろそろ登場する管理局勢に正体がバレないようにする為だ。この程度でどうにかなるとは思ってはいないが、やらないでおかないよりはよっぽどいいだろうからな。

今回の調整で、全身を覆い隠す灰色一色の外套^{マント}、そして以前よりも防御力に力を入れたバリアジャケットに変更を終えた。

こんな欲張り設計の代償でスピードが僅かに落ちてしまったが、これは仕方ないし特に問題も無いから無視してもいいだろう。前のバリアジャケットにチェンジできないわけでもないし、細かい調整は何時だって可能だしな。

「それじゃあ訓練する……って、これは!？」

『街中の方でジュエルシールドが発動したようですね。その周辺に結界が張られているようですし、ジュエルシールドがあるのは確定かと』

そういえば街中で発動するっていう話も原作であつたな。

一応、封時結界を張ってるみたいだから外部への影響は無いだろうけど、とりあえず今回は結界内部で様子見をするべきかな。

毎回手伝いに入るのはなのはたちの為にもならないし、本当に危険だと判断した場合に介入するべきだろう。

「それじゃあ、行くのでしょうか」

『それならマスター、ここはゲートを使ってみてはどうでしょうか?』

「ゲートを? アレは一応できるようにはなつたけど、結界内部ま

で入れるっけ？」

ゲート、簡単に言ってしまうえば某キャット型ロボットお得意のどこでもド　だ。

俺が目的地をイメージし、フォルセティが目的地と現在地との空間を連結させるといふ、誰もが一度は夢見たモノだ。

最初は細かいミス等で中々上手くいかなかったけど、今では特に問題も無く使うことができるようになってる。

だからこそ、外界への影響を遮断する結界内部にまで空間を連結させるのは少々無理があるんじゃないのかと思うんだけど？

『それについては問題ありませんよ。マスターがイメージの基点さえ認識できれば、後は私の出番ですしね』

「……そっぴや忘れてたけど、お前もロストログア級のデバイスだもんな」

『ええ、忘れてもらっては困りますよマスター。』

まあ、最近“私”も出番も少なくなってきましたし、ここは“私”たちの力を発揮するチャンスですしね。フッフッフフ……』

「……まあ、やる気なのはいいことだよな」

フォルセティが何やら私の部分を強調していたが、聞かなかったことにしておこう。

さてと、そろそろ行かないとなのはたちの戦いもそうだが、ジュエルシードが暴走する可能性もある。

暴走したままでは封印もできないし、なのはたちだって無理して怪我されても困るしな。

「それじゃあ行くぞフォルセティ……世界を繋げ、ゲート」

魔力を込めたフォルセティを軽くゆっくりと縦に振り下ろすと、人が通れるくらいにまで空間が裂ける。

その裂け目から見えたのは、なのはとフェイト、ユーノとアルフが戦っている光景だった。

そして肝心のジュエルシードはというと、そこにいる全員が完全無視な上に淡い光を発していた……って拙いじゃねえか！

どう見ても発動寸前にしか見えないし、このままだと間に合わないかもしれないぞ！？

「フォルセティ、向こうに着いたら真っ先にジュエルシードの封印をするぞ！ このままじゃ発動しちまう」

『了解、マスター！』

そうして俺は自分で作り出したどこでも ア……もとい、ゲートを使って現場へと急行したのだった。

ゲートから出てきたところで最初に見えたのは、発動しかかっているジュエルシードだった。

俺はすぐに封印の魔法をジュエルシードに施し、沈静もとい封印を完了させる。

このまま発動してたらと思うと、はっきり言ってどうなるかなんて

想像もしたくない。

一つで市内に甚大な被害が出るだろうし、下手すれば結界も破れてしまうことだって考えられる。

とりあえず、この場でのジュエルシードの発動はほぼ無くなったから、当面の危機は脱したといったところだろう。

「ふい〜……間に合ったぜ」

『もう少しで暴走するところでしたからね。ギリギリセーフといったところでしよう』

「一真……君？ その格好は？」

「ああ悪いな、バリアジャケットの構成を変えてて少し遅れちゃった」

フードの部分を左手で下ろしながら、俺はなのはの呼ぶ声に応える。それにしても目的の代物から意識を外してしまうのは駄目だろうに、いくらなんでもさ。

今回は俺が来たからいいようなものを、あくまで危険物なんだから戦闘中であつても少しは気にしてほしいね。

さてさて、俺としては戦闘を回避してフェイトを通じてプレシアとの接点を作りたいんだけど、どうするかな？

誘いに乗ってくれるかは望み薄だけど、やらないでおくよりはマシかもしれないからやっておくか。

「それで、どうするフェイトさんや？ ここにあつたジュエルシードは俺が手に入れちゃったし、これ以上の戦闘は無意味だと思うん

だが？」

「……………帰ろう、アルフ」

「……………わかったよ」

この場は自分たちに不利と判断したのかわからんが、二人は撤退してくるようだ。

これは色々と好都合な上に俺の目的を果たすのにも丁度いいのかもしれない。

「ふう……………（明日の午前十一時、海鳴臨海公園にて待つ。俺のことを知りたいなら来るといい）」

「え……………？」

俺はフェイトにそう念話で伝え、なのはたちの近くに移動する。

その時に少しだけ戸惑ったような声が聞こえたけど、すぐにフェイトの反応は遠ざかっていった。

これで俺の正体を知ることができるかもしれないという種は蒔いたが、どうなることかな。

一真がジュエルシールドを封印している頃、一人の女性がとあるポッドの前にいた。

ポッドの中にはフェイトとよく似た少女が入っており、その少女が

らは生きている気配が無い。

女性はポッドを大切そうに手に触れ、少女の名前を口にす。

「アリシア……私のアリシア」

ポッドからの反応は無く、女性の声は響く音は女性のいる場にある機械音にかき消されるほど弱々しい。

そして女性の目は何処か虚ろで、目の前にいる少女を見つめていると……

「ぐっ……がはっ！ げふっ、げふ！」

女性の顔が苦痛に歪み、口からは夥おびただしいまでの血が地面に落ちる。

それに伴ってか、女性の背中からは黒い霧せむぎのようなモノが体から漏れるようにして出てくる。

だがそれは女性に対しては目に入っていないような、まるで見えていないかのようだ。

「アリシア……もうスコシで、アナタヲ……」

物言わぬ少女……アリシアと呼ばれた少女は目を閉じて、ポッドの中でただひたすら沈黙している。

そして女性は少女の名前を口にし、少女のポッドに縋り付いていた。

………闇との会合は、近い。

第十二話 目的と覚悟と思惑（後書き）

やっと原作とは少し違った話に入れる…でも個人的になのはたちよりも好きなアリサたちが完全に空気になってるorz
無印編が終わったら外伝っぽいものでアリサたちが主役の話を書くから許して（アッー

…さて、次話もなるべく早く投稿出来るように頑張りますので、よろしかったらまた見てやってください。

ではでは、次の話にてお会い出来ますように…^^ノシ

第十三話 闇との会合、そして決戦（前書き）

この場をお借りしてご報告させていただきます。

PV91000、ユニーク13950、お気に入り登録94件、総合評価250を突破いたしました。

この小説を読んでくださる読者の皆様、本当にありがとうございました。

これからも頑張っていきたいと思しますので、どうぞよろしく願いますm () m

。また、これが今月最後の更新となります（誤字脱字の修正除く）

来週からもっと更新速度が遅くなるかもしれませんが、なるべく早く投稿出来るように頑張ります。

誤字脱字などの指摘はお気軽にどうぞ^^

第十三話 闇との会合、そして決戦

フェイトとの戦いが終わった翌日、俺は海鳴臨海公園のベンチに座っていた。

現在の時刻は約束の時間である三十分前の午前十時半、公園には多くの人が訪れている。

このベンチから見える空は穏やかで暖かく、周辺からは虫や鳥の鳴き声が聞こえてくるほど平穏な一時だ。

「（フォルセティ、フェイトたちは来てくれるだろうか？）」

『（わからないですね、こればかりは彼女たちが決めることですから）』

「（うーん……わざわざあれだけ気になることを言ったから、来てくれると思うんだけどな）」

「ご丁寧にもあれだけ俺が色々知っているようなことを口にしたから、気になってると思う。」

フェイトたちにしてみれば、俺はとても胡散臭くて本人しか知りえない情報を持つ謎のガキと思ってるだろう。

そんな俺を気にしないわけは無いだろうし、できることなら情報源を聞き出したいと考えている可能性が非常に高いと踏んでるのだが、はてさて。

『（それで、もし彼女たちが来なかったら、闇の書の偵察でも行きませんか？）』

「（そうだな、最近は殆ど訓練やら打ち合いで暇がなかったし、休

みも兼ねて行ってみるか)」

闇の書はまだ覚醒前で封印はおるか、初期起動で出てくるヴォルケンリッターすらいないだろう。

そうなるかと戦闘になる可能性はかなり低くなる……復讐者であるグレラムと、あと猫姉妹以外での戦闘は流石に無いだろうからな。

『（さて……マスター、どうやらお二人がご到着のようですよ？）』

「（ああ、わかってる）……よつ、フェイトにアルフ。時間前行動してくれるとは、お兄さん嬉しいですよ」

「ガールル……！」

ふざけて言ってみたら、アルフ（人型）に唸り声と共に敵意の混じった目で睨まれました。

今にも襲い掛かってきそうなアルフだが、ここが何処だかわかってやっっているのだろうか？

ほら、公園を通る人たちだってジロジロと俺たちを見てるし、ここはもう少しモチつけ……もとい落ち着け。

「アルフ、落ち着いて」

「で、でもこいつが何かしてきたら……」

アルフの言ってることはこの上ない正論で、いつ正体不明のガキの俺が襲い掛かってもおかしくない。

逆でも同じことが考えられるけど、今日の俺は戦いの為にここに来たわけではないんだよね。

まあ、アルフたちが攻撃してきたら俺も自衛手段を取らせてもらう

けど、俺としては戦うのは嫌なのでギリギリまで避けるつもりだが。

「それじゃあ、少し場所を変えようか。ここでは目立ってしようがないし」

「……わかり、ました」

さて、行ってみましようかね……フェイトたちを救う道にな。

「ほい、聞いてるだけでも喉が渴くだろうからな」

「あ、ありがとうございます」

「ふん……」

先程の場所から少し歩いた所、公園内にある小さな休憩所に俺たちは辿り着いた。

自販機で適当に買った飲み物をフェイトたちに手渡し、どさつという音をさせながら椅子に座る。

ちなみに俺はレモンスカッシュ、フェイトにはアップルジュース、アルフにはオレンジジュースだ。

「それで、お二人さんは何を聞きたいんだ？」

「……貴方は何者ですか？」

「それについてはアルフに言ったんだがな、まあいいか。

改めて名乗ろう、私立聖祥大附属小学校3年生にして自称魔法使いであり、元ホームレスの風樹一真だ。一真と呼んでくれると嬉しい」

「自称魔法使い……魔導師じゃないんですか？」

「そうだな……術式は異なるが、とりあえずは魔導師と思ってもらって構わない。

あと言っておくけど、自称魔法使いと名乗っているのは俺と魔導師の魔法に対する価値観の相違によるだけで他意は無いよ」

魔法陣とリンカーコアを必要としない、そして永遠の間を滅ぼす為の力であることを除けば魔法を使う者という意味では魔導師と呼べるだろう。

けれど俺は魔法に対して執着は無いし、魔法という価値観こだわに拘るつもりは毛頭無い。そこが魔導師とは大きく異なっているからこそ俺は魔法使いなのだ。

俺も魔法は使えるけど、この力が必ずしも人を助ける代物にはならないと思っている。

非殺傷設定に誤魔化されているが、これができる前は文字通り『傷つけて殺す力』に他ならない。

そんな物騒な力を当然のように肯定している魔導師たちの存在、俺にはそんな奴らが異常だと思っし、何より同類と思われたくない。

だからこそ、俺は魔法が使える魔法使いであって、魔法の価値観を基準とする魔導師と名乗る気は無いのだから。

「貴方の目的、そして何故私たちのことを知ってるのですか？」

「それについては言えないが、少なくともお前たちの邪魔するつもりはない」

「嘘だね、いつもアタシたちの邪魔をしてるくせに！」

「まあ、そう思うのも無理はないか。けど今のプレシアにジュエルシードを与えるわけにもいかなかったんでな」

「……………どういうことですか？」

プレシアはアリシアを蘇生の為、ジュエルシードを使って既に滅び去ったアルハザードへ到着しようとしていた。

そしてフェイトにトラウマが残る程の言葉を叩き付け、最後は狂人として思えない行動をした末に虚数空間へと墮ちていった。

傍^{はた}から見ればプレシアは狂っていた、そしてフェイトはプレシアの命令で仕方なくやっていたように思える。

けど、それは見方を変えればプレシアが罪を全部背負って墮ちていったと考えられなくも無い。

もしそうであつたら、俺は尚更フェイトやプレシアに対して救いの手を差し伸べてあげたいと思った。

この考えが正しいのか間違っているのかはわからないけど、これが俺なりに考えた末での結論だ。

「はっきり言っておく、プレシアは何らかの重い病を患っているだろう。それも命に関わる程のな」

「え……………！？ ほ、本当、なんですか……………？」

「それについては今まで近くにいた二人が一番よく知っていると思うぞ？」

苦しそうに咳をする、何もしていないのに呼吸が乱れている、血が足りていないかのように見える顔色、そして人が変わったかのように性格が豹変したとかに心当たりはないか？」

「あ……！？ う、嘘だ……母さんは……そんなことは……」

フェイトは心当たりがあつたようで、顔を青くして信じられずにいるようだ。

けどプレシアが病気によって心身共に追い詰められているのは事実だし、このままでいればプレシアは虚数空間に堕ちてしまうだろう。だが、それでは原作通りでフェイトたちが確実に不幸になるし、容認するつもりは微塵も無い。

「け、けどそれが何で邪魔をすることに繋がるのさ!？」

「アルフたちもわかつてると思うが、ジュエルシードの力は人の手に余るものだ。」

ただでさえ体が弱っているプレシアがそんな代物を使おうとすれば、どうなるかはわかるだろう？

そんな状態で治療もせず、危険物といってもいいくらいのジュエルシードを集めているのはおかしいと思ったのさ。

第一、治療目的に使ってるようにも思えないし、こんなに危険なことをフェイトたちにやらせて何も感じないのだからおかしいだろうに」

「それは、そうだけど……」

一つで市内を恐慌状態に陥らせるほどの魔力を秘めているジュエルシード、それを病気の治療に当てれば完治する可能性は極めて高いはずだ。

しかし、プレシアはその選択肢が思いつかない程にアリシアの蘇生を拘り続け、病気を悪化させて更に視野狭窄が進行する……どう見ても完全な悪循環だ。

だが、俺はそれを断ち切る為に今ここにいるんだ。悪いが一步踏み出させてもらおうぞ？

「そこで二人に頼みがある。もしプレシアが病気だったら俺に治療をさせてほしい」

「「な……!？」」

二人は信じられないモノを見たかのように驚いていた。

まあ、敵対していたかと思っていた俺にそんなことを言われればそういうリアクションを取るのも当然だろう。

「な、治せるんですか!？」

「人の命がかかってることに、俺は見え透いた嘘を言うつもりは一切ない。

幸いなことにバックアップに必要なモノは揃ってるし、フォルセティの補助があれば治療は十分可能だ。

まあ、治ったとしても多少のリハビリが必要になるとは思うが、少なくとも今なら間に合うはずだ」

回復や治療は専門外ではあるが、体の状態が余程酷ひどくなければ治療は可能だ。

ただし専門外かつ慣れてないこともあるから、フォルセティの補助があっても俺自身にかかる負担はかなり大きい。

まあ、自分の我侭でプレシアを治療したいと頼んでいる以上、これくらいのご事は既に承知している。

「……少し聞いてもいいかい？」

「俺に何のメリットがあるとか、俺を信用できないとか大体そんなところだろ？」

「あ、ああ……その通りだよ。どうしてそこまでしようとするんだい？」

「……別に俺は信じてもらう為にやるわけじゃない、ただお前らには俺の分まで親と一緒にいて幸せになってほしいだけさ。

俺はもう、二度と親や兄妹たちと会うこともできないから。だから、尚のことお前たちにはそんな気持ちを味わってほしくないんだよ」

俺は既に自分のいた世界では死んでいるし、それに伴ってもう家族に会うこともできない。

けど、フェイトたちは幸せになれるかもしれないのだから、せめて俺の分までは幸せになってほしい。

まだ手遅れでもないし、手を伸ばせば掴めるはずの幸せを見過ごすつもりは無いんだよね、これがさ。

「あ……ごめん、悪いこと聞いたみたいで」

「いや、別に気にしてないからいい。それで話は戻すけど、俺の頼みを聞いてくれるのか否かを二人で決めてほしい。

俺はどんな決断をしても二人の意思を大切にすし、絶対に裏切らないと誓わせてもらう。

それにもし病気で無かったとしても今日のことは誰にも話さないし、その時の判断は二人に任せる……どうかな？」

「アルフ、私は……」

「アタシはフェイトの判断に従うよ、それにもう決めてるんだらう？」

アルフがそう言った後、フェイトは意を決したかのように俺の方を向いた。

あの話し合いの後、俺はフェイトとアルフと一緒に時の庭園へと来ていた。

転移してきた場所から周辺を見ると、いかにもラスボスが待っているという迫力があつた。

そんな不気味ともいえる迫力に、少しだけ逃げ腰な自分に情けなさを感じてしまうのは許してほしい。

「一真、こっちに母さんがいるからついてきて」

「あ、ああ」

俺はフェイトの言われた通り、はぐれないよう二人の後に歩き出した。

歩く通路には何かの機械の配線があつたり、洞窟みたいな部分も見え隠れしているところを見ると、庭園というよりは秘密基地だろう。それに確か原作では機械兵が多数いたはずなのだが、それらが出てくる様子も無いままで不気味な静けさだけが庭園内に漂っている。

「ここです。母さん、ただいま」

やがて俺たちはプレシアのいると思われる大部屋に辿り着き、フェイトは帰還の挨拶をしながら扉に手をかけた……しかしその瞬間、俺は強烈な何かを感じた。

それは僅かに開いた扉の隙間からで、そこから見えたのは明らかにオーバークイルといえる魔力の奔流が俺たちの方へと向かってくる光景だった。

「ちい!!」

「え……? きゃっ……」

「アンタ、一体何を……!?!」

俺はフェイトを突き飛ばし、瞬時に遮断のイメージを施した防御シールドを十枚重ねで展開する。

そして次の瞬間、とんでもない威力の魔法がシールドに衝突し、シールドを支える両手に凄まじいまでの痛みが稲妻のように奔るのを感じた。

その場しのぎで作り出したシールドは一枚一枚割れていき、あと三枚といったところで衝撃が消えたのを理解できた……とりあえず防御は成功したらしい。

だが俺はそれに安心すること無く、放った張本人……プレシア・テ

スタロツサの方へと視線を向ける。

今の一撃は完全に殺傷設定と物理干涉もオンになっていた。俺が防御してなかったら確実にフェイトたちも死んでいただろう。

「随分な歓迎の仕方だな、プレシア・テスタロツサ」

「……………」

「かあ、さん？ どうして…………？」

「……………」

「？ フェイト、セットアップしろ。何か様子がおかしい」

フェイトが信じられないといった様子のようなのだが、俺はそれに構わずセットアップを完了させた。

先程から視線を外さないようにしてプレシアを見ているが、さつきから身動き一つすらしていない。

その代わりにプレシアの背後から出てきている黒いモヤだが、あれからは未熟な俺でもわかる程の強烈な冷たさと禍々しさがあった。

肌の細胞一つ一つに刺すかのような冷たさ、底の見えない何かが目の前にいるような感覚。

それが純粹かつ無機質な殺気であると自覚した時、俺はフォルセテイを強く握り締めていた…………おそらくこれは本能的な恐怖だろう。俺がそう身構えていると、黒いモヤの一部が何かの顔のようなものを形作って蠢いていた。

「流石八人類の代行者といったところか、我の存在を感じ取ると八

ナ」

「！　そうか、そういうことかよ……永遠の闇！」

「その通りだ、人類の代行者。我ハ永遠の闇の欠片、障害とナる貴様ハここで排除させてもらう」

たぶんではあるが、プレシアの不安定な精神を嗅ぎ付けて憑依したというところだろう。

娘を喪った絶望と魔導師としての実力……スベック　こんなにも都合のいい憑依体な上に、フェイトが集めてくるジユエルシードで力を蓄えることもできる。

それに、あいつにとって対象が誰であつても構わないのだ。どっちにしる全てを無に帰すのが目的なのだから。

「なに、あれ……？」

「どうやらプレシアは悪霊もどき……いや、ある意味ロストロギア以上に厄介なもんに取り憑かれている」

「はあ！？　どういふことなんだい？」

「つまり、プレシアがおかしい原因があれの可能性が高いつていうことだ。とりあえずプレシアを止めるのを手伝ってくれ、俺だけでは無理だ」

そう言ってる間にも、黒いモヤに包まれたプレシアはこちらに杖を向けてくる。

こいつはかなりヤバイ、プレシアは大魔導師と呼ばれる程の実力者だ。それにさっきの攻撃でプレシアの実力を完全に引き出している

ことも証明されている。

おまけにジュエルシードがプレミアの傍に二つも浮いており、二つは絶体絶命としかいいようがない。

「シネ……代行者」

闇との死闘が、今ここに始まる……。

第十三話 闇との会合、そして決戦（後書き）

永遠の闇（欠片）との会合、そして決戦の話でした。

ここでようやく無印におけるラスボス（？）のプレシアさんの登場です。

でもご本人は意識は無い状態ですけどね…完全に体に乗っ取られているのでご本人とは言えませんが。

やっとかさ無印における山場に差し掛かってきたので、このまま頑張って書いていきたいと思います。

では、また次話にて会いましょう…ではでは^^ノシ

追記：後半部分に加筆・修正を加えました。何となく変な表現になったので^^；

第十四話 死闘の果てに（前書き）

PV105000、ユニーク16000、お気に入り登録110件、
総合評価300を突破しました。

この小説を読んでもくださる読者の皆様、本当にありがとうございます。
す…いや本当にありがとうございます。

遅筆にして色んな意味で微妙な小説ではありますが、これからも頑張
って書いていきたいと思しますので今後もよろしく願います m

（ （ m

…さて本題ですが、やっとこさ十四話の投稿です。

まだ無印編は続きますが、これで大きな山場は越すんじゃないかな
〜と思います。

では、本編をどうぞ。

第十四話 死闘の果てに

戦いが始まって二分経過したくらいだろうか、俺たちはプレシアを操っている欠片の攻撃を避けるのに精一杯だった。

プレシアの魔法は途切れることなく放たれており、先程防いだ魔法よりは威力は低い但当たれば致命傷は避けられないだろう。

それにさつきから怖くて微妙に手が震えてるし、本当ならさつきと逃げ出したい……って、今頼にフォトンランサー掠^{かす}ったぞ!?

フードは裂けて傷口からは血が出てきているし、やっぱり殺傷設定での凶悪弾幕なのですな。うん、冗談だったらどれだけ嬉しかったことだろうねチクセウ!

「フォトンランサー、ファイア!」

「はああ!」

「邪魔を、するナ」

フェイトはフォトンランサー等の射撃系、アルフはバインド系で攻撃しているが完全にシールドで防御され、まるで相手にされていない。

俺もフェイトたちに混じってストライクライフルを放っているが、シールドに小さな罅を入れるだけで瞬時に修復されるという状況。やはり俺が未熟であるのもそうだが、あっちはジュエルシールドの力も使ってるから当然の結果だろう。

それならばと接近戦に持ち込もうとも思ったが、あの危険な弾幕に突っ込めるほどの勘や回避技術を俺は持っていない。

唯一シールドにダメージを与えているのは俺くらいだけど、ストライクライフルでは威力が弱すぎて数を撃っても修復の方が早くてすぐに元通りだ。

「それなら、こいつでどうよ……ストライクブラスト！」

「又ウ……グオオオオ！？」

貫通を強くイメージした一撃……ストライクブラストは化け物染みたシールドをぶち抜いてプレシアへと直撃する。

流石に非殺傷設定になっているから死ぬことは無いけど、こいつはジュエルシールドの暴走体でさえ完全に沈黙させた一撃だ。

直撃すればバリアジャケツトをしてる魔導師でもタダじゃ済まないし、普通であればこれで終わりだろう。

そうして俺の攻撃を直撃したプレシアの方を見ると、見るからに弱々しくではあるが立っていた。

心なしか先程よりも黒いモヤ……もとい欠片の支配力みたいなものが弱まっているようなので、攻撃が通れば多少のダメージはあるということか。

だがそう考えていると、プレシアの横にあるジュエルシールドが突然光を発し、それを飲み込むようにして黒いモヤが再びプレシアを覆うように広がる。

「無駄ダ。私ハこれがアる限り、何度でも回復できる」

「ちっ、まさか回復されるとはな。さながら焼け石に水ってところか」

たぶん、このまま俺が一撃を加えてもジュエルシードで回復するを繰り返すだろう。

ジュエルシードの力で大抵の攻撃は防御されてしまうし、仮に通ったとしても倒しきれなければジュエルシードで回復されて元通り。それにこちら側の魔力だって無限じゃない、この状況が続けば間違いない。こちらが魔力切れになるのは目に見えている。

『（マスター、ここはアレを使う以外方法は無いと思われませう）』

「（アレって、まさかグングニルか？　けどアレを使っちゃったら魔力は殆ど無くなるんだぞ？）」

『（ストライクブラストでも倒しきれない以上、現状における最高の威力で打倒する以外方法はありませんよ。）

それに、このまま出し惜しみをしててもどうしようもないというのは、マスターだってわかっているのでしょうか？』

「（……………そうだな、ここは一撃に賭けるしかないな）」

あんな馬鹿げた回復力を持っている以上、一撃で欠片を跡形も無く打ち倒すしか方法は無い、か。

一応ストライクブラスト以上の威力を持った魔法はあるが、極力使いたくないんだよな……………魔力と体力を桁違いに消耗する上に反動も半端じゃないから。

けど、出し惜しみをしていて死にましたなんていうのはみっともないし、次の一撃で勝負と行こうか！

「（二人とも……………一瞬だけでいい、プレシアの動きを止めてくれ。）

「一撃で終わらせる」

「（……何か方法があるんだろうね？）」

「（ああ、俺のとおきのおきの魔法で勝負を仕掛ける。フェイトもい
いか？）」

「（うん、私は一真を信じるよ）」

二人の同意を得て、俺はフォルセティに残っている魔力を注ぎ始め
る。

そしてフェイトとアルフはプレシアに対し、先程と同じようにして
魔法を展開していく。

フォトランサーとチェインバインドは発生スピード重視に切り替
えられ、プレシアに凄まじいまでの弾幕が向けられる。

二人が時間を稼いでくれるその間で、俺はフォルセティをいつもの
ライフルモードから一撃を放つのに最適なモード……大口径のリミ
ットオーバーモードへと変形させる。

注がれた魔力はフォルセティの内部で増幅され、砲口に収束・圧縮
をされていくことで魔力が唸りをあげている。

『魔力圧縮……完了。発射、いつでもOKです』

「よし、一撃で終わらせるぞフォルセティ」

イメージは浄化……それは取り憑かれているプレシアではなく、欠
片自体に直接ダメージを与える砲撃魔法。

非殺傷設定であるから人体に対して深刻なダメージは与えないが、
こいつは対永遠の闇を想定して編み出した現時点で最大級の威力を

誇る一撃だ。

俺が持つ魔力の七割以上の魔力を使ってしまおうという大きいリスクがあるが、それを補って余りある俺の切り札だ。

「（二人とも、もういい！）」

「「！！！」」

砲口の魔力が眼前の間を打ち払えと唸るのを耳にしながら、俺はプレシアへと狙いを定める。

そうしているとプレシアが俺の魔力に気づいたのか、こちらに向かって砲撃魔法が俺に向かって放たれるが、もう遅い。

既にフェイトたちもこちらのことを察して危険域から離れているし、あとは心置きなくトリガーを引くだけだ。

「これで終わりだ、ストライクインパクト・グングニル！」

白い魔力の塊はトリガーを引かれたことで一筋の光となり、プレシアに取り憑いている欠片への終焉を齎す為^{もたら}に突き進む。

それはプレシアの放った魔法を消し去りながら突き進み、プレシア……もとい欠片はそれを見て相殺できないと判断したのかシールドを展開する。

「グ、オオオオアアアア！？」

「このまま、光になれええええええ！！！」

だがシールドに当たって防御したかのように思えたのは、ほんの一瞬だけであった。

光は障害となる壁を薄^{シールド}い硝子のように砕き、その破片すら巻き込ん

でプレシアへと直撃する。
黒いモヤは光に変換されるようにして消えていき、膨大なエネルギー量を持った光は眩い光と衝撃を周囲に撒き散らすのだった。

光と衝撃が無くなったところで命中場所を確認すると、そこにはプレシアが倒れていた。

黒いモヤみたいなものは消え去っており、その近くにはジュエルシードと透明な水晶の欠片みたいなものが落ちていた。

おそらくジュエルシードと共に浄化された永遠の闇の欠片で気になるが、とりあえず今はプレシアとジュエルシードが優先だ。

高揚した精神を落ち着けながら水晶を回収し、大きく深呼吸をしてフェイトとアルフの方へと顔を向ける。

これようやくスタートラインに立てたというところ、さっさとスタートしないと手遅れにもなりかねない。

「フェイトとアルフはジュエルシードの封印をやっていてくれ。俺はプレシアをメディカルチェック後に治療を行うから」

「う、うん」

「あ、ああ……わかったよ」

俺たちはすぐにメディカルチェックを開始し、プレシアの状態を把握することに徹する。

フォルセティからプレシアの身体状態が俺へと流れ込み、異常な部分に対しての情報を自分で整理しながら把握していく。

ふむ、プレシアの全身の至る場所に腫瘍や臓器不全、機能低下が目立っており、既に死人同然といえるだろう。

地球ではまず助からない、というか某B J先生でも絶対に匙を投げるレベルだと思っても仕方ないくらいだ。

途中経過だけでもこんな酷い有様なのに、こんな状態で外科手術なんて既に体力的にも限界を超えているから不可能だしな。

『スキャン完了。思ったよりも酷いですが、何とかいけますね』

「そうか、それじゃあフォルセティ……超高速治療、行くぞ！」

『了解、マスター。超高速治療、開始！』

こうして近くで顔色を見ても血が通っているとは思えないし、生命力みたいなものがごっそり抜き取られたかのように感じられない。まさに死んでいるようにしか思えない、棺の蓋を閉める寸前ともいうくらい限りなくアウトに近い状態で“かろうじて生きている”のだろう。

けど、俺たちはそんな理不尽を覆す為にここにやってきたのだ。

異常部分……悪性腫瘍である癌細胞の消滅、正常な細胞の分裂の促進、体内にある有害物質の除去や必要な物質の補充という肉体の治療。

そして殆ど失っている肉体の生命力を全盛期レベルにまで回復・維持を施す生命力の回復を超高速かつ超精密に行っていく。

やがて全ての治療が完了し、もう一度メディカルチェックを行ったが特に問題は無かった……治療成功のようだな。

顔色も随分良くなっているのはいいんだけど、心なしか治療前より若返っているのは気のせいではないだろう。

俺は額に掻いた汗を左手の甲で拭い、再び深呼吸をしてフェイトの方へと顔を向ける。

「あ、あの……母さんは？」

「一応治療後にメディカルチェックもしたけど、もう問題無いよ。今は眠っているだけだ」

「あ、あう、ありが、とう……」

回収の終えたフェイトが心配そうに聞いてきたが、俺の言葉に安堵して泣き始めていた。

その様子は心から安堵したかのような、大切な人が生きていたことに今まで溜め込んでいた感情を吐き出すかのように俺には見えた。無理も無い。フェイトだってまだ十歳にもなっていない女の子、大好きな母親を喪うかもしれない恐怖から解放されたのだから。

……あ、あれ？ や、ヤバイ。フェイトの安心した顔を見て気が抜けたのか、意識が朦朧としてきやがった。

グングニルのせいと魔力が空っぽな上に治療の反動のせいで力が入らないし、ここにきて疲労や負担が一気に押し寄せてきたのか。

く、い、いかん、もう意識を保ってられない……眠くなってきた。

「？ アンタ大丈夫かい？」

「か、一真？」

「わ、悪い。少し休む」

『マスター！？』

皆の声を聞いたのを最後に、俺の意識は真っ暗な闇の中へと落ちていくのだった。

「む、う……あれ？　ここは何処だ？」

目を覚ましてみると見慣れない天井、それが見えた。

ゆっくりと体を起こして周囲を確認しても見覚えの無い部屋、そしてベッドの隣で横になっているアルフ（獣状態）がいた。

「ん、起きたのかい」

「アルフか、ここは？」

「時の庭園で使っていない一室だよ。まったく、いきなり倒れるなんて心配するじゃないか」

「ハハハ、それについてはすまない。流石に魔力も空っぽで疲労が溜まってな」

ベッドから降りて一通り体の調子を確認すると、魔力不足による強い脱力感と眩暈めまいがする程度だったが問題は無いだろう。

まあ負担の大きいグングニルも使ったし、あまり得意ではない治療

もあつたから暫くこの状態かもしれない。

「それで、フェイトはどこにいるんだ？」

「ん、フェイトはプレシアをつきつきりで様子を看てるよ」

「……そうか。それじゃあ様子見がてらに二人のところに行こう」

そうして俺たちは部屋を出た後、アルフの案内で二人のいる部屋へと向かう。

歩くことでだるさの度合いがよくわかるのだが、これくらいなら風邪を引いた時の方が辛いのであまり気にしない。

まあ、これで戦闘なんていうことになれば確実に負けるだろうけど、もう戦闘は無いと思うから別に構わないだろう。

そう考えていると、アルフがフェイトたちのいるらしい部屋のドアを開いて中に入ろうと促す。

ドアからはベッドで横になって眠っているプレシアと、それをベッドの横で椅子に座りながら看ているフェイトがいた。

プレシアも顔色は健康な人間といっても差し支えないもので、こちらを向いたフェイトは少々疲れたかのような顔だった。

まったく、親子共々無理しすぎているんだから少しは休んでくれよ。

「あ、一真。もう大丈夫なの？」

「ああ、おかげさまでな。それでフェイト、プレシアの様子は？」

「あ、うん。一真のおかげで顔色は良くなったけど、まだ眠ってる」

フェイトの言葉に少し安心しながらプレシアを見ると、やはり深く眠っているようで起きる気配は無い。

俺がそう考えていると、何か小さな声が聞こえてきた……これは念話か？

「（あなたね、私を治療したのは）」

「（ああ、起きたようだなプレシア・テストロッサ。それで念話で話すということは、二人きりで話したいことでもあるのか？）」

フェイトとアルフにはれないよう、即席のポーカーフェイスをしながら念話を続ける。

プレシアの真意はまだはつきりとはわからないけど、俺にも言いたいことや聞きたいこともあるから是非もない。

「（……………ええ、お願いできるかしら？）」

「（ああわかった、少し待ってる）」

「一真、どうしたの？」

「いや、何でもなし。あ、そうだ。フェイト、アルフ、一応容態のチェックをしたいから別室で待つててくれないか？

終わったら念話で呼びかけるからさ、その間に二人は少しでも休んでいてくれ」

「あ、うん。アルフ、行こう」

「ああ、わかったよ」

俺の言葉に二人はこの部屋から出て行くのを確認すると、俺はベッドの隣にある椅子に座る。

プレシアはゆっくりと体を起こして俺の方へと体を向け、俺を真剣な目で見つめてくる。

先程までの人形のような感じの目ではない、きちんと生気があって理性がはっきりとしているようだ。

どうやら慣れない治療をやった甲斐があったみたいだな。

「ふう………それでは何から話をしようか、プレシア・テストロツサ？」

軽く一息吐いた後、俺はプレシアとの話し合いを始めたのだった。

闇との会合は代行者たちの勝利に終わった。

だがこれで終わりではない、闇の欠片はまだこの世界に残っているのだから。

第十四話 死闘の果てに（後書き）

闇の撃退、そして救済に向かったの話でした。

それと改めてになりますが、今回もかなり遅れてしまい、本当に申し訳ありませんでした。

活動報告にもちよこちよこ書いてますが、職業訓練等のおかげで執筆が出来ませんでした。

なんせ平日ずっとワードでの打ち込みをやつて、右の人差し指が腱鞘炎になりかけてまして…現在もすごく痛いです。

けど時間が出来次第、ちまちま書いていこうとは思いますが、よろしくお願ひします。

…それともう少し先になるとは思いますが、PV10万記念として何か話を書こうかなと思っていきます。

まだ書く内容は決めておりませんので、よろしければどんな内容の話を書いてほしいのかという事でアンケートを取りたいと思っています。

とりあえず私が即興で思いついた選択肢と内容は…

1：なのはとの魔法における覚悟についてのお話（本編におけるIF話になります。内容が理屈っぽくなりそうです）

2：聖祥付属に入学するまでのアリサとの勉強のお話（外伝的な話になります。日常話です）

3：月村家関係、すずかとのデートのお話（外伝的な話になります。日常話です）

- 4：他の作者様方の小説におけるクロス話（事前に作者様の了解が必要、正直自信は全くありません）
- 5：主人公の過去話（主人公の前世における回想のような話になります）
- 6：その他（上記の選択肢以外での話）

…と、こんなものを一応参考までにあげてみました。期限は来月いっぱいまでとします。

よろしければ感想、メッセージ、活動報告などにご記載ください、期待に応えられるかはわかりませんが（え

…それでは、アンケートもそうですが、これからも作者と小説共々よろしく願います。

ではまた次話にてお会いしましょう、ではでは〜^^ノシ

第十五話 その願いは誰が為に（前書き）

遅くなって本当に申し訳ありませんでした。

さりげなく来週の火曜日に資格試験もあつたりしまして、中々ハードなもので（え

それとまだアンケートは継続して行っていますので、よろしければご応募をお願いします。

…それでは、第十五話をお楽しみください。

第十五話 その願いは誰が為に

「まずは先に礼を言わせてもらおうわ。治療のこと、ありがとう」

「別に構わないさ、こっちが勝手にやったことだからな。」

それで一応聞いておくが、体の方はどうだ？ とりあえず特に問題は無いと思うが」

「ええ……けど妙な気分だわ。今までの感じていた重さが嘘のように消えたのには、ね」

手を動かすにもどこかぎこちないような様子で、プレシアは軽く一息ついた。

一通りの異常と思われる部分を全て治したが、まだ治った状態に慣れてないだろう。

それは重い長靴からいきなり裸足になったようなもので、頭と体の感覚が一致してないのと同じだからだ。

そんな違和感を修正するのは、やはり本人のリハビリ以外に治す方法は無いのだ。

「とりあえず自己紹介くらいはしておく。俺は風樹一真……地球、いやそっちの言い方では第97管理外世界出身の魔法使いだ」

「そう………私のことも知っているようね」

「まあ、な。それで、聞きたいことがあるんじゃないのか？」

「ええ、貴方はどこまで私たちのことを知っているのかしら？」

「ふむ、そうだな。俺の知っていることに穴があるかもしれないけど、それでもいいなら話そう」

そうして俺はプレシアやフェイトについて、自分の知っていることを話し始めた。

一人娘のアリシアをヒュードラの暴走事故で喪い、それからずっとアリシアの蘇生に全てを擲^{なげ}ってきたこと。

その過程において人造魔導師計画……プロジェクトF・A・T・Eと呼ばれる代物に手を出してアリシアを蘇生させようとしたこと。しかし、生まれたのはアリシアであってアリシアではない存在……絶望と憎悪からその子をプロジェクト名から取ってフェイトと名づけたこと。

そして、最後の可能性としてアルハザードに至ることを考え、その為にジュエルシードを集め始めることを計画したこと。

その他、俺の持つ原作知識、そして今まで体験してきたことに推測を交えた内容を全て話し終えた。

「驚いたわ、よくそこまで調べたわね。貴方、本当に何者？」

「地球にいる、魔法を使うことができるだけの九歳^{ただのガキ}児さ。

さて、今度はこちらからも聞かせてもらっけど……今までやってきたことについての記憶はあるか？」

「……………ええ、全部覚えてるわ」

今までのことを覚えている、その言葉が意味するのは永遠の闇に体

を乗っ取られても自意識はあったということだ。

そのことに色んな感情を込めた小さな溜め息を吐き、プレシアの方に顔を向ける。

「そう、か。それを踏まえた上で聞かせてくれ、お前はフェイトをどう思っている?」

「……………今でも嫌いよ、アリシアのでき損ないの人形でしかないわ」

俺はその言葉に怒りの感情が沸きあがったが、プレシアの顔を見た瞬間にすぐ冷めていた。

何故なら嫌いと言った本人の声と顔がこれ以上になく苦しそうで、まるでそう言わなければいけないと自分に言い聞かせているようだったからだ。

それに体が満足な状態でもないのに、手の色が変わるほどに強く握り締められたスーツがその葛藤の強さを表している。

フェイトはアリシアにはなれなかった、それに対してどうしようもない憎しみがあるのは事実なのだろう。

けれどプレシアはフェイトのことを全部憎みきれていないのではないだろうか、俺はそう思った。

もしかしたら、優しくかったが故にフェイトを憎むことも愛することもできないままだったのかもしれないな。

「フェイトは紛れもなくお前の娘だ、出来損ないなんかじゃない。それはお前自身もわかってるはずだ。」

お前が助かったと聞いてフェイトは泣いていた、お前のことが誰よりも大切だったからこそ泣いていたんだぞ?」

「違、う。違うわ、そんなこと、あるはずが無いわ……」

「はあ………いい加減にしるよプレシア・テストロッサ、お前は逃げていたんだ。」

今は亡きアリシアに、そして慕ってくれるフェイトに自分の都合のいい理想を押し付けてきたという罪（げんじつ）にな。

その償いを……いや、そろそろお前は向き合わなきゃならない。立って進まなきゃならない。

他の誰でもないお前自身の為に、そしてアリシアやフェイトの為に現実に向き合っていかなければいけないんだよ」

アリシアの為に全てを捧げてきたプレシアだが、そのツケともいうべきものはある。

今まで目を背け続けてきた、フェイトとアリシアに一人の母親として向き合うということ、その現実に立ち向かわなければいけない。

そうしなければフェイトは勿論、プレシアのこれまでの人生も、事故で犠牲になったアリシアにも救いというものが無い。

だから今こそ、プレシアはフェイトのことを自分の娘として向き合うべき時なんだ。

「でも、私は……あの子たちに許されないことをしてきたわ。今更母親として接することなんて………できるわけないわ」

「はあ………まったく、そんなんじゃないやお前が一番よく知っているはずのアリシアに怒られるぞ？」

お母さんの意気地なし、フェイトは私の妹なのにどうして………つてわ。

フェイトにどう接していいのかわからなくて怖いだろうけど、こ

れからはフェイトやアリシアの母親として向き合ってみるよ？

それを誰よりも望んでいるのは他ならぬフェイトであり、アリシアであるはずなんだから」

「……………」

俺の言葉にプレシアは俯き、何も言わなくなってしまった。

だけどプレシアは今ここで言っただけでやらなければ自分の気持ちにも、向き合うべき現実にも目を逸らしたままの抜け殻に成り果ててしま

う。そんな状態でアリシアの蘇生をしたところで本当の意味での救済にはならないし、プレシアが少しでも変わることこそがスタートになるのだから。

「また様子を見に来る。それまでに気持ちを整理してくれ」

俺はそう言って部屋のドアから出て行った。

事情を話すのはプレシアがもう少し体の調子が戻ってからでも十分だろうし、もう時間にしても夜になってるだろう。

だから今日はここまで、それに俺がやるべきことは終わったのだから。

願わくば、プレシアの止まっていた時間が動き出しますようにと思

いながら、俺はフェイトたちのいる部屋へと歩き出した。

あの日、私は全てを失った。

私にとってかけがえの無い存在を喪つてから、自分の中で何が止まってしまった。

いや、止まったというのは適切ではない……そう、私の中で何が壊れてしまったというのが一番近いのかもしれない。

それを自覚したのは、あの子……フェイトが生まれしてきた時だった。あの子がアリシアであってアリシアでない“贗者”であると知ったその瞬間、自分の中にあるどす黒い何かが溢れた。

その正体はアリシアの蘇生失敗による絶望、そして紛い物であるフェイトへの憎悪だった。

どうして、世界は私に優しくないのだろうか、私がいたい何をしてきたというのだろうか。

私の手元に残ったのは愛しいアリシアの亡骸、アリシアになれなかった紛い物であるフェイトだけ。

思えばフェイトへの、そして理不尽な世界への憎悪と絶望が積み重なったあの時から、私の理性や人格は底知れぬ闇へと落ちていたのかもしれない。

あの少年が私を止めるまで、私はそのことにすら気づけなかったのだから。

「あ、あの……母さん？」

私のことを心配そうに、オドオドしているフェイトが椅子に座りながら聞いてきた。

あの少年……風樹一真は説教をした後、フェイトに何かを言って庭園から去っていったらしい。

私たちの過去を知り、アリシアの紛い物であるフェイトのことを自

分の娘だろつと言った謎の少年。
何故そんなことを知っているのかも気になるけど、今は気まずい上に何を言えばいいのかわからない。

フェイトに散々酷い仕打ちをしてきた私が、今更何を言ってあげればいいの……？

「母さん、体……大丈夫？」

「え、ええ。フェイト、悪いのだけど何か飲み物を持ってきてくれないかしら？」

「あ、はい」

フェイトはそう言って部屋から出て行き、飲み物を取りにいった。

今にして思えば私は何を思って、何をしてきたのだろうか？

アリシアとの日々を取り戻したかった、最初はそれだけのはず……だった。

だけど、今は自分が何の為にこうしていたのか、何をしたいのかすらわからないままにいる。

信じてきたことがアリシアに対しての冒^{エロ}流であると知ってしまった……今の私は抜け殻のような存在になってしまったのだから。

「酷い有様ね、私……あの子にも、アリシアにも母親でいてあげることができなかつたのだから」

あの子に、フェイトに対して憎悪とは別の感情もあつたのは自分でもわかつていた。

それでも私は認められなかった、いや……認めてしまえば自分が自分でなくなるような気がしていた。

アリシアになれなかったあの子に、アリシアと同じ名前にしたくないからとプロジェクト名から取った名前を与えて誤魔化していた。

そう、私は怖かったのだ。アリシアが死んだことを、フェイトを自分の娘であると認めることを。

「母さん、持ってきました……」

「え、ああ、ありがとうフェイト」

相変わらずオドオドしているフェイトに戸惑いながらも、水を受け取ってコップに口をつける。

これから自分はどうするのかをはっきり決められていないけれど、次にあの少年が訪れる時までには答えを出したい。

もう二度と、何かを失うのも逃げることもしたくないから。

時の庭園から戻ってきて三日ほど経過したが、特に大きな変化は無かった。

体の調子は既に問題無い状態まで回復し、空っぽだった魔力も六割程までではあるが回復している。

あまり無理をしなければ何もしなくても問題無く回復するだろうが、いざという時は突然来るので油断はできないけど。

そんな状態の俺だが、夕食を食べ終えた今は自室でフォルセティと話し合っている。

ちなみに話の内容としては、今俺が手に持っている透明な水晶がどういうものなのかだ。

そう、これは永遠の闇の欠片を倒した時に手に入れた水晶なのだが、これがまた奇妙なモノだったのだ。

「この水晶、一体何なんだろうな？」

『構成物質が普通の水晶のものではないのは確かなんですけどね。解析しても殆どわかりませんでしたし……』

少し回復したところで水晶を解析してみたのだが、こいつは未知の物質であることだけしかわからなかったのだ。

ただ魔力を通してみると透明だったのが白く光った程度で、徐々に光は弱くなって消えていくという現象は起きたけど、結局それだけだった。

他にもコツコツと手の甲で非常に弱い刺激を与えても、響いてくるのは水晶と同じ反響音。

色々な面での解析結果でも未知の物質であるという結論に加え、凄まじいまでの硬度を持っていて加工は不可能ときたもんだ。

まあ、このまま出しておくのは色々と拙い気がするのでフォルセティに預かっておいてもらうか。

「とりあえずフォルセティ、これ保管しておいてくれないか？」

『ええ、もしかしたら何かに使えるかもしれないしね』

水晶、もとい未知物質は光の粒子になってフォルセティの中へと回収・保管される。

永遠の闇が自身の媒介にしていたものだから何かあるのかとは思っただけど、現時点ではガラクタでしかない。

そのことに安堵していいのかわからないけど、この石に関しては暫く様子見といったところだろう。

そう思いつつ、俺は自分のベッドに背中から倒れるようにして横になった。

早く魔力を回復させる為にも早く休みたいし、一通り回復したらプレシアの様子を見に行かないといけない。

そこで今回の事情も話さないといけないし、アリシアのことについてもやらないといけないことだってあるからな。

「なあフォルセティ、ああは言ったけど……プレシアは変わるんだろうか？」

『それは、彼女次第としか言えませんね。でも彼女を信じましょう、今はそれしかできませんから』

「……まあな。それに俺も人の心配をしている暇はないんだけどな、本当はさ。それじゃおやすみ、フォルセティ」

『マスター………はい、おやすみなさい』

そう軽く言った後、毛布を被って目を閉じた。

徐々に暗闇の中に意識が薄れていくのを自覚しながら、俺は眠りについた。

第十五話 その願いは誰が為に（後書き）

それぞれの思い、それは誰が為に…の話でした。

管理局勢がまだ出てきていませんけど、もうちょいすると出て来る予定ですのでもう少しお待ちください。

けどまあ、うちの一真は管理局に協力するつもりは微塵も無いので、どんな形になっても衝突は不可避だったりしますが。

それでは、また次話にてお会いしましょう。ではでは^^ノシ

第十六話 選択の刻（トキ）（前書き）

大変遅くなりましたが、本当に申し訳ありません。

来週にはまたもや試験（今度はExcel2007）ですが、予定よりほんの少し早く投稿させてもらいました。

また、今回からほんの少しずつ書き方を変えていきます。まあ殆ど目立たないような変更ではありますが。それでは、第十六話をお楽しみください。

第十六話 選択の刻（トキ）

未知の物質を解析した日から三日後の夕方、大きな魔力の気配を感じ取った。

この方向からして臨海公園近く、おそらく海に落ちたジュエルシードが発動したのだろう。

飛行魔法ですぐに現場に向かって目にしたのは、ジュエルシードを取り込んで根を鞭のようにして暴走している樹だった。

ただ不幸中の幸いか、なのはとユーノが先に到着していて封時結界を張ってくれていたことで周辺に被害は出ていないようだ。

既になのはが樹に攻撃して沈静化を狙っているので、万が一に備えて俺は見つからないよう少し大きめに距離を取って隠れながら様子を見ている。

アリシア蘇生の為にできるだけ魔力を温存しておきたいし、手助けするのは容易な上に管理局もそろそろ現れてもいい頃合だしな。

あと、それとは別に一つだけ気になることがある……本来この場にいるはずのフェイトとアルフが何故か姿を見せていないのだ。

「（フェイトたちが来ないな……確か原作では来るはずだったんだが）」

『（まだプレシアの看病をしているのだと思いますよ？ あの子の性格から、不安定なプレシアを放っておくのは無理そうですね）』

フォルセティの言葉に、俺は妙に納得できてしまった。

確かに、フェイトにしても今のプレシアを放ってジュエルシードを

集めに来るのは考えにくい。

プレシアの為にという気持ちで動くフェイトも、プレシアが病み上がりとなればプレシアの看病を優先する可能性は大いにある。

フェイトは良くも悪くも純粋で優しい、だからこそプレシアに行けと命令されてもこればかりは聞き入れないという光景は何となく想像できた。

何しろフェイトの望みは、プレシアとの幸せな生活こそが一番の行動理由なわけだし。

「（しっかし、なんつー馬鹿魔力だ）」

『（単純に威力だけならストライクプラスト以上ですね、あの砲撃魔法）』

そんな考えに耽っていたら暴走樹に対して極太の桃色光がぶち当たり、樹は光と共に消え去った。

暴走樹がいた場所からジュエルシードが現れ、なのはがさかさず封印・回収を完了して当人たちは一息ついた。

回収できてよかったと安堵するなのはとユーノの二人に思わず小さな笑みを浮かべ、俺は帰ろうとゲートを開く準備をする。

これでとりあえずは一安心、そう思っていた時が俺にもありました。

「待ってもらおうか、君たち！」

もしかして俺のことか、一瞬そう思ったけど声のする方向は俺の隠れている場所からは程遠く、声もほんの少しだけ聞こえたくらいだった。

声のした方に息を潜めて見つからないように覗くと、空気の読めな

いと定評のある黒い子供がなのはとユーノの傍に現れていた。

あちゃ〜……ついに来ちゃったか、個人的KYと思われる人ランキングダントツのトップが。

「えっと、貴方は？」

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。話を聞くからついてくるんだ」

「管理局！？」

KYの言葉にユーノが驚き、なのはが訳がわからなくて混乱してオドオドしている。

しかしKYは定評のある空気の読めなさを全開で話を強引に進めようとしており、拒否は認めないとばかりの視線で二人を逃そうとしない。

もしなのはたちが逃げようとするならば、間違いなく手に持ったデバイスでバインドや攻撃魔法を放ってくるだろう雰囲気だ。

そんな様子を見ていて思ったのは、「何見当違いなことを言ってるの？ こいつ馬鹿なの？ 死ぬの？」という明らかな侮蔑だった。管理局の言い分では管理外世界への干渉は禁止らしいけど、実際目の前でやっていることは全くの正反対というのがどうにも救えない。加えて、クロノがなのはたちに任意同行を求める態度は高圧的で、事が終わってから出てきて現場にいた二人の心配をする素振りを一切見せていない。

つまり、こいつらが行っていたのは漁夫の利狙いの静観。なのはたちが必死でやっているところで高みの見物を決め込んでいたのだ。

危険な現場にいたなのはたちを第一に心配しないのはそのことを知っているからで、人の為に動くという組織の人間とは思えない言動や行動。

危険と判断したら躊躇無く手伝うつもりで俺に対して、その行動は怒りを買うのに十分すぎた。

「（なあフォルセティ、あのクソツタレ叩き落していい？）」

『（我慢してください。それに、マスターにはやらなきゃならないことがあるでしょうに）』

「（む、むづ……くそっ！）」

アリシアを蘇生させるといふ重要なことがある以上、魔力を温存しないといけないし、何より管理局に関わるわけにはいかない。

それは十分わかっているつもりだが、あそこまで他人のことを考えない態度には怒りを通り越してもう一周してきたかのような気分だ。

思わず両手に力が入るが、思い切り強く握り締めることで自分を踏み止まらせる。そうだと落ち着け、冷静になって考えるんだ。

あいつらとて取って食うわけではないし、なのはたちにも自分たちのことをきちんと認識させるのには丁度いいかもしれない。

幸いにも自分の存在はなのはとユーノの二人に限らず、魔法を知る人たちにも極力話さないように言っているからバレルの可能性も多少は低くなっている。

だったら、ここは一旦管理局ご自慢の建前ほや実績せを見定めるのにもいい機会かもしれない。

リスクは大きいが、ここは様子を見させてもらおうか……不本意で

はあるが。

「（…… フォルセティ、時の庭園に行くぞ）」

『（マスター、いいんですか？）』

「（いかに管理局とて常識はあるだろう。それに、もしなのはたちに危害を加えたらユーノに頼んで管理局あいつに全て責任を擦り付ければいいだけだ。

それに俺たちにもやらないといけないことだってあるし、全部が全部なのはたちの面倒は見切れないよ）」

『（かなり酷いことを言いますねマスター。でもそれが一番なのかもしれないね、彼女たちは現実を知らなすぎる）』

「（まあ、な。それになのはたちが明らかに間違った道に行きそうになったら、俺が叩き潰してでも矯正してやるだけさ。

それが友人として、自称魔法使いとして、人生の先輩として高町なのはにできる最大限の偽善だよ。さ、行くとしようか）」

俺はそうしてゲートを展開し、時の庭園へと向かったのだった。

一真が目的地に辿り着いて目にしたのは、数日前と変わらない光景だった。

何かの機械に繋がっていると思われる配線がいくつもあがるが、一真は何故か周辺をキョロキョロと見渡して口を開く。

「到着したのはいいが、何か空気が変わった気がする」

『そうですか？ 私には特に変わったような感じはしませんが……』

「そうか？ なら俺の勘違いかな。さてと、話をつけにいこうとするかね」

そうやって一真は時の庭園の内部、方向は以前プレシアがいた部屋を指して歩き始める。

スニーカーで歩く際に響く音がやけに大きく響き、それが庭園に人気の無さを嫌でも本人の耳へと届く。

その音を不気味に思いながら進んでいくと見慣れた人物が歩いていた。

「おーい、フェイト」

「え、一真？ どうしてここに？」

「プレシアの状態を診に来たのと、少し話があつてな。前にこの座標は一応覚えてたからそれで来たんだよ」

声をかけられたフェイトは一真を見て少しだけ驚いた様子であったが、一真の言葉で納得していた。

一真も以前プレシアにまた来ると言つてあつたが、どうやらフェイトに言わなかったらしい。

「それで聞きたいんだが、プレシアは起きているのか？」

「え、うん。部屋で少し休んでるから」

「ほえ？ 体の調子が悪いのか？」

「ううん、いきなり体が治ったから少しずつりハビリしているところだったんだ。」

「ついさっきまでやって部屋に戻ったところだけど、まだ母さん起きてると思うから案内するね」

フェイトの説明に一真はなるほど、と納得したように頼むと言って微笑んだ。

そうしてフェイトと一真の二人はプレシアの部屋を目指して歩き始める。

二人分の足音が静寂を保っていた通路に響き、何となく一人の時よりも心強いなど一真は思っていた。

自分がこんなに静か過ぎる場所に住むのは嫌だなあ、という気持ちをこの庭園で改めて思い知らされたからだ。

それはフェイトにしてみても同じらしく、足取りが心なしか軽いような印象がある。

フェイトの場合、プレシアとの接点が今まで以上に多くなっているのだから当然といえば当然であるが。

やがてプレシアの部屋の前らしきドアを前に、フェイトが用件を簡潔に言って入室許可を得て、すぐにドアが開く。

そこにはベッドで身体を起こし、入ってきた二人を見るプレシアがいた。

「よう、プレシア。念の為の定期健診と話があって来させてもらっただぜ」

「ええ、そろそろ来るとは思っていたわ。それと聞きたいのだけど、どうやってここに来たのかしら？」

「こつちの魔力と疲労も回復したからな。どうやって来たのかは秘密ということで勘弁してくれ」

一真はプレシアの質問に対して苦笑いをしながら答えをはぐらかした。

「あ、一真。私席を外してたほうがいい？」

「いや、今回は別に難しいことをするわけじゃないから大丈夫。それにその後の話にはフェイトに限らずアルフにも聞いてほしいな。それで悪いんだが、念話でアルフを呼んでくれないか？」

「あ、うん。わかった」

「それじゃあ最終的なメデイカルチェックするけど、いいか？」

「ええ、お願いするわ」

フェイトが念話でアルフを呼んでいる間に、一真はフォルセティを取り出してメデイカルチェックを開始する。

淡い光がフォルセティを包むようにして輝き、一真は状態の把握の為に目を瞑って意識を集中させていく。

そんな光景が十数秒程続いたが、フォルセティの光が消えたと共に一真は深く息を吐く。

健診の様子を見ていたフェイトと、その間に部屋に来ていたアルフ

はを一真の発する言葉を待った。

「うん、特にこれといった問題は無いな。これなら日常生活程度なら大丈夫だけど、魔法に関してはもう少し様子見たほうがいい。体の調子が戻ってきたら魔法については慣らしていくといい、といったところかな」

「そう……」

「何はともあれ、無事完治といったところだな。リハビリも体の状態と相談してやっていくように」

「ええ、わかったわ」

そこまで言っで一真は安心したという表情で穏やかな微笑みを浮かべた。

そのことを聞いたフェイトもよかったといわんばかりに、アルフは複雑そうな顔をしてはいたがフェイトの表情を見て安心する。勿論、当の本人も微妙にほっとしたかのような表情であり、とりあえずプレシアの体のことについての問題は解消されたのだ。

しかし、安心しているのも僅かな時間で、プレシアが一真の方を見据えて口を開いた。

「それで、何か話があるのでしょうか？ わざわざフェイトとアルフをここにいさせるのだから」

「まあな、それなら単刀直入に聞こうプレシア。アリシアを生き返らせたくはないか？」

その言葉が一真の口から放たれた瞬間、プレシアの顔は驚愕の表情を浮かべた。

フェイトはアリシアという名前を聞いて何か引っかかるものがあるようだが、はっきりとはわからない感じでアルフにいたっては誰それといった表情だった。

「で、できるの……!?!」

「そうだな、限りなくリスクの低い方法でやるつもりだから生き返る可能性は高いと思っっている。」

但し、やるからには俺の出す条件を満たしてもらう必要がある」

「……条件?」

「ああ、その条件は“フェイトに真実を話し、自身の本音を打ち明けること”……これが条件だ」

一真の言葉に揺らいでいたプレシアが更に驚きの表情を浮かべ、そんなプレシアを一真は真っ直ぐに見つめたままにいる。

プレシアにしてもまさに寝耳に水ともいえることで、驚くなというのはそもそも無理な話である。

一度はアリシアへの冒涇と切り捨てられたとはいえ、何もかもを犠牲にしてまで願ったことを目の前の少年が可能だと言っただから。

フェイトは自分のことであるのはわかるようであるが、その真実が何を意味するのかは理解できないようである。表情は疑問と困惑で固まっている。

アルフも目を細めてプレシアの方へと視線を向け、視線の先にいる人物が口を開くのを黙って待っている。

「でも、それは……」

「選ぶのはプレシア、お前自身だ。けどこれだけは言っておく、今向き合わなければお前はずっと後悔するだけだ」

一真の言葉に、プレシアは下を向いて俯いてしまった。

フェイトへの気持ちを素直に口に出せなかった時のように、両手はシートを強く握り締めて悩み始めた。

その様子を一真はじっと目を離すことなく、真剣な表情でプレシアを見つめ続ける。

そうしている時間は一分、十分……いや一時間だったのかもと思うほどの長い時間の末にプレシアは顔を上げて一真を見る。

表情は先程とは違って迷いの無い、何かを決めたかのような表情をしていた。

第十六話 選択の刻（トキ）（後書き）

管理局勢の出現、プレシアの決意の話でした。

プレシアは迷い続けた末に辿り着いた答え、それがようやく次話で形となりそうです。

あとアンケートの結果については活動報告にありますが、1の話（本編のIF）に決まりました。

ネタバレになります、結構なのはが痛い思い（主に心や考え方を
する内容になりそうです。

ちなみに十二話のIFで作者が没にした内容になりますが、IFなので本編に影響はしませんのでご注意を。

それでは、また次話にてお会いしましょう。ではでは〜^^ノシ

第十七話 命の対価、それは（前書き）

職業訓練が終わって久々の更新、いや長かった。

キーボードを打つスピードもそこそこになって、ようやく就職活動に入ってます。

しかし残念な事に、書いている内容に進歩があるのかというと怪しかったりするという…（え

それと今回はかなり説明文みたいのが多くて文字数が今までより少しだけ多いです。

やたら理屈っぽくなってしまったのですが、できるだけわかりやすくしようと思いましたので勘弁してください…orz

それでは前置きが長くなりましたが、第十七話をお楽しみください。

第十七話 命の対価、それは

プレシアが一真たちに対して、事の発端から少しずつ話していた。

ヒュードラという酸素を魔力に変換する魔力炉の実験における暴走事故により、娘のアリシアが犠牲となつて亡くなったこと。

そのことに絶望し、アリシアを蘇生させる為に全てを擲^{なげう}ってきたこと。

その過程において人造魔導師計画……プロジェクトF・A・T・Eに手を出して蘇生を試みたが、生まれたのはアリシアであつてアリシアじゃない存在であつたこと。

それに絶望し、ついに正気を失つて憎悪と失意からプロジェクト名から取つてその子をフェイトと名づけたこと。

それからというもの、あらゆる可能性が眠ると言われるアルハザードに至るためにジュエルシードを集める為に輸送中のユーノに攻撃を仕掛けたこと。

そしてジュエルシードの回収をフェイトに命じ、地球に向かわせたこと。

それらのことを、プレシアは包み隠すことなく全てをフェイトに話した。

「私は……」

「フェイト……」

プレシアから自分のことを聞いて震えるフェイトの表情は、まるで全てを失つたかのような絶望に染まっていた。

傍にいたアルフは悔しそうな声を出しながら、主人であるフェイトを見ることしかできないでいた。事実を話したプレシアも俯いて顔は見えないが、フェイトの言葉を聴くたびに震えている。

そんな知らなかった方がよかったといわんばかりの絶望漂う部屋に、ついに一真は口を開いた。

「フェイト、確かにお前は作り出された存在だ。それは否定できない」

「アンタは！」

「だがな、俺はお前『だけ』しか持ち得ない気持ちや考えを持っているのを知っている。

だからこそ聞かせてほしい、そして今ここでプレシアに伝えてほしい。全てを知って尚も^{なお}プレシアに抱く気持ちを。

お前がアリシアの代わりではなく、フェイト・テストロッサとして生きる為の言葉を」

アルフが怒りの表情を浮かべるが、一真はそれを気にせずフェイトの方を真っ直ぐに見つめながら言う。

声をかけられたフェイトはプレシアと同じように俯き、時が止まったかのように何も言わずに椅子に座ったままにいる。

一真の視線の先にいるフェイトを中心に静寂が広がり、その人物が発するであろう言葉をここにいる誰もが待っていた。

「……………私、は」

そんな短くも長い静寂を、フェイトは弱々しく口を開いて破る。

「……アリシアのクローン、だけど」

しかし、発する言葉の強さは徐々に強くなっていき、俯いていた顔が少しずつ上がっていく。

「私は、フェイト・テストロッサは、あなたに生み出してもらって、育ててもらったあなたの娘です」

見え始めた顔からは先程までの絶望とは違う、特にその赤い眼に宿る意志の強さは今までの比ではない。

まるで闇の中で消えかけていた火が、力強く決して消えない炎となるかのように変わっていくかのように。

「だから、突き放されても私はあなたの娘を絶対にやめません。

たとえ突き放されても、私は何処までもあなたを追いかけ、世界中の誰からもどんな出来事からもあなたを護る」

自身が生み出された存在であることを正面から受け止め、それでも自分だけの道を歩む為の決意。

残酷な事実は決して折れない大きな光の翼へと変貌を遂げ、その力強さは決して誰にも真似できない輝きを放つ。

「たとえば、あなたがどう言おうと……あなたは、私の母さんだから
！！」

「フェ、イト……ごめん、なさい。ごめんなさい」

そして、その直視できないほどの光はプレシアの後悔を優しく照ら

したのだった。

それから一時間ほど経った後、俺たちはアリシアを蘇生する為に庭園で広い場所にいた。

何故時間がかかったのかというと、プレシアとフェイトの二人で今まで抱いていた気持ちを確認しあっていたのだ。俺とアルフは空気を読んで部屋から出たのだが、ドア越しから聞こえる二人の声を聞いてアルフもついに涙を流すということもあつたのは今後の為にも良いことだと思う。

ふとそんなことを考えているなか、プレシアはアリシアの蘇生の為の準備を行っている。

ポッドの中にいたアリシアにはプレシアがきちんと服を着せ、俺は背を向けて目を瞑りながら、フェイトとアルフはプレシアの視線の先にいる存在をじっと見守っている。

「終わったわ」

「なら、あとは俺の方の準備だが……フォルセティ」

『ええ、了解です』

「フェイトも今あるだけのジュエルシードを貸してくれ、流石に俺の魔力だけになると足りないんでな」

フォルセティは俺のやることを理解し、保管していたジュエルシード二つを取り出す。

そしてフェイトも持っていたジュエルシードを取り出し、俺の手元に合計八個のジュエルシードが手元に集まった。

これで魔力の問題はクリア、あとは蘇生前の下調べを行ってと……。

「それで聞かせてほしいのだけど、あなたは何をするつもりなのかしら？」

「そうだな、まず最初に説明しておこう。俺のいる地球の一説によると人間を構成するには身体、精神、魂の三つが必要とされている。身体は言うに及ばず、魂はその人間の生命力を司り、精神はその二つを繋ぐ存在とされていてな。

プレシアが話してくれたことが正しければアリシアの場合、暴走事故における高濃度の魔力と酸欠が身体と魂の繋がり、つまり精神に悪影響を与えてしまったと俺は考えている。

それで俺がやるのはアリシアの精神を元の形に戻し、そして身体から離れてしまっている魂を身体に戻すつもりだ」

フォルセティでアリシアの状態をチェックしながら、俺はプレシアに説明する。

またしてもハガレの説をそのまま持ってきてしまったが、俺はこの説が一番しっくりくる気がするのだ。

健康な人間から強引に魂を引っ張り出すにはかなりのエネルギーが必要であるし、それ以外にも外的・内的にしる何かしらの原因が必要になる。

プレシアの話した事実から考えてみると、ヒュードラの生み出す魔力がそのエネルギーとなり、一緒に酸素を奪われるという外的要因になったという可能性が十分ありえるのだ。

高濃度の魔力は身体にも影響を及ぼしやすいというのは最初のジユエルシードで理解していたし、魂が強引に抜かれる要因も酸欠による窒息死というように原因が揃い踏みときている。

加えて五歳という年齢も心身ともに未熟かつ不安定であるし、そもそも生きるということは先に挙げた三つが絶妙な均衡を保っているからこそ可能なのだ。

この均衡が少しでもズレてしまえば、生きるという行為に支障が出て何らおかしくはないのだから。

「ただアリシアの場合、精神がまだ繋がっているかという問題があるんだが……そこは今フォルセティが調べてる」

「え、ええ……」

繋がっていないければ正直言って絶望的、俺には魂の再構成をするだけの知識も無いし、たとえ一から魂の再構成に成功しても拒絶反応が出る可能性が高まってしまう。

だからこそ俺はリスクの少ない方……アリシア自身の身体と精神、そして魂をここに用意して蘇生を試みようとしている。

自分のものであれば拒絶反応が起きる可能性もほぼゼロだし、医学で自分の血液を保存しておいて必要な時に使うという事例は数多くあるからな。

『マスター、解析結果が出ました』

「どうだった？」

『幸いにも精神の系は切れていませんでしたが、長い間が経過した

せいか全ての繋がりが非常に脆い上に弱くなっている状態です。

身体が亡くなった頃とほぼ同じ状態に保たれていたので繋がっている身体と魂はほぼ無傷でしたが、もう少しでも損傷が酷ければ不可能だったでしょう」

それを聞いて俺、そしてプレシアをはじめとするテスタロッサー一家の人々はほっとしたかのような表情を浮かべた。

戻るべき身体が無ければ精神の糸は容易く切れてしまい、繋がっていた魂はすぐに消滅して完全な死を迎える。

本来ならアリシアの魂も精神を介して身体との繋がりは強いのだが、今回は精神がもうギリギリという原因からか身体に戻るだけの力が無い。

例えるなら、長い間を経て伸縮性を失ったゴムのように精神が伸びきってしまった、今にも切れそうなほどにボロボロになった状態といったところか。

「それじゃあ、これよりアリシアの蘇生を行う。皆は終わるまで離れていてくれ」

俺の言葉に俺を除く人はその場から距離を取り、こちらの様子を見守るようして視線を向ける。

よし、ここからが本番……ジュエルシードを徐々に覚醒させていき、膨大な魔力がその周辺に漂い始める。

魔力量が十分なまでに放出されるのを確認し、その魔力を俺に介してフォルセイへと向くように調節し、固定する。

膨大な魔力が身体に流れ込み、凄まじいまでの重圧と負担が俺の心身に押し掛かるのを感じながら、俺は眼を閉じて蘇生の開始を告げる言葉を口にした。

「さあ行くぞフォルセティ、魔力の供給開始と共に精神の再建！」

『了解、精神の再建を開始します！』

フォルセティの解析結果から得た情報を基もとに、ボロボロになっている精神の再建を始める。

ジュエルシードから流れてくる膨大な魔力、それを精神という名の糸を太く強く補強するイメージを強く持ち、そのイメージと魔力をフォルセティが形作っていく。

変換された魔力はアリシアを覆い、誰にも見えない精神の糸を徐々に本来の形へと戻しながらアリシアの身体から徐々に伝わっていく。

だが、それと同時にとてつもない負担が身体の至る場所へと徐々に侵食していき、今まで身体験したことが無いほどの激痛が俺を襲ってくる。

膨大な魔力による負担で血管が裂け、皮膚が切れ、内臓が破れ、神経が焼き切れ、脳が焼けついていくかのような錯覚が俺の意識を徐々に曇らせていく。

それでも自分の意識を何とか保とうと自分自身を奮い立たせ、自身の全てを蘇生に注ぎ込む。

「……………再建、完了。次、魂、の定着……………に、移行、する」

『……………了解』

ようやく精神の再建が終了したのを確認し、すぐさま遙か遠くへと離れてしまったアリシアの魂を身体に戻す工程へと移行する。

さっさと魂を定着しなかったのは、精神がボロボロである為に魂を

引つ張ってくるにはリスクが高すぎるからだ。
もし引つ張ってくる過程で精神が完全に途切れてしまえば完全に蘇生は失敗、二度と蘇生は叶わなくなってしまう。
絶対に失敗できない以上、常に細心の注意をしながら進めていく必要があった。

だからこそ手間はかかってしまうが、まずは精神の再建を行った後で魂を引つ張ってくることでリスクを低くし、成功する可能性を高めた。

これにも魂が漂っている場所を特定できるというメリットもあり、限りなく失敗のリスクを低くすることができる。
時間がかかってしまう為に身体への負担が増してしまうが、成功率を少しでも上げるのにはこれがベストと判断した。

『魂の特定完了、始めます！』

未だに増していく負担を感じながら、俺は意識をアリシアの精神の先にある魂へと集中させる。
遙か先に置き去りにされている魂を精神という糸を辿り、俺の意識はフォルセティを通してアリシアの精神の果てを目指す。

「（いた……！）」

そして、アリシアの魂を確認したのと同時に、俺は眼を開いてフォルセティを握る力を強める。

「ぐ……あ!？」

しかし、ここにきてジュエルシードの放つ魔力に俺の身体が限界を突破してしまった。

先程まで感じていた錯覚が現実へと変貌を遂げ、フォルセティを持つ右手か皮膚が嫌な音と立てて深く切れ始めてきたのだ。激痛と共に手から落ちていく血が高濃度の魔力によって蒸発し、荒れ狂う魔力が右手の感覚を急速に奪い始めていく。

だけでももう少し、もう少しで蘇生は終わるんだ……だから、それまでは耐え切ってみせる風樹一真！

「アリシア・テストロツサ……今度はちゃんと最期まで生きて、幸せになつて笑つて死んでくれよ？」

これが、俺からお前にできる最大限のお節介で、もう面倒見切れないからな……ハアアアア！！」

全ての力を振り絞つての叫びと共に、フォルセティの放つ光がその場を埋め尽くした。

「くっ……どうなったの？」

母さんの声が聞こえるのと一緒に、光が少しずつ弱くなるのがわかった。

眩い光の先……一真とアリシア姉さんの姿も少しずつ見え始めてきて、光が完全に消える頃には周辺の音も静まっていた。

一真の周辺に浮かんでいたジュエルシードも膨大な魔力を使い果たしたのか、何の反応もしないまま床に落ちていた。

その中心にいた一真も自分のデバイスをアリシア姉さんにかざして

いたまま身動きしていなかったけど、彼の小さな声が聞こえてきた。

「成、功だ……………」

その言葉を耳にした瞬間、私の中によかったという安心が生まれた。

一真がこの場所に来る途中でアリシアは私の姉で、仲良くできるといいなと優しい笑顔で言ってくれた。

突然姉ができるという困惑は少しあるけど、それでも母さんたちと一緒に過ごせるという希望ができて本当に嬉しかった。

そう思いつつ、私たちの幸せを取り戻してくれた一真にお礼を言う為に駆け出そうとした……その時だった。

「え…………？」

一真の手からデバイスが離れ、どさっという音と一緒に前のめりに倒れてしまった。

何が起きたのかわからなかったけれど、それが良くないことだといふのは理解できてしまった。

何故なのかは私にもわからないけど、倒れてからピクリとも動かない一真を見て言葉にできない不安が生まれていた。

『マスター！ 眼を覚ましてくださいマスター！』

一真のデバイスの言葉を聞いてすぐに一真の傍に行って身体を起こすと、身体中が傷だらけだった。

顔や手足だけじゃない、体中に鋭利なもので切り裂かれたかのような傷がいくつもあって、息も殆どしていなかった。

生々しいまでの傷、そこから出る血の存在に意識が遠のきそうにな

ったけど、顔を左右に振って何とか意識を保つ。

どうしようもなく怖い、そんな感情に身体が震えるけど今は一真に精一杯声をかける。

「一真、かずまっ!」

「くっ、どきなさいフェイト!」

母さんが私と一真を引き離し、治癒魔法を使おうと術式を展開し始める。

しかしその時だった、何かが割れるような音が一真の右手から聞こえ始めたのは。

音が徐々に感覚が短くなっていって、右手を見れば無数の割れ目みたいなのが右肩にまで伝わっていた。

そして一番大きな音と共に、右肩から先が粉々に砕け散っていた。

「な……!?!」

「え……………?」

私には何が起こったのか……それがよくわからないまま、その光景を見ていることしかできなかった。

第十七話 命の対価、それは（後書き）

蘇生成功、しかし代償は大きかったの話でした。

これで一真も弱体化は避けられなくなったわけですが、次話にてどう動いていくのかがわかるかなと思います。

あと一話、二話くらいで無印終了と考えていますが、どうなる事やら……。

完璧にハガレ ネタを使ってしまったけど、大丈夫か？

……大丈夫だ、問題無い。そう言われることを願いたい（内心ビクビクしています

それでは、また次話でお会いしましょう。ではでは、^^ノシ

第十八話 和解、そして未来へ（前編）（前書き）

今回は少しだけ早く書けましたので、早めに投稿させていただきました。

実は書きたい内容は決まっていますが、いかんせん文章として形にするのが捗はかどらないという事態でorz
その為、これが今年最後の更新（加筆修正を除く）となりますが、ご容赦くださいm（＿）m

それでは、第十八話をお楽しみください。

第十八話 和解、そして未来へ（前編）

「ぐっ……あれ、俺は一体？」

「あ、一真！」

眼を開けると見慣れない天井、部屋を照らす明かりが視界に入る。何度か瞬きをしながら徐々に意識を覚醒させていくと、横から声をかけられた。

この声はフェイトの声のようだ、そう思いながら声をする方に顔を向ける。

「むっ、どうやら俺は随分と眠っていたようだな」

「うん……」

「ん？ どうしたフェイト？ そんな浮かない顔をして」

『マスター、その……』

ベッドに横たわったままフェイトの顔を見たが、その顔は正直言って嬉しいといった顔ではない。

まるで取り返しのつかないようなことをしてしまったという罪悪感いっぱい顔に、俺は一体どうしたんだろうかと疑問に思った。

聞き慣れたフォルセティの電子音っぽい声もいつもの軽々しさは無く、何を言っているのかと迷っているかのような気まずさを感じる。

けどまあ、とりあえず体を起こしてフェイトの頭を撫でながら理由でも聞いてみるとしよう。

フェイトがそんな顔をしているのを見るのは嫌だし、アリシアの様子だつて見ないといけないからのんびりし過ぎるわけにもいかないからな。

「よいしょ……つて、うお!？」

「あ、一真!」

体を起こそうと手に力を入れて起き上がった瞬間、何故か体が右の方に傾いてベッドに倒れる。

俺確かに両手に力を入れて起き上がろうとしたよな、別におかしいことなんてしていないよなとわけがわからない思考の迷路に入りそうになった。

だがそんなところに入ったところで結論は出ないだろう、そう思つてフェイトに声をかける。

「いてて、一体何がどうなってるんだ？」

「あ、あの、一真……その右手が、その」

「右手？ 右手がどうし……」

フェイトに言われて右手の方に視線をやると、右手らしきものは俺の視界に入らない。

おかしいな、そう思いながらも視線を徐々に肩の方に移していくが、俺の右手らしきものはこの眼には映らなかつた。

長袖の上着はヒラヒラで中身が通っていない袖口が見えるだけで、そこには右腕そのものが無かつたのだ。

「……ありえん」

『ま、マスター！』

ようやく右腕の状態を理解した俺は、現実逃避の言葉と共に意識が再び遠のいていったのだった。

「なるほどな、そういうことだったのか」

「う、うん……」

それからしばらくして俺は目覚め、一同が揃った部屋で事の次第を聞いていった。

皆の話からすると、あれから一週間ほど経過したとのことだった。右腕は蘇生に成功した後、膨大な魔力に耐え切れずに砕け散ってしまったらしく、治癒魔法をかけても元に戻らなかつたらしい。まあこれについては一応覚悟していたし、むしろ足や両腕でなくてよかったと考えると僅かにだが気分が楽になった。ただ俺もシヨックは隠しきれず、それが皆を余計に落ち込ませていくというのには自分のことだけに許せなかつたが。

そして肝心のアリシアについてだが、蘇生から一日ほどして眼を覚ましたらしい。

アリシアの意識も非常にしっかりしており、本人であるということを確認して間違いないとのことだった。

俺のことを聞いてアリシアは気まずそうにありがとう、ごめんなさ

いと泣きそうな顔で言われるのは非常に気まずい上に罪悪感が生まれてくる。

「もう気にするなって、これは俺だって覚悟の上でやったことだ。そんな申し訳ないような顔されても困るし、何より俺はそんな顔を見る為にやったわけじゃないんだぞ？」

「で、でもそれじゃあお兄ちゃんが……」

「あゝデモもストもないっての！ 右腕のことについてはこれでおしまい、異論は認めん！」

「……」

アリシアの躊躇している言葉を、俺は尾を引かないようバツサリと両断する。

それでも俺に対する罪悪感が拭えないのか、テストロッサー家の面々は申し訳なさそうな顔のままだった。

まったく、俺が気にするなって言っているのにそういう顔をしないでくれよ本当に。優しいのはよくわかるけど、ここまで来るとありがた迷惑だ。

「それで聞いておくけど、プレシア……これからどうするつもりだ？」

「そうね……義手の製作と体の調子が一通り終わり次第、自首するつもりよ」

「アリシアとフェイトはお前が必要なのか？」

「私が犯した罪はきちんと償うつもりよ。そうでないと二人の母親として生きていけそうに無いから。」

それで悪いのだけど二人を……いいえ、私の家族をお願いできないかしら?」

自分の罪をきちんと認め、何よりも母親として向き合って生きていきたいということか。

だけどそれはフェイトやアリシアにしてみれば離れ離れになってしまふことになるのを意味する言葉だ。

今生の別れでないにしろ、フェイトやアリシアも沈んだ顔をしているところからしてプレシアからこのことを事前に聞いていたのだろう。

「……どういうことかしら?」

「おいおい、どうして九歳の俺にそんな重大なことを頼むんだよ。それにまだ償いとしてやれることは罰を受けるだけじゃないんだぞ?」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

いたが、一番の被害者はユーノとなのはたちだ。

だから、プレシアたちがまずやることは自首なんかじゃないんだ。

「何、そう難しく考えることじゃないだけだよ」

そうさ、何もそんな難しいことなどをする必要なんて無いんだから。

「ふう、ようやく戻ってこれたな」

話を終えた後、俺はゲートを使ってバニングス邸正門近くの一角に降り立った。

テストロツサー一家の人々には自身のやることをきちんと伝え、地球側で準備をするので一旦こちらに戻ってきたのだ。

時の庭園へ行く前に置手紙は残しておいたが、それでも心配しているんだろうなと思うと心苦しい気分であるが。

『でもどう説明するつもりなんですか？ 特に右腕についてはどう説明しても結果は目に見えていますよ？』

フォルセティにそう言われ、俺は青い顔をしながら視線を明後日の方向へと向ける。

この状態を知ればなのはやすずかも泣くかもしれないし、それは気の強いアリサにしても同じことだ。

その保護者でもある忍さん、バニングス夫妻についてはどんなリアクションをするかわからない。そう考えるとブルブルと全身が震え

てくる。

「なあフォルセティ、俺の事情に関しての説明はノープランなわけなんですけど？」

『一応言っではおきますが、言い訳は思いつきませんよ』

「ちょ、そんな殺生な！ 頼むから一緒に考えてくれよ！」

「へえ、言い訳って何の……！？」

「……………え？」

声のした方に振り向くと、そこには俺にとって一番見慣れた少女がいた。

しかし途中から威圧感のある言葉が途切れ、俺の姿を見るなり言葉を失ってしまっている。

手に持っていた鞆の持ち手は彼女の手から滑り落ち、地面との接触による音はどこまでも小さくその場に響いた。

「あ、アリサ……これは、その」

「か、一真……アンタ、その右手」

俺の右手の部分を見ながらアリサは体をと震わせ、信じられないといった表情でようやく口を開く。

たぶん、一週間もどこをほっつき歩いていたという心配を怒りに変え、きつく問いただすつもりだったのだろう。

まあ、近しい人が少し見ない間にこれだけの状態に成り果てて帰ってきたのだから、驚かない方がおかしいが。

「……………家の方に戻ってから話す。それでいいか？」

「……………」

先程の勢いが嘘のように大人しくなり、俺の提案をアリサはコクンと俯いて返事をする。

俺はフォルセティを戻して近づき、左手でアリサの右手を握ってアリサの後ろにいた鮫島さんに向けて口を開く。

デビットさんたちも忙しいとは思うけど、何も言わないで後からきつく言われるよりも、すぐに怒られる方が遥かにマシだ。

それに、もう俺もこの世界とは無関係じゃないし、自分の行動における責任は自分で取らないといけないからな。

「鮫島さん、アリサの鞆をお願いします。それとデビットさんたちに帰ってきた旨をお伝え願えませんか？」

「……………わかりました、確かにお伝えいたしましょう」

少し後ろから様子を見ていたアリサの執事である鮫島さんも、今までに無く真剣な表情をしながら携帯を取り出した。

デビットさんと楓さんに連絡をするのだろう。俺は内心大きなため息を吐きながらアリサの手を引いてバニングス邸のほうへと歩き出した。

時と場所は変わって夜九時バニングス邸の応接部屋の椅子、そこに一真は座らされていた。

目の前にはバニングス親子が集まっており、夫妻が一真を……特に右腕に視線を向けている。

最初に一真を見たアリサは俯いたまま視線を向けることはできず、それ以外の人々の顔は真剣な表情で一真を見つめている。

バニングス夫妻については鮫島の連絡を受け、仕事に区切りがついたところで急いで帰ってきていた。

仕事も忙しいのに無茶をする、実の息子でもないのになあと思っていた一真も嬉しさを感じる反面、申し訳なさがこみ上げているが。

「それで、話してくれるかな一真君？」

「はい、わかりました」

そうして一真は事の顛末を少しずつ、ゆっくりと話し始めた。

事件の発端から自身の右腕喪失に至るまでの経緯、そして今後やるうとしていくことについての話を進めていく。

夫妻は最後まで真剣な表情を崩さず聞いていたが、アリサは終始俯いたままで表情が見えないまま、ついに一真は話を終えた。

「これで以上になります。何か……！？」

一真がそれ以上言おうとした瞬間、一人の女性が席を立って一真の方に歩いて傍に立ったと思えば鈍い音が響いた。

音の発信源であると思われる場所からは一真が椅子から大きな音を立てながら落ち、頭からは白い煙らしきモノが立ち上っていた。

一真も大きいダメージであったのか、ピクリとも動かないで倒れているところからすると凄まじい一撃であったというのが見受けられ

る。

その一撃を放った女性も真剣な面持ちではあるが、その右手からは一真と同じような白い煙が僅かにだが漂っている。

どうやらバニングスの奥さんである楓が思い切り空手チョップをしたよう、威力は一撃必殺級のそれである。

それを見ていた夫であるデビットと俯いていたアリサも、どう言っているかわからないような顔をしながら妻である楓と倒れている一真を見つめる。

「一真君、私たちがどれだけ心配したのかわかっているのかしら？

書置きだけ残して帰ってきたと思えば右手が無いなんて聞いて…
…怒らずにいられると思っていたの？」

「……………いえ」

「確かに一真君にしかできなかったのかもしれない、でも少しは待っているしかできない人たちのことも考えなさい。

一真君は自分が思っている以上に私たちにとって大切な存在なんだから」

「……………はい、以後気をつけます」

弱々しい返事と共に一真は体を起こし、殴られた部分を擦りながら言った。

その顔は心苦しいというよりも罪悪感で浮かない顔をしており、それを見かねた楓は軽く息を吐いて自身の言葉を口にする。

「それじゃあ今日のところはこれで終わりにしましょう。もう時間も時間だから」

「そうだな、この件についてはまた明日にでも話そう。一真君もそれでもいいかな？」

「あ、はい」

「……………うん」

そう会話をしながら全員が部屋を出るが、アリサだけがやはり元気のない顔をしたまま何も言わずにいた。

歩きながらアリサを横目で見ていた一真はよっぽど心配したんだろう、そしてシヨックを受けたんだらうなという罪悪感に駆^かられていた。

やがて自分たちの部屋に向かう道に着くと、デビットたちは一真たちちに一声かけてその場を後にした。

そうしてその場所に残ったのは一真とアリサの二人だけで、窓からの月光が立ち止まっている二人を照らす。

「それじゃあおやすみアリサ、また明日な」

「あ、待って一真！」

「……………えっと、何だアリサ？」

「あ、えと、私の部屋に來なさい！」

「へ？ っておお！？」

突然アリサに左手を握られ、一真はわけがわからないといった表情

をしながらアリサの部屋へと連行される。

部屋のドアがバタンと開かれ、同じく大きな音を立てて閉じられる。

「……そこに座りなさい」

「ああ、わかったよ」

アリサの命令形の言葉に従ってベッドの横にある椅子に、一真は座る。

一真もアリサには特に罪悪感を抱いている以上、仕方ないといった表情だ。

命令した当人は一真の正面にあるベッドに座って軽く息を吐き、真っ直ぐに一真を見つめながら口を開いた。

「ねえ一真、アンタにとって私ってどういう存在なの？」

「……そう、だな。俺にとってアリサはかけがえのない大切な人、守りたいと思っっている存在だ」

「……本当に？」

「ああ、本当だ。だからこそ悪かったと思ってる。こんな有様で帰ってきて、心配かけてごめん」

一真は搾り出すかのように、自身が思っていることを正直にアリサに伝えた。

それを聞いたアリサはじつと一真を見つめていたが、やがて眼を閉じながら大きなため息を吐いた。

「……まあ、今回だけは許してあげる。それと心配させた罰と

して、今日は私が寝るまで傍にいなさい」

「……………わかったよ、アリサ」

さつきまでの沈んでいたアリサの顔がいつもの勝気な表情に戻り、自身のベッドへと潜り込んでいく。

それを見た一真も一瞬わけのわからない顔をしたが、とりあえず許してもらえたのとアリサがいつもの調子に戻ったようだと感じた。

「ねえ一真、手出して？」

「む？　こづか？」

シートから顔を出したアリサにそう言われて一真は左手を出すと、アリサは両手で優しく包むようにして握った。

「一真、もう勝手にどこかに行かないで……………」

「……………ああ、約束する」

アリサの温かくも一途に祈るかのような声に、一真は優しく返事をしたのだった。

第十八話 和解、そして未来へ（前編）（後書き）

一真、地球へ帰還するのお話でした。

帰還した一真がやろうとしている事、それが次話にてわかります。けどまあ、そんなに難しい事でもなく、当たり前前の事をしようとするだけで大した事ではないのですけどね。

それと、散々無印が続きましたが、あと二話で無印が終了する予定ですので、少しずつ書いていきたいと思えます。

そろそろPV10万記念の方も書いていきたいなあ。

個人的に本編よりも記念の方を書くのが楽しそう……（ん？ ウワ
ナニヲスルヤメ、アッー！

第十九話 和解、そして未来へ（後編）（前書き）

前書きの場をお借りしてご報告させていただきます。

PV172、700、ユニーク28、556、お気に入り登録160件、総合評価419を突破いたしました（平成23年1月24日19:03現在）

正直びっくりしてます。更新が滞り気味で未だに無印が終わってないのにこんなにも評価していただけるとは…（嬉し泣き

相変わらず執筆速度は酷い状況ですが、これからも頑張っていくたいと思いますので、どうぞよろしく願いますm）——（m

第十九話 和解、そして未来へ（後編）

地球に帰還してほぼ一日と少しが経過した夕方頃、三人娘と一匹がそれぞれ客間の椅子に腰掛けている。

どうして彼女たちがここにいるのかというと、アリサが事情を簡単に説明したようで真っ先に来たそうだ。

案の定俺の右手の部分を見て泣きそうな顔をしたが、そんなに気にしないでくれと俺はいつもの調子で流しておいた。

皆に泣かれても腕は戻ってこないし、これは自分で決断した結果であって誰にも文句は言わせるつもりはないのだから。

「さて、先になのはたちの方で何かあったのかを話してくれないか？」

「う、うん。ユーノ君もいいよね？」

「うん、実は……」

なのはとユーノは少し言いにくそうにしていたが、ここ一週間の事情を話してくれた。

暴走樹を封印した後、クロノに連れられてアースラで事件についての情報交換、そして事件解決への相互協力を約束したらしい。

そこで俺についての情報はユーノがうまく隠してくれたらしく、管理局側に伝わってないというのは嬉しい限りだ。

また、二個のジュエルシードを回収できたらしく、なのはの所持しているジュエルシードの数はこれで八個になったそうだ。

ユーノたちには言っていないが、これで俺がフェイトから渡されたジ

ユエルシードを含めて十六個……そろそろ事件も終盤といったところだろう。

「なるほどな、そういうことがあったのか」

「それで一真はどうするの？ やっぱ無理だよな？」

「まあな、流石に右腕無くなってすぐ戦闘っていうのは勘弁してくれ。それに管理局と関わりなんぞ持ちたくないんでな」

右手無くして日常生活に支障が出まくっている俺に戦闘なんて論外だろう。

なんせ左手で箸を持っても殆ど取れないし、字もミミズがのたくつたかのような文字という惨状なのに色んな意味で繊細さを必要とする戦闘は無理がある。

フォルセティを片手で持つのもできなくはないが、流石に体格的にも体力的にも長時間は難しい。

「あ、うん……ごめんね一真君、無理言って」

「だから気にするなって。まあそういうわけだから俺はリタイアだ、悪いけどな」

「………そういえば一真、どうして管理局と関わりたがらないの？」

「あ、そういえばそうね。確か次元世界を守る組織………だったっけ、大規模な警察みたいなものなんでしょ？」

「もしかしたら一真君の右手も何とかならないのかな？」

ユーノたちは俺が管理局と関わりたがらない理由がよくわからないらしい。

確かにユーノの話からして管理局がどういう組織であるのかというのは理解できたようだが、あくまでそれは表面上の、綺麗な部分がよく見えるだけでもっと深い所を知らないだけだ。

その裏で行われている矛盾の存在がまだよくわからないからこそ、それが正しいのだと思えてしまうのだろう。

だが俺は知ってしまった。管理局の裏の側面を原作という形で知ることによって管理局という組織を簡単に信用できなくなってしまった。

組織の自浄作用が働かないことや子供を戦場に送る方針など、組織が目を背け続けている矛盾があるということを彼女たちはまだ知らない。

有名無実……名ばかりで実質が伴っていないという、これほど『今の』時空管理局における実態を的確に表現するのに相応しい言葉は無いだろう。

もっと力や技術を得られれば変わるかもしれないが、そもそも組織が変化するのは膨大な労力と時間が必要であり、それこそ大規模な革命でも起きないかぎりは無理だろう。

それに、俺と管理局とでは守りたいと願う存在が決定的に違いすぎる。

俺が守りたいと願っているのは大切な人たちの住むこの世界ちきせうであつて、次元世界の平和を守ることではない。

永遠の闇についても俺が打ち倒すことで結果的にこの世界だけではなく、この世界以外の全ての世界を救うことになる結果論に過ぎない。

加えて与えられた目的と守りたいと願っているものが同一線上に存在しているだけであつて、俺はそれ以上を望むつもりもない。

何より、たった一人救うことがどれだけ難しいのかわかったからこそ、世界を守るなんて大それた理想を吐くほど自分を高く見たつもりはないしな。

「それはまあ、近いうちにでもわかるさ……嫌ってほどにな。」

あと、俺の右手については知り合いに義手を作ってもらった予定だから問題は無いよ」

「知り合い？」

「まあね。それで話が大きく変わるんだけど、皆は明日って予定空いてないか？」

俺が話題を変えて皆に質問すると、アリサを除くそれぞれ少しだけ考えるような表情をするが、それもほんの一瞬。

「私は特に無いけど……ユーノ君は？」

「僕も特に無いよ？」

「私もこれといった予定は無いかな？」

これは好都合、そう思った俺は誰にもわからないくらいに口元を緩めながら言った。

「そうか。なら明日の午前十時、皆でとある場所に行かないか？」

そう言って、俺はこの場にいる彼女たちに切り出したのだった。

「えっと、ここって一体……?」

今まで見たことが無い光景に、そう呟いたのは誰であっただろうか。一真の作り出したゲートの先、当人たちが最初に目にしたのは自分たちの知りうる場所ではなかった。漂う空気は静寂そのものであり、自分たちが場違いなのではないのかと錯覚してもおかしくない程静かであった。

「一真君、ここは?」

「そつだなあ、一言で言うと“今回の事件の首謀者のお城”といったところかな?」

「は……?」

「まあ言いたいことはあるだろうけど、とりあえずついてきてくれ。戦闘にはならないから」

一真はそう言っ入り口と思われる場所の方へと歩き始め、その後になのはたちが続いて歩く。

大勢が歩く音が通路に響き、その不気味なまでの静けさが嫌でも発信源である彼女たちの耳に入って恐怖を感じさせている。

それに気づいているのかいないのか、先頭を歩く一真の足取りは全くといっていいほどペースを保ちながら歩き続ける。

「ね、ねえ一真君。ここって本当にどこなの?」

「信じるかどうかは別だけど、ここは地球とは違う世界にある“時の庭園”という場所だ。さて、お部屋に着きましたぞっと……」

一真はとある部屋の扉に向かって彼女たちが知らない誰かの名前を口にし、入室の許可を取る為に声をかける。

するとどうぞという声が聞こえ、一真は躊躇無く開いたドアを通じて室内に入る。

後ろにいたなのはたちも恐る恐る部屋の中に入ると、なのはとユーノがピキリといった擬音が聞こえそうなくらい固まっていた。

何故なら今までジュエルシードの回収を邪魔してきた少女と使い魔……フェイト・テストロツサとアルフが席についていたからだ。

「ふえ、フェイトちゃん!？」

「くっ……!」

「あく待ってってユーノ。言っただろう？ 今日には戦闘するために来たんじゃないだから、まずは落ち着いて座ってくれ」

なのはは何故彼女がいるのかで混乱し、ユーノは今までが今までだったので一気に戦闘態勢に入ろうとするが一真に手を前に出されて踏み止まる。

一真の声で多少落ち着いてきたのか、ユーノは軽く一息吐いてから席に座ってフェイトとアルフの方へと視線を向ける。

なのはたち三人娘もユーノの態度や向かい側に座っているテストロツサ一家に戸惑いながらではあるが、それぞれ席につく。

そうして全員が椅子に座ったのを確認した後、一真も席について口を開いた。

「まず簡単に言っておくけど、今日なのはたちに来てもらったのは今回の事件についてなんだが……俺が話し合いの仲立ちをしようと思っただけ。」

あつち側の方で謝罪したいとのことだったんだが、生憎と体の調子がまだ良くないんで今日はなのはたちにここに来てもらったんだ。一同の視線が一真の方に向けられるが、当の本人は僅かにおどけつつも更に話を続ける。

「そんじゃプレシア、まずはそつちからどうぞ」

「え、ええ」

突然話を振られたプレシアは戸惑いながらもそれを了承し、少しずつ話していった。

最初に謝罪と自己紹介、そして今回どうしてこんなことをしたのかを隠すことなくきちんと双方が向き合って話を進めていく。

最初は警戒心むき出しのユーノたちであったが、話が嘘ではないとわかったのか徐々に緊迫した空気も落ち着いていく。

そして、今回の事件における経緯を知るにつれて気の毒になり始めたのか、どういった表情をしているのかわからないといった感じに変わり始めていた。

そうして話が落ち着いてきた頃には、自分たちの方が邪魔をってしまったのではないのかと……そんな空気に部屋全体は包まれていた。

「重ね重ねになるのだけど、本当にごめんなさい。謝って済むとは思っていませんけど……本当にごめんなさい」

「あ、えつと……」

プレシアだけでなく、テスタロッサー一家の全員が心から謝っている姿に何を言っているのかわからずに困惑するユーノやなのはたち。私欲ではあったが、それは家族の為にという純粋な願いから生じたことであり、自分たちであったなら同じことをしたのかもしれないと思えば彼女たちを責められなかった。

逆にプレシアたちにしても、なのはたちが行っていたことは正しいとよく理解しており、特にユーノには攻撃を仕掛けてしまったので頭を下げることでしかできない。

そんな、双方共に困ったかのような空気に黙って話を聞いていた一真がようやく口を開いた。

「これで事の顛末はわかったとは思っけど、ユーノ……お前は どう思ってるんだ？」

「……そう、だね。話を聞くまでは許せないというか、言葉にできないくらい怒ってたよ。」

でもそんな事情があったのを聞いて、こうやって真剣に謝ってくれたんだから許さないわけにはいかないじゃないか」

そう言っただけで一真に視線を向けるユーノ、その目は卑怯だよといわんばかりである。

視線の先にいる一真は非常にばつの悪そうな苦笑いした後、今度はなのはたちの方へと顔を向ける。

「そついうわけなんだけど、なのはたちはどうだ？」

「うーん、私も謝ってもらったからいいと思うんだけど……」

「私もこれでおしまいでもいいと思うよ？」

「私も特に言うこともないわね、本人たちがきちんと反省もしてるし」

三人がそれぞれもう特に気にしていないといった感じでいうのを見て、一真は軽く息を吐いた。

「それじゃあユーノ、悪いんだが情報操作……ってほどじゃないけど、聞かれたら何とか言いくるめてくれないか？」

「わかってるよ。それに僕にだって落ち度は確かにあったし、これくらいはしょうがないさ」

ユーノが当たり前だろうといわんばかりの表情でのセリフに、一真は心底意外そうな顔をする。

それに気づいたユーノがジト目で一真を見るが、一真はその表情を変えること無く呆然とユーノを見つめている……どうやら一真にはかなり予想外な言葉だったらしい。

「何でそんな顔をしてるのさ、一真？」

「いや、もう少しごねるかなと思ってたからさ」

「……それって何、僕がどっかの黒い人のように空気が読めない人だと思ってたの？」

「別にそこまでは言わんが、何というか……いつの間にか空気を読め

るようになったんだろうと思ってな」

「……悪い見本（反面教師）とつい最近出会ったからね、嫌でもわかるようになるぞ」

達観した顔で、どことなく拗ねているかのような声で返答するユーノ。

その様子からユーノにとって何か嫌なことだったのだろう、そう思いながら一真はそうかと言って顔を背ける。

そうして全員の顔を見た後、パンパンと手を叩いて皆に聞こえるように話す。

「それじゃあこれにて事件についての話は終わり。後は各自で自由時間を取るからお話するなりして構わないからな」

「ふえ？　一真君は？」

「俺は少しプレシアと話がある。別にそんな時間はかからないから別室に行ってくれないか？」

「あ、うん。わかったの」

そう言ってなのはたちとテストロッサ姉妹とアルフが出て行き、ドアが閉まると一真は軽く息を吐いてプレシアの方に顔を向ける。

先程までおどけているように見えた顔はそこには無く、まるでスイッチが入ったかのように真剣な表情であった。

「ありがとう一真、わざわざこんなことまでしてくれて」

「まあ今回の俺が好きで機会を設けたけど、これだけは言ってお

くぞ。

お前の罪はあいつらには許されたが、その償いはこれから生涯をかけてやっていくのを決して忘れるな。

取り戻した幸せを噛み締めながら、どんなにみつともなくても歯を食いしばって現実と向き合っていけ。

それがあいつらと、フェイトやアリシアに対しての唯一の償いになるんだから」

「……ええ、もう逃げ出すなんてみつともないことは絶対にしないわ」

一真の厳しさが伝わる言葉に、プレシアは強い決意を宿した目でそう言った。

これからの人生に対する決意の宿ったその表情に一真は安心したのか、真剣な顔を少し緩めて笑みを浮かべる。

「そうか、ならこれ以上は何も言うまい。……ふう、こつやっつてシリアス通すのは流石に疲れるわ」

『かつこよかつたのに台無しですよ、マスター』

「別にいいんだよ、これが一番楽なんだから。やっぱ偉そうに説教するのは性に合わないな、無茶苦茶疲れる」

そう言っつて気の抜けた顔になる一真だが、当人に気にした様子は無い。

一真にしてみればいつまでも疲れるシリアス状態でいるよりも、のほほんとした穏やかな時間の方が好きなので無理も無い。

椅子に座りながら体を伸ばし、脱力感のする声を一真が発している姿にプレシアは不思議そうな顔をしながら口を開いた。

「最初に見た時からそうだったけど、やっぱりあなたって不思議な感じがするわね」

「……不思議と言われてもリアクションに困るんだけどな。」

あ、そういえばお前らここに住むのか？ 地球で住みたいなら俺が話を通してみるけど？」

「そうね……でもいいのかしら？」

「まあ今更っていうのもあるけど、これは俺のお節介だから気にするな。」

さてと、そろそろフェイトたちのところに行かないか？ これからのことについて簡単な予定とかも立てたいしな」

一真は僅かな笑みを浮かべつつ、席を立ててドアへと向かう。

プレシアはその背中を見ながら了承の意思を伝え、自らも席を立てて彼の方へとゆっくりと歩いていったのだった。

第十九話 和解、そして未来へ（後編）（後書き）

和解への大きな第一歩、そしてまだ見ぬ明日という未来への話でした。

悪い事をしたならまず謝る、当たり前だけど中々できないものですよね。

それと、何気に出番の少ないユーノたちが空気を読んでますが、特にユーノがこうも成長してるのは十話で一真と話したことがキツカケ（伏線）になってます。

勿論、和解してもまだ納得していないところは多少なりともありますけど、少なくとも彼の心の強さがほんの少しだけ見られたかなと思ってます。

それでは、また次話でお会いしましょう。ではでは〜^^ノシ

追記（重要）：一部分ですが、大幅な加筆修正をしました。

第二十話 これからのことと、平穩に向けて（前書き）

またしても投稿が遅れてしまって申し訳ありません。

就活に家事、介護、資格勉強など、色々とやっていると執筆にも時間が取れないという有様でorz

執筆速度はまさにドン亀ですが、今後とも宜しく願いますm)

——)m

それでは無印編最終話である二十話です。

第二十話 これからのことと、平穩に向けて

当事者たちとの直接会談から四日後、僕となのはは管理局アースラにいた。

この日は定時報告をする日ということので足を運んでいて、ついさっき報告会議が終了したところだ。

なのはの所持しているジュエルシードは合計八個、残り十三個も海鳴近辺に落ちているという推測を踏まえての会議だったけど、状況は変化なしといったところ。

実際は一真の持っている分を差し引いて残り五個なんだけど、本当に早く見つかってほしいと思う。

「すみません、中々見つからないままで……」

「いいえ、あなたたちの責任ではありませんよ。こちらも頑張って搜索しているからお互い頑張りましょう」

「はい、頑張ります」

本当はフェイトとアルフたちにも手伝ってほしかったけど、彼女たちは今回の事件では容疑者でもあるし、手伝いは最悪の事態でもない限り頼めない。

まあ、それについては僕たちも事情を話してもらった上に直接謝罪してもらったし、僕にも落ち度はあったから今回は目を瞑るつもりだ。

きちんと向きあって謝罪するっていうことは簡単なようで難しく、何より勇気のいるっていうことは僕にもわかるから。

それでも、僕はまだ彼女たちのやったことに対して全部許せたとは

いえない。もしかしたらこのまま一生許せないままなのかもしれない。
でも、彼女たちはその罪を認めて償っていきたくて言った。そんな、
自分たちの罪ときちんと向き合おうとしている彼女たちを僕は信じ
ていきたい。

誰よりも大変な目にあつたはずの一真だって、自分の右腕を失つて
も彼女たちが幸せを得た上で償っていくのを望んだのだから。

「僕たちも全力でやるから、君たちも頑張つてほしい」

「はい、頑張ります！」

黒いバリアジャケットを着ている子、クロノ・ハラオウンの言葉に
なのはに僕は続いて返事をする。

個人的にだけど、僕はこのクロノが嫌いだ。なのはの笑顔を見て顔
を赤らめていたのもそうだけど、どこか空気が読めていないような
気がしてついついイラツとする。

だから僕は少しでもいいから空気を読もうと思ひ、最近ではよく書
店でそういう類の本を立ち読みしていたりするのはここだけの話。

そんな、クロノにしてみれば八つ当たりともいえる感情を抱いてい
ると、急にブリッジで警報のようなものが鳴り響いた。

「艦長！ ジュエルシードの反応が海上から感知されました！ 数
は五個！」

「わかったわ。クロノ、なのはさんたちと直ちに封印・回収に向か
ってください」

「了解です」

「あ、はい！」

そうして僕たちはジュエルシードが発動した地点、海鳴付近の海上付近へと向かうのだった。

「えっと、ここはこうでいいのかな？」

「おしいけど不正解。読み方は間違っていないけど送り仮名は違う。話は名詞、話しは動詞で書き分けをするんだ。」

「そうだな……例えば話をしたと話したとは話の意味合いが微妙に違うだろ？ あとこれは大人になっても結構間違いやすいから覚えておいたほうがいい」

フェイトが国語のドリルを解いているところに、俺は解答について添削と解説を加える。

何故こうしてフェイトが俺の部屋で勉強してるのかというと、近いうちに聖祥大付属小学校の入学試験を受験するので手の空いている俺が勉強を見るのが丁度良かったからだ。

これは今後について皆と色々話し合った結果で、今はテストロッサ一家の地球への移住準備で皆が動いている。

なのはとユーノはフェイトが回収に参加できない分、残りのジュエ

ルシードの回収を継続。

アリサとすずかはフェイトたちの戸籍や就職先について色々と手を回してもらおうよう、それぞれの家族に対してお願いに回っている。それで今日はフェイトたちの戸籍の用意が終わったため、一家総出でバニングス夫妻への謝罪を兼ねて戸籍の写しを受け取りに来ていたのだ。

あと、ここにいないアリシアとアルフは外におり、バニングス家で飼っている犬と一緒に時間潰しをしている。

アリシアも多くの犬たちに気に入られて身動きできないくらいに群がられていたが、今では仲良く遊んでいる。

本人曰く、リハビリにもなるから丁度いいとか言ってたけど、万が一の時にはアルフが傍にいるから大丈夫だろう。

ほんと、俺って皆に対して一生懸けても返せないほどの借りができちまったな。返せるかどうか自信が無いんだけど。

「国語って難しいね……」

「まあ、ここまで混沌としてる言語はあまりないから仕方ないけどな」

日本語は平仮名にカタカナだけでなく、漢字や英語などの様々な要素が混ざり合って複雑になっており、日本人でも間違っことは多々ある。

これが一言語だけとかになるとそこまで難しくもないのかもしれないが、何事もそう簡単にいかないのが世の常といったところだろう。

そうして次の問題の添削と解説をするかと思っただ瞬間、膨大な魔力の発動を感じた。

魔力の大きさからして残りのジュエルシードが一斉に発動したらしく、フェイトもそれに気づいた様子だ。よく見ると手にはアクセサリー状態のバルディッシュがあり、いつでも行けるようにと準備されている。

「一真、私は行かなくていいのかな？」

「少し待ってくれ、様子を見てみるから。フォルセティ」

『了解です』

フォルセティをソードライフルモードにし、ゲートを応用して現場近くの様子をフェイトにも見えるように固定する。

するとその先にはなのはたちが既に駆けつけており、封印の為にジュエルシードの沈静化させようとしているところだった。

暴走した魔力で生じた竜巻をユーノが拘束し、なのはやクロノ、そして名前も知らない武装隊の人々が一斉に攻撃を仕掛けてジュエルシードの魔力を削っていく。

その中でも特になのはの砲撃魔法が強力で、ジュエルシードの魔力をガンガン削ってる上に壊れるんじゃないかと思えるような一撃を容赦なく躊躇いなく撃ち込んでいる。

その光景、どこぞの大魔王の軍団が反逆した民衆を慈悲なく粛清しているイメージが一番相応しいと思う。

「……なあ、フェイト。もしもさ、今のなのはと戦うとしたら勝てる自信はあるか？」

「ちょっとわからないけど、できればもう戦いたくはないかな？」

『ですが、私たちは負けるつもりはありません。それに、マスターならば勝てる。私は信じています』

「……………うん、ありがとうバルディッシュ」

ほんの少しだけ顔がひきつっているフェイトの言葉に、彼女の相棒であるバルディッシュは勝利の意思を示して励ましている……………やっぱりいいコンビだ。

しかし、ゲートを通じて俺達の目で見えるなのは砲撃魔法、はっきり言って主人公補正を差し引いても桁が違う。

俺も対処法はそれなりに考えてはあるが、それも万全とはいえない。成功する保証は結局どこにもない。

もし通じなかったらと思うと……………ヤバイ、あの砲撃や誘導弾の雨の中で戦う光景を想像すると冷や汗が出てきた。

『（マスターのヘタレエ……………）』

ダマレウルサイフォルセティ、俺だって怖いものは怖いんだ。どこぞの慢心王のように単純じゃないんだよ。

「一真、なのはたち回収が終わったよ？」

「あ、ああ。そうみたいだな」

無事に五個のジュエルシードの回収を終え、なのはたちがアースラへと転送されていったのを確認して俺はゲートを閉じた。

これでジュエルシードにおける問題はほぼクリアしたも同然、事件も解決したと考えるもいいだろう。

残り俺が持つてるし、時期を見計らって少しずつ渡すだけだしな。だが、俺たちはそう遠くない先に今回よりも大きい事件に直面するのは確実だ。その為にも俺はやれるだけのことをやって、文句無しのハッピーエンドを手繰り寄せてやる。

それが、この世界で生きていくと決めた俺自身の我侭^{エゴ}であり、これから生きていく為の目的なんだから。

「うーん、とりあえずここまでにしとくか」

八神という名札のついた一軒家、その一室にいた少女はそう言うって机に本を置いた。

彼女の名は八神はやて、幼くして両親に先立たれた上に足に障害を抱えて車椅子生活という不幸な生い立ちだが、それを感じさせない気丈さがあつた。

生活に必要なお金もある知人に頼り、ヘルパーの方も手伝ってはくれるが基本的にこの家で一人暮らしである。

そんな彼女も時には寂しいと思うらしく……

「はあ、ええなあ……」

ふと何かを思い出したかのようにして、はやてはひとりごちた。

それは、家に帰る時に見かけた親子が会話しながら歩いていた光景であり、はやくには何よりも羨ましかったからだ。

一般的な家庭であれば両親がいて我侷を言える歳でもあるのだが、彼女はそんなことを言える人物はいない上に人一倍優しく責任感の強すぎる性格であった。

その性格故に自分の気持ちを自分以外に吐き出すこともできず、積もり溜まった気持ちはこうして一人でいる時に小さく言葉にするしかなかった。

どうして自分だけがこんな目に遭うのかと、それは彼女自身既に何度も考えたことだ。

普通の人にとって当たり前な日々、それがはやくには何よりも羨ましくて妬ましくて、何よりも輝いていた。

だが、それを口にしたところで自分の両親はもう帰ってこないし、すぐに足が治って歩けるわけでもないことを、彼女自身が誰よりも知っていた。

「まあそんなこと言っても、何も変わらんのやけどな。さつてと、今何時やる……？」

だからこそ彼女は自分の好きな本を読むこと、つまりは読書で気を紛らわせてきた。

元々彼女は本を読むのは好きだったので、それが楽しみになるのは仕方のないことであつたのだろう。

だが、それでも憂鬱な気持ちから一転してすぐに立ち直る様子は、彼女の強^{した}かさ故なのだろう。

「ちょっと早いけど夕食作るか……ん？ またこの感覚か？」

その時、はやては何かを感じてその方向に顔を向ける。とても大きい何か波のようにして伝わってくるかのような感覚。それが何なのかはわからないが、はやては少し前から感じていた。ここ最近、海鳴の各地から感じるようになった当初はあまり気にしてなかったが、短期間で何度も感じるのとは何かが起こっているのではないかとはやては思い始めていた。

しかし、そんなことを言っても信じる人間はおらず、彼女の主治医である石田先生もそのようなものは特に感じないと言われたのではやても少し疑問に思う程度で問題とは思っていなかった。

ただ、それは仕方のないことかもしれない。はやての主治医である石田先生は地球でもごく普通の医師であり、はやても自身に眠る力がまだ目覚めてもいない上に自覚できる環境にいなかったのだから

「ま、ええか。さくで、今日も頑張つて作るか！」

軽く顔を左右に振ってそう言った後、はやてはドアを開けて部屋の外へと出ていった。

それから時間を置かず部屋でドアが閉められると、同時に本棚からカタツと小さな音が部屋に消えるようにして響いた。

あまりにも小さいがためにはやてにも聞こえなかったが、確実に何か動いたかのような音。

音源の本棚には多くの本がしまわれているが、そのなかでも異質な一冊が置かれている。

金色の十字架の飾りがなされ、それが太い鎖によって拘束されている様相は異質そのもの。

そして本から放たれる不気味にして異質な気配、それは約束の時を訪れる時まで待ち続けているかのようにして静かに脈動していた。

……イ……ゴ……サイ

かすれて聞き取れないほどの小さな呟きが、その本……今は闇の書と呼ばれるモノから発せられる。

そして、その本に存在する闇よりも深い闇が今も尚、八神はやてを蝕んでいることを、この時当人は何も知らずにいた。

そこは地球とは限り無く遠い世界、今より遙か昔に存在していた世界。

かつてその地は栄華を極め、多大なる繁栄を築きあげてきた世界であったが、今は何も残っていない。

生物や建物は勿論、それが存在していた痕跡さえも全て消え去った何も無い世界で、小さな声が響いた。

「欠片が倒されたか、早くも代行者を送るとは　　も手が早い。
そうなれば先に代行者を消すべきか」

声のする方を見る者がいれば、そこには空があったと言っだろう。
だが、その先にあるのは絶望を体現したかのような空、そして巨大な一つの異形が存在していた。

その姿は天使というにはあまりにも無慈悲で、悪魔よりも禍々しくあるその姿は邪神に限り無く近い。

異形から漂うのは冷たく底無しともいえる絶望や死など、ありとあらゆる負の想念を一つの形にしたソレは生きとし生けるものの理解の範疇を越えるモノであった。

……その異形の名は、永遠の闇。こことは違う別世界で全てを無に帰すという存在意義（人の願い）を証明す（叶え）るために生まれ
た存在だった。

「だが私は答えを遂行する、それが私の存在意義なのだから」

異形……永遠の闇は感情の込められていない声を発した後、最初から存在していなかったかのようにその場から消えていった。

第二十話 これからのことと、平穩に向けて（後書き）

無印編最終話にしてA・S編プロローグ（というほどじゃないけど）の話でした。

散々引つ張りまくってとうとう無印までで二十話という有様……洒落にならないね、はい。

これで次はA・S編となるわけですが、正直言ってしまうと作者もどうなるのが予想できなかったりします（え

そして次の更新ですが、PV10万記念の小説を投稿する予定です。まだ三分の一程度しか出来上がってないので、まだまだ時間がかかりますが頑張って早めに書き上げたいと思っています。

内容は一真が悪役（？）となり、なのはと戦闘を行います……ぶっちゃけアンチと思われる方も仕方ないかもしれないレベルになるかもしれないです。なのでご注意ください。

勿論、そこまで酷くはしないうもりではいますが……何分作者がヘタレなので。

少し長々としてしまいましたが、ではまた次話にてお会いしましょう。ではでは〜^^ノシ

PV10万記念・第十二話 if 決意を覚悟へと変える時（前書き）

今回は番外編です。本編との関連性（及び整合性）はほぼありません。

本編（第十二話）でボツにした内容です。その内容を形にしてみました。

バトルメインですが、かなり理屈っぽくなっており、オリ主の一人称は今回無い上になのはの一人称が混じります。

多少なのはに対して厳しいこととかをしたり、言ったりします。アンチではありませんがお気をつけください。

……以上のことを了承できた人はお読みください。

では大変遅くなりましたが番外編にしてif話、そしてPV10万記念の小説をお楽しみください。

そこは海鳴市にある一つの運動場、いつもなら人がいるはずだが何人かを除いて人がない。

普段なら様々な色が織り成す景色も見えるはずなのだが、周辺は火山灰で染められたかのように灰色一色に染まっている。

そんななか、一組の少年と少女が灰色の空で自身の武器を持って激しい戦いを繰り広げていた。

桃色の球体を駆使しながら戦う少女に、それを最低限の防御をしなから猛然と突撃する少年。

互いの動きが普通では説明できない光景に、何も知らない人が見れば間違い無く非常識な戦いと思うだろう。

だが次の瞬間、距離を詰めてきた少年が振り下ろす一撃を、少女は防ぎきれず思い切り川の方へと叩きつけられる。

少女の悲鳴は地面に接触する際の衝撃音でかき消され、少年は間を置かず少女から少し距離を取って降り立つ。

「うっ……一真、君」

「立て、高町なのは。それとも、お前の覚悟とはその程度のものでしかないのか？」

少女はグルグルと思考を迷走させ、自分を見下ろす少年に弱々しい視線を送りつつもヨロヨロと立ち上がる。

だが少年はどこまでも冷たい目で少女を射殺すかのように向け、手にしている武器を少女の方へ向ける表情は冷たい。

ただの冷徹とは違うその様子は、目の前の敵を叩き潰す為に敵意を

剥き出しにして少女に絶望を突きつける行為そのものであった。

そんな少年から漂う空気に少女は僅かに震え、その目には怯えが生まれ始めていく。

少し離れた場所から様子を見ているフェレット一匹は、己の身を二人の間に行かないようにとギリギリと奥歯を噛み締める音が聞こえてきそうなほど自らの意思で押さえつけている。

この光景、そして何故風樹一真と高町なのはの二人が戦っているのかというと、少し時間を遡る。

陽が傾き周辺が暗くなり、人氣が無くなり始める時間帯。

そんななか、風樹一真は目を瞑りながら常時開放されている運動場のベンチに腰をかけて腕を組んでいる。

運動場も暗くなり始めて人氣が少なくなった場所は、川の水が流れる音の方が大きく聞こえるだけで静かなものであった。

そこから少し離れたところから徐々に一真の方へと近づく足音が響き、一真の近くまで来て止まった。

音の発信源であったのは一人の少女……高町なのはがフェレットに変身しているユーノを肩に乗せ、少し息を切らしながら立っていた。

「え、えっと一真君、どうしたの？」

「少し言っておきたいことがあってな、それで呼んだんだが……単

刀直入に言おう。

高町なのは、今のお前に魔法を使う資格はない。レイジングハートをユーノに預けて普通の日常に戻れ」

「え……？」

「な……！？」

そう迷いも躊躇いも一切無く、ベンチから立ち上がりつつも一真は言い切った。

言われたなのはとユーノも、突然の魔法使い失格の言葉に理解が追いつかず、困惑し始める。

「はつきり言っつて、今のお前が回収に向かっても自殺行為になるだけだ。

後は俺がやってやるから、レイジングハートをユーノに返して今後一切何もするな。死にたがりで邪魔な奴を世話する義理も義務も俺にはないんでな」

「そ、そんなことない！ 私は邪魔になんてならないよ！」

「ふん、どうだかな。フェイトに負けてからのお前の様子を、皆が気づかないとも思っているのか？」

そうして多くの人を心配させ、自分だけで抱え込んで無理をするような奴に危険な場所に行かせるなんて自殺行為でしかない。

だからこそ俺はお前の友人としても、同じ魔法使いとしても腹が立って仕方ないんだよ！」

「そ、それは……」

一真の言葉になのははムキになって反論したが、彼の追撃にすぐに言い淀んでしまう。

なのは自身も最近の自分の様子がおかしいというのは自覚しており、それをストレートに突かれれば何も言うことはできなかった。

その原因についての心当たりのある一真には余計に反論しづらいよ
うで、なのはは認めたくなくても自身の態度が一真の言葉を肯定し
てしまっていた。

実際一真だけでなく、なのは以外の高町家の人々やアリサやすすずか
も気づいており、後の二人には一真が話をつけると言って何とか宥
めていた。

その時の一真は大きく溜息を吐き、どうするかと散々悩んだ結果と
してなのはとユーノをここに呼んだのだ。

その内容としても、事実上の魔法使い失格の言い渡しだったわけだ
が、言われたなのはにしても当然受け入れられるものではない。

なのはと一緒にいることの多いユーノも、今のなのはが色々と不安
定なことを知っているため、二人の様子を見ていることしかできな
かった。

「それに今の中途半端な状態ではジュエルシードの回収は勿論、フ
イトに勝つことなんて到底無理だろう。」

そうして中途半端な覚悟しか持たず、魔法に振り回されて周囲に
迷惑をかけ続けるお前に、これ以上魔法を使わせるのは危険なん
だ。悪いがお前はここでリタイアだ」

「そ、それでも私は……魔法を諦めたくない！ だから！」

事実を突きつけられた彼女の、魔法について諦めたくないという言

葉は一つの悲鳴として響く。

やっと手に入れた生きがいを手放したくないという、切実にして儚い幻想を頑なに守ろうとする様子を見ていた一真は軽く一息吐いてなのはを見据える。

彼女に向けるその表情は無表情といえるほどで、酷く感情が込められていなかった。

「……そうか。ならば高町なのは、お前の覚悟を俺に示してみろ」

そう言い終えた瞬間、一真は自身の相棒であるフォルセティを握り、バリアジャケット姿へと姿を変える。

一真はなのはたちが初めて見た時と同じ戦士をイメージした姿になり、右手にはソードライフルと化したフォルセティが握られていた。

「か、一真君!？」

「ここで俺に負けるようなら戦力外に等しい。そんなお前をジュエルシード回収に向かわせることは許可できないし、これは当然の措置だ。

さあ、セストップアップしろ高町なのは。お前のその歪んだ幻想、俺がごとごとく否定してやる」

「か、一真! 何もそこまで言わなくてもいいじゃないか!」

「(ユーノ、お前は封時結界をこの一帯に張り、一切手を出さずに見守っている。それがなのはの為だ)」

「一真!？」

一真はフォルセティを中段に構え、それと同時にゆっくりと魔力を

開放していく。

それと同時に眼前の敵であるなのはを見据え、今にも斬りかかりそうなほどの空気を漂わせていた。

そんな一真の先にいるなのは少しだけ俯きつつも、小さく口を開いた。

「私が勝つたら、邪魔じゃないって認めてくれる？」

「それはお前次第だ、高町なのは」

「……………レイジングハート、セットアップ！」

「なのは!？」

「ユーノ君は手を出さないで。これは私が勝たないといけないの！」

なのはは戦う気持ちを全面に出し、自身のデバイスであるレイジングハートを手にした。

横から同じく話を聞いていたユーノはなのはの言葉に驚いているが、一真から発せられる重く強い空気は更に強くなっていく。

その二人の様子に止めるのは無理と悟ったユーノ真剣な様子をしながら一真へと視線を向ける。

「(一真、信じていいんだよね?)」

「(言ったはずだ、なのは次第だと)」

「(……………わかったよ)」

それ以上は何も言わず、ユーノは二人から離れて封時結界を展開する。

ユーノの先にいる二人の様子は互いの相棒を構え、周辺の空気は緊張感に包まれていく。

「行くぞ……！」

そう言つて、一真は敵であるのはの方へと駆けていく。

二人の……正確には、高町なのはの試練ともいえる戦いが、今こうして始まった。

それから十分ほど経過して冒頭に戻るが、状況としては一真がなのはを圧倒していた。

なのはが得意とするのは中・遠距離からの強力な砲撃やスフィア等の誘導弾での攻撃であるが、それを有効打にするにはクリアしなければならぬ条件がある。

砲撃にしても威力を求めるならばチャージする時間が必要であり、スフィアも精密なコントロールが要求されるが、当然一真はそれを待つわけがなかった。

なのはに距離を取られる前に彼女の苦手な近接戦に持ち込み、スフィアでの攻撃なら同じ系統のスフィアで相殺し、とにかくなのはに有利な状況を作らせなかった。

得意な遠距離戦ならともかく、なのはは運動神経が良くない上に近接戦闘などまともにやったこともないのだから無理からぬことだろ

う。

「やはり微温ぬるいな、所詮はこの程度か」

「う……そんな、こと」

「そうか。では一つ聞いておきたい、どうしてお前はいい子でいきやならないんだ？」

「え……？」

一真が放った言葉に、なのはの周りだけ時間が止まったかのように動かなくなった。

「自分のこと以上に他人のことを思って行動すること、それ自体は文句のつけようもないほど素晴らしいことだ。そんな考えを持てる人間はあまりいないからな。」

だが、お前には自分というものが見えていない……いや、そもそも何故今のお前に魔法を使う資格が無いと言ったのかわかるか？」

「……………」

「それは人を救う為に必要なのは力だけでなく、それ以上に人を救いたいという心が無いからだ。」

魔法自体は誰も傷つけないし、誰も救わない「ただの力」ではない。元より結果を出す為の手段の一つでしかないからな。だからこそ、それを作り扱う人間の心持ちでどんな形にもなるだけであって、決して善悪を語れるものではない。

だが、今のお前は魔法という力に心が負け、それに振り回されて自滅している。そんな中途半端な有様で人を救うことなどできはし

ない！」

そこまで言うと、一真は再びなのは方へと駆けて間合いを詰めた。異様な形をしたソードライフルが思い切り振りかぶり、なのはを容赦なく薙ぎ払う為に襲いかかる。

『Protection!』

「きゃああ!？」

咄嗟にレイジングハートが張った緊急防御としてのシールドと魔力刃が衝突し、衝撃音が周囲に響く。

大きな悲鳴を上げながらも何とか飛行魔法を使って体勢を立て直すのはだが、一真の渾身の力が込められた一撃は重い。

それはレイジングハートが咄嗟にプロテクションを展開していなかったら間違いなくこの勝負が終わっていたであろう、それほどの威力であった。

「そして、誰にでもいい子として見られたいという、綺麗事にもならない見栄で人の心を動かすことなどできるわけがない。

時には自分が理由もなく拒絶され、傷つくことだって当然ある。

だが、それでも人を救いたいという気持ちが本物なら、どんな形であれ、その気持ちはきつと届くだろう。

だが、お前はそこまでの決意をして人を救いたいという気持ちが無い。だから一度負けた程度で気持ちが揺らぐ。そんな中途半端さで、フェイトと解り合いたいという言葉が彼女の心に届くわけもない……違うか、高町なのは？」

「そ、れは……」

「だからこそ、今のままではフェイト以前に俺にすら勝てない。お前が何故魔法を振るうのかという答えを見いだせないお前にはな！」
地上から一筋の光が放たれるが、ギリギリのところでは避けるのはその顔はまさに困惑しているといったいい表情で、何とか体は反応しているが精神はそれに追いついていない。
動きも最初の時と比べて酷く鈍く、彼女の全力全開という意味がまるで感じられないほどキレが失われていた。

そんな大きすぎる隙を逃すことなく、一真はなのはに向かっていく。すぐになのはとの距離を詰め、先程と同じく魔力刃を展開したフォルセティで斬りかかってなのはを追い詰める。
一真の小さな体から放たれる攻撃の一つ一つ、それはシールド越しからも伝わる重い衝撃と音が響く。

そうして数回攻撃したところでなのはが息を切らして弱々しい目で見ているのを見て、一真は口を開いた。

「俺は大切な人たちを守り、救う為なら役に立たないプライドも、取ってつけた他人の評価なんてどうでもいい。」

それこそ大切な人たちに理解されなくても、拒絶されたとしても俺は最後まで絶対に諦めない……これは俺の我侭であり、覚悟でもある。

フェイトだって俺と同等以上の覚悟を持ってジュエルシードの回収を行っているのと、少なくとも俺はそう感じた」

「……………」

「高町なのは、お前は俺の覚悟を……フェイトの覚悟を超えられるか？」

そう言っつて、一真は七つのスフィアを展開してなのはへと向けて放った。

一真君の言っている、私にとって覚悟って何なんだろう？

フェイトちゃんの眼は冷たい感じがしたけど、それ以上に悲しそうで寂しそうだった。

傷つけないけどごめんなさいって言っているように思えて、あの時からずっとお話したいと思ってた。

どうしてそんな眼をしているのって、どうして辛そうな眼をしているのって聞いてあげたかった。

でも、その気持ちはフェイトちゃんには届かなくて、私の魔法も通じなかった。

フェイトちゃんに勝てなくて悔しいという気持ちもあるけど、それ以上にフェイトちゃんの為に何もできない自分が悔しかった。

このまま私は何もできないで、フェイトちゃんとお話できないまま会えなくなるんじゃないかって思うと胸が苦しくなる。

私は、フェイトちゃんの為に何もできなかった。なら、もう私のやることって意味は無いのかな……？

いっそのこと、一真君に全部やってもらってもいいんじゃないか……そう、思い始めた時だった。

『（）しっかりしてくださいマスター！（）』

「（レイジング、ハート？）」

諦めようとしたその時、頭に響いてくる声……念話が私に伝わってきた。

『（一度駄目だったくらいで諦めないでください！ マスターはあの子を助けたいと思ったのでしょう！？）』

「（で、でも私にはもうそんなことできないよ！？ 私の力じゃもう……）」

『Protection!』

私に向けられた白い魔法はレイジングハートが張ってくれたプロテクションで防いだけど、二つほど防御できずに当たってしまった。魔法が当たった場所がズキズキと痛いけど、それよりも私はレイジングハートの言っていることで戸惑っていた。

『（ならば何度でもぶつかっていくだけです！ それともマスターの願ったことは、その程度の気持ちだったのですか!?!）』

レイジングハートの言葉に、私の感じていた迷いが晴れていくような気がした。

そうだよね、フェイトちゃんとお話をしたいっていう気持ちは嘘でも間違いでもなかった。

確かに私は一度負けたし、フェイトちゃんに気持ちが伝わらなかったけど、それで諦めてちゃいけないよね。

一度駄目だったら、何度でもぶつかっていけばいい。まだ私はフェイトちゃんと向き合うことができるんだから。

諦めるなんてまだ早い、私の気持ちはまだフェイトちゃんに何も伝えてすらいないんだから。

「トドメだ……！」

一真君がフォルセティを私に対して振り下ろそうとするその瞬間、私はシールドで受け止める。

シールドで防いでいても重くて、フェイトちゃんと同じような何か私に伝わってくるような気がする。

それが何なのかはわからないけど、これが私にとって足りないものなのかもしれない。

高町なのは、お前は俺の覚悟を……フェイトの覚悟を超えられるか？

とても重くて強い、誰にも譲れないっていう気持ち……これが、覚悟っていうことなのかな？

「はああ！」

「むっ!？」

シールドに思い切り魔力を込めて一真君を押し返すと、一真君の表情がビククリしたような顔をしていた。

私も息をするのがやっとで、一真君の驚いてる顔を見れたのはちょっと面白ったりするけど、今はそれどころじゃないの。

「まさか押し返すとはな。だが、それだけでは俺には勝てんぞ？」

「ディバインシューター！」

一真君にシューターは通じない、というよりさっきから同じ魔法で防がれて攻撃されての繰り返しだった。

それも決まって私に近寄って攻撃、私がこういつのが苦手なのを一真君は知っているからこそやってるんだと思う。

だって、今こうして私の方に向かってフォルセティを振り下ろそうとしているんだから。

「ディバイン……」

「くっ、何!？」

一真君の顔が驚いているみたいだけど、少し考えたら簡単なことだったんだと思う。

近づいてくるならその短い時間で魔力を集中させればよくて、避けられないようにして撃てばいいだけなんだから！

「バスターアアアア！」

「ぐっ、おおおおお!？」

一真君の攻撃が届くのよりも先に、私はディバインバスターを撃つたのです。

「はあ、はあ……！」

デイベインバスターに当たった一真君は、何故かフォルセイを手にしたまま動かなかった。

一真君のバリアジャケットは所々ボロボロになってて、白い煙みたいなものが体から出てるけど……大丈夫、なのかな？

あんまり魔力が込められなかったから威力はイマイチだったはずなんだけど、本当に大丈夫なのかな？

『大丈夫です、問題ないでしょう。ですから今のうちのもう一発撃つておきましょう』

「え！？ ちょっとレイジングハート!？」

レイジングハートが何だか怖いことを言ってるけど、それは可哀想すぎて駄目だよ！

た、確かに今のうちに一発撃つてもいいような気がするし、むしろもっと魔力を集めてから撃つてもいいような気がするけど後が怖そうだから嫌だよ！

そんなことを考えていると、一真君が軽く一息吐いて私の方を見つめてきました。

さっきから感じてたピリピリするのが無くて、何だか少しだけ笑っているような気がする。

「いい目になったな、なのは。合格だ」

「え？ どのどついつと？」

「お前は自分に魔法の才能があると知り、多くの人の為になんかできると思い込んでいただろうが、それは正しくもあり間違いでもある。」

確かに魔法があれば多くの人の為になんかできるのは本当のこと
で、より多くのことをなすことができるのは事実だからな」

「真君の言った通り、私はフェイトちゃんに負けた時からずっと迷
ってた。」

私の気持ちはどうしても通じなくて、私の魔法がフェイトちゃんに
届かなかったから。」

私は魔法が使えるから何かできるんじゃないかって、誰かの為にな
れるって思い込んでたから。」

「でも、何で正しくて間違いなの？」

「さっき言ったが、魔法は結果をもたらすための一つの手段であっ
て、それ以上でも以下でもないからな。」

それに、どんなに力があつたとしても、目の前にいる一人さえ救
うのが難しいというのはお前もわかるだろう？」

それは、私にとってフェイトちゃんのことなんだと思う。

あんなに辛そうにしているのに、私にはフェイトちゃんのように魔法
があるのに何もできなかった。」

すぐ近くにいたはずなのに、本当はあんなに遠く感じたのも本当に
初めてだった。」

「だからこそお前は自分自身を見つめ直し、何の為に魔法を振るう
のかを決めることが必要だった。」

他人から与えられた理由でもなく、自分が拒絶されたくないとい
う恐怖や見栄でもない……お前自身が望む、たった一つの揺るがな

い気持ちを見つけることをな」

私が魔法を振るう理由、それはジュエルシードを見つけて私たちが住む海鳴市ところを守ること……でも、それだけじゃなかった。

それ以上に私はフェイトちゃんにあんな辛そうな顔をしていてほしくない、そしてお友達になりたい。

ああ、そっか。これが……私にとっての覚悟なんだ。

「その何事にも揺るぐことのない強い気持ち、それがお前の……高町なのはだけの覚悟だ。それさえ忘れなければどんな理不尽にも立ち向かっていけるし、お前が自分を見失うことのない原点になる。」

今回のように、お前にしかできないこともあるだろうが、それを全部お前が背負う必要はないんだ。魔導師であるが前に、お前は九歳の女の子なんだからな。明らかに間違ってたら俺やユーノだけじゃなく、アリサやすずか、土郎さんたちが体を張ってお前を止めてやるから安心しろ。

まあ、時には鬱憤晴らしに愚痴ってもバチは当たらないからな？
事情を知ってる人に限られるけど」

「う、うん……わかったの」

「そんじゃ、俺から言いたかったことはこれで全部なんだけど……
なのはから何かあるか？ 無いならこれにて解散としたいんだが？」

これからのジュエルシードの回収は、今までよりもずっと大変だと思っ。

今までだってユーノ君や一真君がいてくれたからこそまでやってくれたと思うし、私だけだったら絶対に何もできなかった。

私一人じゃジュエルシードの回収も、フェイトちゃんとお話するこ

ともできないかもしれない。

「一真君、ユーノ君、これからも私と一緒に手伝ってください！」

だから、私は自分の気持ちを言葉にして二人に伝えました。
何もできないままの私でいることも、見ているだけしかできないなんて嫌だから。

「ああ、こちらこそ宜しく頼む」

『マスター共々、お手伝いさせていただきますから！』

「うん！ 頑張っていこう、なのは！」

『はい、頑張っていきましょうマスター』

「……ありがとう！」

皆の笑顔での返事に、私も笑顔ではつきりと応えられた。

あの時からずっと自分の中でグルグル考えてたのが何だったのかな
って思えるくらい、私の心が嬉しくて温かい。

もう迷わないから……だからフェイトちゃん、今度は全力全開でぶ
つかっていくからね！

PV10万記念・第十二話 if 決意を覚悟へと変える時（後書き）

なのは覚醒、そして決意する……のif話でした。

今までの小説の中で（色んな意味で）一番長い話となりましたが、いかがだったでしょうか？

個人的にはバトルでこんなにも長ったらしく書きすぎた上に内容が微妙すぎる気がしてかなり「orz」になっていますが、後悔はしてない（えー

ぶっちゃけ、もう少し本編の話を長くしろ！と言われそうですが、自分の技量はこんなものなのでご勘弁ください。精進していききたいとは思っています。何時になることやら……。

とりあえず今回は特に自己解釈を含めて書かせていただきましたので色々違うところがあるかもしれませんが、作者の一解釈として受け取ってもらえれば嬉しいと思います。

こんな可能性もあるかもなああと考えながら書いたので、本当に行き当たりばったりですが（殴

それと重要な話ですが、諸事情により三ヶ月ほど小説の更新をお休みさせていただきたいと思います。

その間に一応A's編のプロット（というか流れの整理）とリアルでの諸事情にどうにかして区切りをつけたいと思ったので。

更新再開は早くとも六月末、遅ければ七月末くらいかなと思っています。ます。

小説の更新を楽しみにされている読者さんには大変申し訳ないので、暫くお待ち下さい。

第二十一話 つかの間の平和（前書き）

どうもお久しぶりです、そして長らく更新停止してすみませんでした。

まだまだリアルについては色々と片付いていないことがあり、更新が遅れるかもしれませんがどうぞよろしく願います。

ではA・s編の始まりである二十一話をお楽しみくださいm

—(m)

第二十一話 つかの間の平和

夕日が沈みかける頃のとある喫茶店、その入口のドアには貸切の看板が掛かっている。

その喫茶店の名は翠屋。高町なのはの両親が経営する飲食店であり、地元でもかなりの人気を誇る名店。

貸切の掛け看板の先に見える店内は明るく、そこにいる人々の雰囲気はお祝いムード全開であった。

その中で皆の視線を集めているのが今回の主役であるフェイト・テスタロツサであり、店内にいる皆は自分のことのように嬉しそうにしていた。

「……フェイトちゃん、入学試験合格おめでと〜!」「」

「あ、ありがとう」

そう、今日は翠屋でフェイトの合格祝いとしてパーティーを開かれていたのだ。

フェイトが数日前に私立聖祥大附属小学校の入学試験を受験した結果、見事に合格という通知が届き、今日が初登校日で見事なのはと同じクラスになった。

そのことに皆は自分のことのように喜び、それならばお祝いをしようとなのはが言い出して全員がそれに賛成したのがキツカケである。

会場にはフェイトを含むテスタロツサ家以外の人々も多く招かれており、なのはたちの祝福の言葉が開催の合図となって各場所から乾杯の声とグラスの音が響く。

多くの人たちの笑顔で迎えられるフェイトに、それを微笑みつつも見守るテストロッサ一家の人々の様子に、一真の表情も柔らかかった。

「おめでとうフェイト」

「ありがとうユーノ。一真が丁寧に教えてくれたから合格できたんだよ」

「いや、俺が教えたのは差し障りの無い部分くらいさ。フェイトが頑張ったからこそ合格できたんだよ。謙遜する必要はないぞ？」

一真が重点的に教えたのは主に小学生程度の一般的な国語や社会程度で、他は教える必要が無いほど学力に問題がなかったのだ。

特に数学と物理。それに関しては教える立場が逆になるほどフェイトは詳しく、半分くらい一真の勉強会と化していたのは当人たちしか知らない。

後々、そのことについて一真は情け無いと酷く落ち込み、こっそりと教科書などの基礎から勉強しなおしているのは余談である。

「そうよフェイト。頑張って合格したんだから少しは自信持ちなさいよ」

「で、でも……」

控えめというよりも、引つ込み思案気味なフェイトは自信無さげであった。

しかし、苦勞して合格したのは事実であって文句などあるはずもなく、十分自信を持ってもいいことなのである。

一真はそれを察し、フェイトに向けて穏やかで優しい顔をしながら口を開く。

その顔は、今は自信が持てなくてもいい。けど、いつかは自分で自分を誇れるようになってくれるようにと願いが込められているかのようであった。

「これからもよろしくな、フェイト？ 俺はまだ復帰できないが、皆と楽しんでこいよ？」

「あ……うん！」

嬉しそうに笑顔で応えるフェイトに、一真も安心したような笑顔で向きあう。

純粹な笑顔を目の当たりにして少々恥ずかしいのか、一真は僅かに視線をずらして頬を赤らめて左手で頭を掻いた。

「学校でも言ったけど、わからないこととかがあつたら遠慮無く言いなさいよ、フェイト？」

ちよっかい出してくるバカがいたら容赦なく蹴り倒してくるから」

「あ、アリサちゃん、それはやりすぎだよ……」

とても楽しそうに話すアリサたちを見て、これなら心配ないだろうと一真は安心した。

今まで自分と歳が近い子と触れ合う機会も増える上に、魔法関連にしてもなのはたちはフェイトを支えてくれる。

なのはについても同じ魔導師で模擬戦をするにも事欠くこともなく、魔法についても望むのならプレシアが鍛えてくれるだろうと。

だが、一真は義手を着ける手術に加えてリハビリも待っている為、暫くはそれに加わることはできない。それについて寂しさを感じはするが、自分も早く完治できるように頑張っただけだと内心意気込んだ。

「えっと、一真……どうしたの？」

「ん？ ああ、いやなんでもない。それと、よく頑張ったなフェイト」

そう言っつて、一真はフェイトの頭をポンポンと優しく撫でた。同じ金髪でもアリサとは違う髪の流れに沿うように、くすぐりたいと思える程度の感触がフェイトに伝わる。そんな優しく、穏やかな温度が伝わる寸前といったところで一真の手は離れ、スツという音がやがて途切れた。

「あ……」

手が離れると、フェイトが名残惜しそうな声を出している様子に、一真は優しい微笑みを浮かべながら目を瞑る。

その目を瞑っている刹那の瞬間で、誰にも気づかれないうちに自分の中にある何かを押し殺すようにしてゆっくりと目を開く。

その様子は、かつて同じことをしてやったなという思い出をフェイトに重ねないようにと、自分自身を戒めるようであった。

「ん、どうしたフェイト？」

「え、あ……なんでもない」

フェイトの戸惑った様子にワケがわからないと、一真はそう思いつ首を傾げたのだった。

それから時間が少し経過した頃、一真は一人で料理を食べていた。なのはたち女性陣……もとい少女陣はフェイトと何やら話したいことがあるらしく、一真はのんびりとしている。

ユノについては高町家の人々と何か話しており、一真は久々に一人でゆっくりと食事にありついていたのだった。

「一真、ちょっといいかしら？」

「ん？ プレシアか。パーティー楽しんでるか？」

「ええ、私もアリシアたちも楽しんでるわ」

「ああ、そいつはよかつ……………た？」

プレシアの言葉に、一真は何気なく視線をアリシアとアルフの方に向けると言葉が詰まってしまった。

視線の先にはアリシアとアルフがいて料理に手を付けているのだが、その様子に一瞬だけ状況を理解できずにフリーズしていたのだ。

アリシアはごく普通に料理を食べているのがわかるのだが、アルフはというと大きいステーキを噛み切ろうと力の限り歯で引っ張っていたのだ。

遠目から見てもギギギ、とかいう鈍い音が必死な形相によって聞こえるはずもない距離にいるのに、何故か聞こえてくるかのようであ

る。

周囲の人たちも「あれはないだろ」、といったような感じで顔の一部を僅かに引きつらせている様子は、まさにドン引きといったところであった。

「……まあ、元気があって何よりだな」

「そ、そうね」

「それで、一体どうしたんだ？」

「ええ、あなたの義手のことなのだけど……早ければ来月中には完成すると思うわ。それで取り付けの日時についてなのだけど、早めのほうがいいかしら？」

「真は少しだけ驚いたが、義手の完成が早いのは互いに嬉しいことだ。」

「真もこのままでは不便であり、闇の書の戦いの為にもできるだけ早く取り付けに掛かりたいのが本音なのだ。」

「どの道りハビリもしなければならぬ以上、早ければ早いほど都合がいいのは当然ともいえた。」

「ああ、できるだけ早めに頼む。ただしプレシア、あんまり無理するなよ?」

「ええ、わかっているわ」

言外に自分のことは自分で分かっている、そう意味を込めた言葉に――真は当人に対してジト目を向ける。

化粧で隠しているが目の下に隈がうっすらと残っており、まだ病み

上がりともいえる状態なのに無理しているのが化粧に疎い一真にすら察せるほどであった。

「くれぐれも体を気遣えよ？」

「わ、わかっているわよ」

「どうだか……大方気づいたら朝になってたなんていうオチじゃないだろうな？」

「そ、そんなことはない……わ」

凶星だったのか、徐々に言葉の力が弱くなっていくプレシアに一真はため息を吐いた。

後でアリシアとフェイトに告げ口し、プレシアが必要以上に無理しないよう見張ってもらわなければならない。

最悪ベッドに縛り付けてでも眠ってもらおうという、少しだけ物騒なのはプレシアの前科を考慮すれば無理もないといえなくもないが。

「頑張るのはいいけど、くれぐれも無理するなよ？」

「え、ええ、わかっているわ。それじゃあ細かいことは後で話しましょ」

「おう、わかった」

そう言ってプレシアは逃げるようにしてアリシアたちの方へと歩いて行き、アルフに対して食事のマナーについて注意をし始めた。

一真もその様子に苦笑しつつも、食事を再開しようと皿の上にあるサンドイッチを口に頬張り、その味に幸せの溜息を吐いた。

絶妙な塩加減のハムにシャキシャキのレタスに、ふんわりとした柔らかさでそれらを包むパンの心地良さに思わず一真も食が進んでいく。

この翠屋で出されている料理はなのはの母である高町桃子が作っており、その腕前は超がつくほどの一流である。

そんな滅多に食べられない料理を幸せそうに頬張るのも無理からぬことなのだ。

「ねえねえ一真君、さっきプレシアさんと何話してたの？」

「むぐ……ああ、忍さん。義手についての話ですよ」

一真は口の中にあるものを飲み込み、声をかけてきた忍に言った。

「右腕……確かアリシアちゃんの為にだっけ？」

「ええ、代償は高くつきましたけど後悔はないですよ。こうしてあいつらの笑顔を見られるんですから」

「そっか……」

後悔はないと言った一真の表情は、何かが吹っ切れたかのような表情で言った。

原作ではアリシアは死んだまま、プレシアは虚数空間に落ち、フェイトは管理局で裁判を受けていたというのが正しい流れである……はずであった。

だが、一真はそれを知った上で擦じ曲げ、彼女たちの人生を大きく変えてしまったということが罪なのだろうと思っていた。

悲劇を見たくない、ただ助けたいという気持ちで多くの人生と世界を変えてしまった。

それは世界が矛盾を嫌うという、この世界と違った空想上の知識の欠片が、このようにして自身を責めているのだと悟った時には一真も思わずため息をついたが。

こうして代償は高くついてしまったが、その分の対価としては自身にとって十分すぎるほどの価値があったのだから文句などあるはずがない。

だからこそ一真は後悔はしていない、するはずがない。

こうして自分の望んだ小さな幸せが間違いではなかったと、一真は心から信じているのだから。

「それで一真君、その義手についてなんだけど……私も製作に混ぜてくれないかな？」

「へ……？」

「いや、そういう話を聞くと我慢できなくて……ね？　お願い！」

パンと手を合わせて頼み込んでくる忍はまるで一真よりも幼く、子どもっぽさ全開の姿であった。

一真としては別に忍が混ざっても構わないのだが、義手の製作は今のところプレシアに全部任せているので詳細は一真自身もよくわかっていない。

だから、この事については製作しているプレシアから直接許可をもらったほうがいいたるうと結論づけた。

「えっと、俺は別にいいんですけどプレシアが全部やってるんで、プレシアがいいっていうならいいですよ」

「本当！？ それじゃあ聞いてくるね〜！」

「は、はあ……」

忍は目を輝かせながら、凄まじいまでのスピードでプレシアのいる方へと向かっていった。

その様子に、何か致命的な選択ミスをしてしまったような気がする。そんな気持ちを誤魔化すかのようにして一真は口の中のを飲み込んだのだった。

同時刻、時空管理局本局次元航行部隊所属第八番艦……アースラではクルーたちがそれぞれの仕事をこなしていた。その中でもクロノ・ハラオウンは割り当てられた部屋にて書類仕事を行っていたが、メドが付いたらしく椅子に座ったまま背を伸ばしていた。

「はい、クロノくん」

「ああ、ありがとうエイミィ」

クロノは手渡された緑茶を受け取り、ズズッと少し飲んで一息ついた。

彼らはジュエルシード回収の為に地球へと来ていたのだが、ここ最近は出勤する機会がほぼ無くなっていたため書類仕事をこなしていたのだ。

戦闘狂、もといバトルマニアには退屈であろう状況であったが、それは平穩という自分たちが望む結果であり、そんなゆったりとした時間を過ごしていたのだった。

「そういえばクロノくん、ジュエルシードってあと七個だったよね？」

「ああ、もう少しで回収は終わるだろう。だが油断は禁物だ」

「うん、わかってるよ」

実際は一真が残りのジュエルシード全部を所有しており、時期を見計らってユーノに渡していることを彼らは知らない。

既にこの事件は茶番劇じげんになっており、一真が面倒事を避ける為の隠蔽工作をなのはたちに頼んでいるとは思ってもいなかったからだ。

彼らがなのはたちを信用しているのか子供だからと甘く見ているのかはわからないが、彼らが知らない第三者の一真が付け入ったのはまさにそんな隙だったのだろう。

「さてと……エイミィ、残りの書類も全部終わらせよう」

「あともうちよつとだからね……ささつと終わらせちゃおう！」

一息休憩を取り終え、二人は再び仕事に取り組もうとボールペンを手にする。

そんな時、クロノに対しての通信を知らせる音が鳴り響き、その発

信元が自分たちのよく知る人物のものであると知った。
どうしたのだろう、そんな気持ちを抱きつつもクロノはすぐに通信を繋げた。

「クロノ、エイミー、悪いのだけどすぐにブリッジにきてもらえないかしら？」

「はい、わかりました」

そうして通信は途切れ、クロノはトントンと書類をまとめて机の端へと置いた。

「どうしたんだろう？　なんだか良くないことのようにけど……」

「わからない……とりあえず行こう」

二人は一緒に部屋から通路を歩き、ブリッジの方へと歩き出した。
一体どうしたんだろう、そんな困惑が感じられる表情をしながらも歩くスピードは少しも落ちない。

まもなくしてブリッジへの扉が姿を見せ、二人はその場所へと入っていったのだった。

「艦長、お呼びですか？」

「ええ、実は第9無人世界のグリューエン拘置所が何者かに襲撃され、收容されていたある囚人がこの第97管理外世界に逃げ込んでいるとの報告をついさっき受けたわ」

「な……！？」

第9無人世界、そこは原作三期のStrickersにおいてジェイル・スカリエツティが収監された拘置所が存在する世界である。無人世界というだけあって人は限りなく少なく、そこには多くの次元犯罪者が収監される拘置所が多数存在している。

また、ジェイル・スカリエツティが収監されるだけあってグリューエン拘置所は厳重な構造をしており、徹底した入出管理や監視などが行われている。

そこを襲撃され、犯罪者が自分たちのいる地球に逃げ込んできたなどとなれば、緊急事態という言葉すら生ぬるいだろう。

特に、逃げこんできた犯罪者が危険であればあるほど……。

「それで、その囚人についてだけど……広域次元犯罪者にして狂人と呼ばれるイプサム・サイファーよ」

「なっ!?!? あ、あの狂人が!?!?」

狂人イプサム・サイファー、多くの次元世界において悪行の限りを尽くしてきた広域次元犯罪者の名である。

人が苦しみ死んでいく様を愉悦とするという文字通りの狂人にしてマッドサイエンティスト。

そして魔導師として卓越した実力を有しつつも特に危険とされたのは、科学技術において特に「改造」というモノに関しては種類分野を選ばないという悪魔の才能にあった。

そんな狂人も数年前に時空管理局がやつとのことで逮捕し、拘置所の中でも特に厳重な地下十階の光さえも届かない牢獄の最奥に収監されていたはずであった。

そこからでは絶対に届かないはずの場所に狂人の笑い声が聞こえてくるという、同じ収監者が噂をし、不気味だとされた存在……それが狂人・イプサム・サイファーという男であった。

「そこで私たちは応援が来るまで情報収集を命じられたわ。応援はすぐにでも手配するそうよ」

「では、僕たちは現地にて行うということですか？」

「ええ、けれど決して深追いはせず、応援が到着するまで無理をせずに情報収集をすること、いいわね？」

「了解！」

「はい！」

現状、この艦にいる魔導師たちのレベルはお世辞でも高いとは言えず、質と量……つまりは人材が圧倒的に足りないのだ。

クロノは執務官としての実力はかなりのものではあり、その母親であるリンディも経験豊富な実力者であるが、リンディはアースラの艦長としての職務上簡単には動けない。

そしてクロノにしてもアースラの切り札と言われているが、それは逆に言ってしまうえばクロノがやられてしまえば戦力はガタ落ちすることを意味するのだ。

結論から言ってしまうえば、今の彼らにできるのは情報収集くらいなものであり、確保に向かうことなど論外なのだ。

イプサム・サイファーは管理局の魔導師ランクにしてSS、とてもではないがクロノたちだけでどうにか出来るレベルを超えている以

上、仕方のないことなのである。

「ではジュエルシードと……彼女たちに連絡は？」

「……私としては、ジュエルシードの回収のみ手伝ってもらっても
りよ。」

なのはさんにしても魔法を手にしてまだそんなに経っていないし、
一般人のあの子に手伝ってもらうわけにはいかないわ」

「……そう、ですね」

リンディたちはなのはがレイジングハートを受け取り、魔法が使える
ようになってまもないことは聞いていた。

魔力量は破格、才能も申し分ないとなれば手伝ってほしい気持ちは
山々であり、管理局の事情からして是非とも勧誘したい人材ではあ
る。

だが、なのはは地球人であってミッドチルダの魔導師ではなく、つ
い最近まで平凡な小学生であり、人との命の奪い合いとなる戦場に
立ったことなど一度も無いのだ。

そんななのはが卓越した実力を持ち、殺傷設定を常とするイプサム・
サイファアと対峙すれば、結果は既に見えてしまっている。

だからこそ、ジュエルシード事件が一段落したところで強く勧誘し
たかったという気持ちがりンディにはあったが、今回は流石に手伝
ってほしいなどと言えるはずもなかった。

「クロノ、エイミィは一緒に地球で拠点を置き、そこから情報収集
をしてもらいます。」

報告は逐次行い、何かが起きたらすぐにこちらに伝えること……

いいわね？」

「了解！」

リンディの言葉にはっきりと返事をした後、クロノとエイミィはすぐさま拠点を置く準備を始めるのだった。

第二十一話 つかの間の平和（後書き）

一真の右腕、そして暗雲が近づくの話でした。

今回リハビリも兼ねての投稿でしたが、何故か今までの中で一番長いんじゃないかと思えるくらいになっていました。

実際どこか回りくどくて長ったらしくなっていますが、少しずつ直していきたいと思っていますのでよろしくお願いします。

……そろそろキャラ紹介とかのものとか作ったほうがいいのじゃないか？

個人的には面倒なので作りたくない……おっと、こんな時間に誰か来たようだ。

第二十二話 アーティフィシャルライトアーム(前書き)

またしても久しぶりの投稿になります。

いい加減元のスピードに戻ればいいのですが中々うまくいかず…

…orz

……えっと、それでは第二十二話をお楽しみください！

第二十二話 アーティフィシャルライトアーム

パーティーから一週間後、俺はユーノを自室に招いていた。右腕の件で俺は外出が好ましくないし、今日で俺の持つジュエルシード全てをユーノに手渡したのだった。

ちなみに今は平日のお昼前で、小学校は普通あるのではななはたはここにおらず、のんびりと男二人で談笑を交えていた。

こうしてたまには男だけで話をするというのもいいと思う。

特に俺みたいな奴は、なのはたちを誑かたぶらしているんじゃないかと思われて学校では嫉妬と殺気の込められた目で見られるしな。

そのため、学校には友達といえる男がほほいらないから少し寂しいんだよね。まあ、気にしなれば問題はないんだけど寂しいことは寂しい。

「それでユーノ、ようやくジュエルシードのことについては一段落したが、これからどうする気だ？」

「うーん……もう少しだけ地球に残っていようと思ってる。士郎さんたちにまだ恩を返せてないし」

ユーノは自分が散々迷惑をかけてしまったのにもかかわらず、とても暖かく迎えてくれた高町家の人々に深い感謝をしているらしい。俺も同じような立場だから何となくわかるが、普通なら気味悪がられても文句を言える立場でもなかったのだから深く感謝するのは当然なのかもしれない。

俺もバニングス家の人たちに何か恩返しでもできないものかな……今回のことで俺もすごい迷惑かけちゃったし。

「そつか……それなら管理局を通して連絡しておけよ？ お前が行方不明になってそれなりに経つんだし」

「そうだね、ジュエルシードを渡す時にでもお願いしてみるよ」

「そうしておけ。あ、それだとお前の身元証明が大変になるな……」

「それは大丈夫。フェイトたちが戸籍を作ってもらった時に僕もアリサからもらってるから。」

あと聖祥大附属小学校の入学試験も近い内に受けるつもりだよ。士郎さんたちもその気で僕もびっくりしたし」

ユーノがなんて事無く問題ないというか、既に居残るつもり満々なことに驚いた。

それに士郎さんたちもノリがいいというか、手回しが皆揃って良すぎることに呆ればいいのか、慣ればいいのかわからなくなってきた。

まあ、慣れちまったらもつと大変なことになりそうだから、最後の一線は死守するつもりだけど。

「そうか、わからないところとかあったら俺にでも遠慮なく聞けよ？」

「うん、ありがと。あ、そろそろ時間だ……」

ちなみにユーノは最近翠屋の手伝いをやっており、週に三日のペースで行っている。

おそらくだが、翠屋でのユーノの評判は中々良いのだと俺は思っている。顔も良いし、性格も親しみやすくしてほっとするよさな感じだ。

特に、年頃の女性なんかには非常にモテるのではないかと思う……
母性本能ってやつで。

「それじゃあ部屋まで送ってやるのか？」

「あ、うん。お願いするよ」

「よしきた。フォルセティ、ソードライフルモード」

俺はフォルセティを左手に持ち、いつもの要領でこことユーノの部屋との空間を繋げる。

ゲートの先には平凡ともいえる部屋が映しだされており、それを確認したのと同時に空間を固定する。

ユーノの部屋には一度行ったことがあるのでイメージするには問題ないし、大して苦勞もしないので楽といえは楽だ。

「ほい、今のうちにどーぞ」

「あ、うん。それじゃあまたね」

そう言っただけユーノは空間をぐぐり抜け、それを確認した俺はゲートを閉じた。

ふう、と一息吐いてフォルセティをペンダントに戻し、気が抜けたかのようにして椅子に座る。

「ふう、これでジュエルシードに関しては終了だな」

『随分あっさり終わりましたが、これで次は闇の書だけですな』

「ああ、これで当面は闇の書について打ち込める」

だが、原作を根本的に変えてしまった以上、今後何が起きてもおかしくない。

それこそイレギュラーが入り込むことだって十分考えられるし、早くも管理局の人間が地球にやってくるのかもありえるのだ。

個人的にはハッピーエンドになってほしいので、リインフォースが生きていてほしいのだが、そのための準備は何一つできていない。

それに俺自身も戦闘が満足にできない状態であり、これは最優先で解決しないとイケないのだ。

もしこの状態の時に永遠の闇が襲ってきたら、はっきり言ってそれだけで一巻の終わりと言ってもいい。

現状、唯一の対抗手段であるグングニルもこのままでは満足に撃てないし、実力的にも問題しか無いというダメさ加減。

うん、どんだけ不利というかヤバすぎる状況なんだよ。どこぞのBETの光線級に狙われているくらいヤバイじゃねえか。

「早く現状を何とかしないと……このままだと何もできないまま終わっちゃう」

『やらなければいけないことが山積みですね、マスター』

「ああ、俺もこの右腕を何とかしないと……さて、左手の練習でもするか！」

今できることはこれくらいしかない、俺はそんな齒痒はがゆさをぶつけるかのように左手の練習に取りかかるのだった。

それから二週間ほど経過して義手が完成し、手術と取り付けの作業が無事に終えることができた。

義手の装着面の手術に関しては時の庭園で行い、ついさつき一通りの検査を終えて月村邸に戻ってきて義手のお披露目をしているところだ。

「うん、その様子だと問題ないようね」

「何か変な感じはしないかしら？」

「大丈夫みたいです。それよりも凄いですね、この義手……」

右腕の義手は思った以上に動かしやすく、プレシアと忍さん曰く持てる技術を駆使して創り上げた最高の出来とのことらしい。

見た目は普通の人間の腕で、イメージとしてはハガレの機械鎧とスバルやギンガなどの戦闘機人の特徴を足して割ったものといえはわかりやすいだろう。

見た目は普通の腕でしかないし、触り心地にしても人肌の温もりが普通に伝わるほどの完成度に俺自身もびっくりしている。

「これ、本当に義手……なの？」

「どう見ても普通の腕にしか見えないわね」

「何だか触り心地も普通の腕みたいだね」

義手を握ったり開いたりして感触を確かめても指先の方まで精確に

動き、直に触っているすずかたちにも普通の腕のようだと言わせるのだから凄まじい完成度だろう。

二人の熱意というか研究者魂の結晶と表現すべきかはわからないが、製作者たちはいい仕事をしたとばかりに誇らしげな様子だ。

「それで義手について説明するけど、いいかしら？」

「あ、はい。お願いします」

そうしてプレシアと忍さんの二人で義手についての説明が始まった。

この義手は学習型で、使えば使うほど動きを学習して動作の最適化を行っていくのでどんどん使っていけばいくほど人間の腕と同じ動きをすることが可能らしい。

しかも生半可な解析では通らないように細工をしてあるらしく、取り外しも俺自身の意味で行えて整備も調整もかなり楽になっているそうさ。

「なるほど、つまりはどんどん使って学習させていけばいいってことですか？」

「ええ、強度もかなり高いからそう簡単には壊れないし、万が一不具合が出て調整はそこまで難しくないので終わるわ。」

それで少し試してほしい機能があるのだけど、いいかしら？」

「？ 別にいいですけど、何をすれば？」

「ちょっと右腕を前にかざして、あそこのドアノブに手を伸ばすように意識を強く向けてみて」

「あ、はい……いつ!？」

忍さんが言う通りにやってみると、バスンという発射音と共に手から肘までの前腕部分が義手の部分から何かの紐みたいなモノに繋がったまま飛び、見事にドアノブを掴んだのだ。

やった俺や見ていたのはたちは呆然とその光景に思考が停止し、それを見た忍さんは満面の笑みでガッツポーズをしていた。

「実はただの義手を作るだけだと面白くないから、プレシアさんと色々話し合って色々とギミックを組み込んでみたの！」

ロケットパンチにプレシアさんたちの技術を詰め込んでね。ワイヤーを通じて腕と接続しているから一真君の意思次第で戻るようになってるよ！」

「ちなみにワイヤーの部分は特殊なワイヤーに魔力を纏わせているからそう簡単には切れないわ。」

義手自体の動力についても貴方の体のカロリーを使うからコストも少ないけど、欠点としては少しお腹が減りやすくなるってところね」

忍さんたちが誇らしげに義手についての説明をしているが、俺の気持ちとしては驚きと戸惑い、そして幾分かの呆れが心を占めていて耳に入っていないかった。

いや、確かにここまでのモノを創り上げたのは本当に凄いいし、俺自身も使いこなせれば色々な面で便利だから感心するのはいいだろう。

だが、正直言ってしまうとこれは扱いに困るといっつか、明らかにネタ機能でしかないような気がしてならない。

男として憧れというかロマンではあるんだが、実際自分の右腕でそれを放つとなると心境としては複雑としか言い用がないのも事実だ。

だから、俺は内心でこう叫ばせてもらおう……やり過ぎにもほどがあるだろ、このマッドサイエンティスト共め！

「はあ……」

「うん、きちんと戻ってくるし不具合も無し！ いやあ、本当に楽しかったわ〜」

「私もここまで充実したのは久しぶりね」

戻れという俺の意思がワイヤー先の手の方に伝わったようで、動作音を発しながら右腕は戻ってきた。

すぐに手を握ったり開いたりとして確認しても動作に問題は一切無く、その完成度の高さマッドと化した二人の女性に呆れつつもため息を吐いたのだった。

義手を装着して三日後、俺はというと漸くせうやく学校に復学した。

久々の教室に授業となると小学生の内容であっても不思議と懐かしさを感じてしまった俺は正常だと思いたい。

何事も無く鳥たちが空を飛ぶのを見ながら弁当を食べてる今は、本当に幸せだと思っよ。

「一真君、右手の調子はどう？」

「中々いいぞ？ 簡単な動作だけならもうできるし、この分なら以

前と変わらない動きができるのもそう遠くはないかもな」

「す、すごいね……慣れるの早くないかな？」

「まあ、まだ細かいところは練習しないとダメだけだな」

「ノートがあの状態だったしね」

「言っな、頼むから！」

義手をつけて軽い動作はできるようにはなったけど、字を書いたりとかはまだ難しいようだった。

その惨状にアリサが仕方ないわね、と言いつつもしつかりとノートを取ってくれていたのは非常にありがたかったが。

それで書いた字の状態としては左手の方が僅かに読める程度、右手は読めない状態でこんなにも違うことに不思議に思ったが、フォルセテイの説明を受けて納得がいった。

その内容とは存在していたという経験値であり、失ってしまった右腕は経験値そのものがゼロからのスタートだからだ。

こればかりは両腕をきちつと使って慣らしていくしか方法はないので、頑張っていくしか無いとのことでしょうがないと納得したが。

「でもしょうがないよ、まだ取り付けたばかりなんだから」

「最低でも二ヶ月くらいは必要だろうって言ってたしな、プレシアたちは」

とりあえずは教科書にマーカーとか引くのから始めていこう。焦ったところですぐに結果が変わるわけでもないし……ってあ、教科書

で思い出した。

「あ、やべ。借りてた本返してなかった」

「それって市立図書館の？」

「ああ、最近色々あったりしてすっかり返すの忘れてた」

こうなる前はちよくちよく行ったりして本を借りるなどをしてたが、忘れてたおかげで貸出期間はとくに過ぎている。

幸い鞆の中に入れたままにしていたので取りに戻る必要もないし、帰りにでも返してくるかな。

「とりあえず帰りにでも返却しに行ってくるか」

「あ、一真君。私も一緒に行っていいいかな？ 私も返却したい本があるから」

「ん、いいぞ？ それで皆はどうする？」

「うーん、私はフェイトちゃんと一緒にレイジングハートたちのメンテナンスがあるからパスかな？」

「私は一緒に行くわ。少し見たいものがあるし」

すずかは俺と同じく返却する本があるらしいのでOKとして、なのはとフェイトはそれぞれ用事があるようなのでパスか。
まあ、レイジングハートとバルディッシュのメンテナンスはしないといけないし、これはしょうがないだろう。

しかし、アリサと一緒にいくというのは意外というべきか。あんまりそういうイメージがないからなのだろうけど。

いい機会だからアリサが好む本のジャンルを理解しておくのも悪くないし、いい本があれば誕生日プレゼントにでもしてみようかな？

「わかった、学校が終わったら行くぞ」

「ええ、わかったわ」

「うん、私も用意しておくね」

そういえばアリサとすずかの二人と一緒に行くのは久しぶりだった気もする。

少しでも有意義な時間だったと思えるよう、俺も少しは気を配るよ
うにしないとな。

第二十二話 アーティフィシャルライトアーム（後書き）

一真、義手を取り付けるの話でした。

またしても投稿が遅れてしまいました……本当に早くしたいのですが、中々うまく行かないものです。

書く内容は決めているのに、それを形にするのが桁違いに遅くなるとは……orz

次回も少しずつ早く書けるよう頑張りますのでよろしくお願ひしますm()m

第二十三話 夜天の主との出会い（前書き）

前回よりも少しだけ早くかけたので投稿させて頂きます。

それにしても執筆が遅い……元々遅いのにリアル事情が未だに片付かないなんてorz

……それでは、第二十三話をお楽しみください。

第二十三話 夜天の主との出会い

放課後になり、俺たちは市立図書館でそれぞれ本を読むなどをしていた。

すずかもアリサも自分が読みたい本を手に取り、俺も同じように自分が読みたい本を読んでいた。

穏やかな時間が流れるのは正直嬉しいし、こうした時間が大切だと思う俺にとって図書館は本当の意味でオアシスなんだろう。

ちなみにすずかは物語系の小説とその横に機械いじりの本、そしてアリサはというと料理の本についてじっくりと読んでいた。

これは意外というべきか、アリサが料理の本を読んでいるというのはイメージに無かったので驚きを隠せなかったが、何とか無理なポーカーフェイスをしながらその場を後にしたのはついさっきのことだ。

俺もアリサってお嬢様キャラだから料理とかダメダメかなとは思っていたんだけど、それは偏見なのかもしれないな。

「（はあ、平和でいいわ〜）」

『（最近はゴタゴタしてましたし、こうしてのんびりするのもいいですね）』

「（まったく。でも闇の書について解決しないといけないんだよなあ……）」

俺としてははやてもヴォルケンリッターも助けたいし、何よりグレアムの胸糞悪い計画を潰したいのが本音だ。

グレアムの復讐したい気持ちは百歩譲って否定しないが、それをはやてに向けるのはお門違いにもほどがある。

それに孤独なままでいるはやてを、復讐という究極の自己満足の為に殺すなんて俺からしてみれば糞野郎以外の何者でもないからだ。

それを阻止するために準備しないといけないことばかりではあるが、闇の書の闇……防御プログラムを無効化・消滅させるためのパッチを作ることが最優先で必要だろう。

外部から不正なアクセスをすれば主人を飲み込んでしまう転生機能も厄介だが、完全破壊ができない最大の理由である防御プログラムである無限再生機能をリインフォースから切り離すというのは原作でもあった。

だが、それではまた新たな防御プログラムが作成されてしまうのでリインフォースは自身の消滅を願い、消えていった。

だが、切り離された状態というのは防御プログラムの影響が限りなく抑えられている状態ということであり、その間にパッチをあてるなどの対策を講じることができないかと考えられる。

ただ、この方法については素人の俺では判断がつかないから詳しい人物、さしずめプレシアに聞いてみるしか方法がないというのが歯痒いな。

ちつ、考えるほど胸糞悪くなるな。他人頼りなだけでも腹立つのに、見えない所で最低最悪な復讐ストーリーを実行してるグレアムのせいで余計に腹立つ。

「（勝手に決めた筋書き通りのバッドエンドなんて、あいつらには似合わねえ。それに文句なしのハッピーエンドを目指さないで何が復讐だ。」

それが闇の書への最大にして最高の復讐になるのにな、あのクソ

ツタレのグレアムめ！」

『（焦っては元も子もないですよ、マスター。まだ猶予は残されているはずです）』

「（ああ、わかってる。何か方法はあるはずだ、その辺を煮詰めておくか）」

軽く深呼吸をして気持ちを落ち着かせ、気分転換のつもりで読書に戻ろうと本を開く。

俺が読んでいる本はアーサー王物語。Fa eで興味を持って色々読んでいたのだが、これまた内容が本によって色々違って面白かったりする。

アーサー王物語を題材として本となっているものが非常に多いし、感心することもあれば疑問に思う所があるなど興味が尽きないので気分転換には最適だった。

まあ、アーサー王の結末は悲劇のものが多めだからその部分については複雑な気分になるけど……ん？

「（フォルセティ、この魔力ってなのはたちとは違うよな？）」

『（ええ、どうやらご本人が来たようですね）』

フォルセティと話しながら本を読んでいると、大きい魔力が図書館に入ったのを感じたのだが心当たりが俺にはあった。

そう、壊れた夜天の魔導書にして闇の書に選ばれてしまった少女……八神はやてなのだろう。

時期的にはそろそろなはずだが、はやての近くに魔力反応がないからヴォルケンリッターはまだ登場していないようだ。

今まで何度もここには来ていたが、タイミングが合わなかったのか一度も会うこともなかったんだけど。

「（少し様子を見てみるか。フォルセティ、はやてへの監視はあるかサーチしてくれ）」

『（わかりました、少々お待ち下さい）』

俺自身も苦手ではあるが自分を中心に魔力の反応を探り始め、目を閉じて深く呼吸をしながら集中する。

フォルセティに任せればいいんだろうけど、いつまでも苦手だといつてなにもしないわけにもいかないので訓練の一環として意識を傾ける。

『（……………はい、近くに大きい魔力を感じませんし大丈夫でしょう）』

「（そうか。よいしょっと）」

俺の方にも監視の目は無しという結果、ということにははやてと接触するには絶好の機会ともいえるだろう。

本を置いて席を立つと、ゆっくりと感じた魔力の方に歩いたその先に車椅子に乗った少女がいた。

自分の目線より上の本棚を見て何か唸っているように見えるが、手に取りたいと思われる本が自分の手には届いていない。

試しに手を伸ばして本を手を取ろうとしたが届くわけもなく、その様子は何故か小動物の類にしか見えない……………さながら子狸といったところか。

まあ、このまま見ているのも何だから助けるか。もうちょい見たい気持ちはあるけどね。

「よっと、この本でいいのかな？」

「ありがとうな。ええと……」

はやてが取るうとしていたのは、とんでもなく分厚い本で「はてしない物語」とタイトルをした辞書のような本だった。

ぶつちやけ手に取った俺からしても広辞苑くらい分厚い上にずっしりと重く、その中身はおそらく名前に恥じないくらいの物語が書かれたものなのだろう。

でも、この図書館の貸出期間は二週間である。その間にこんなに分厚い本を読むなんてことができるんだろうか？

「ああ名前か。俺は風樹一真だ、一真でいい。同年っぽいしな」

「私は八神はやて、私も名前でいいで？」

「そうか、わかったよはやて」

お互いの名前の交換をし、俺が軽く微笑むとはやてが俺の方をじっと見つめてきた。

何だろう、俺の顔に何か変なものでも付いているのだろうか？ 顔はきちんと洗ってきたはずなんだが。

「同年って、もしかして一真君は九歳くらいなんか？」

「ああ、（外見上は）九歳だ。もしかして年上にでも見えたのか？」

「うん。何となく空気が同じ年っぽくない気がしたし、背もちよつと高い気がしたしな」

「そうか。まあ俺はクラスでも身長は少し高めのような」

実際は中身の人間の年齢は見た目の二倍以上は年取っているという鯖を読む程度じゃ済まない年齢詐称だけだね。

それに身長も143センチくらいと一学年くらい上の平均身長で、年上に思われてもしょうがないけど勘で違和感を持つとは少しだけ驚いた。

「それはそうと、そんな分厚い本で大丈夫か？」

「大丈夫や、問題無い」

おい、何でそのネタを知っているんだはやてさん。この元ネタになったゲームはこの世界には存在していないはずなのに。

だがはやてがそのネタを出すのはまずい、この元ネタではその後死ぬ手前まで行ってたから洒落にならないからな。

「それで実際のところ、貸出期間で読めるのか？」

「良くて半分くらい読めるかどうかやろうなあ。難しい漢字有りそうやし。」

けどこれも結構面白いらしいし、案外早く読み終わりそうな気がするんやけど」

それでも軽く千ページはありそうな本を半分まで読めるというはやてに、俺は驚きを隠せない。

中身によって異なるだろうけど、俺だったら四分の一かその程度で音を上げる可能性がある。

ぶっちゃけ読書家に対して挑戦状を叩きつけているような本だし、今にもチャレンジャーであるはやてに敬礼しそうになる。

「でもそれを読もうと思うはやてが俺には凄くと思うがな」

「別に凄くはないと思うんやけどね。それで一真君は何を読んどるん？」

「基本面白いと思ったら何でも読むけど、今はアーサー王物語を読んでる」

「アーサー王って、あのエクスカリバーで有名の？」

「ああ、その通りだよ」

エクスカリバーなんて読書やゲーム好きの人間なら一度くらい聞いたことがあるメジャーな聖剣だし、はやてが知ってても不思議じゃないか。

「あ、いたいた。何やってたのよ一真」

「ん？ 二人共、どうしたんだ？」

そんなたわいもない会話をしていると、アリサとすずかが俺の後ろにいた。どうやら話に熱中しすぎてたらしい。

「いつの間にかアンタがいなくなって戻って来なかったからね、それで探してたのよ」

「ああ、スマンスマン」

「えっと一真君、この子は？」

「ん？ ああ、紹介するよ。この子は八神はやて、ついさっきここで本を取ろうとしてたところを手助けしてな。それから少し本について話してたんだ」

俺は知り合った経緯とはやての紹介を非常にわかりやすく話した。そういえばまだ二期は始まったばかりだったし、二人とは面識がないからね。

「それでこちらの二人は俺と同じクラスの友達で……」

「アリサ・バニングスよ、アリサでいいわ」

「月村すずかです、私もすずかでいいよ？」

「あ、うん、よろしくな」

そうして俺たちは笑顔で自己紹介を終え、ここでは話すのは邪魔になるからと場所を変えて雑談ともいえる話をしたのだった。

一方、地球のとある場所にて一人の男が古いビルの中でゆっくりと

立った。

男の服装は囚人服、その右手には黒いアクセサリーを握り締めながら口元を歪めている。

肩にまでかかる銀髪を束ねて二十代くらいと思われるその容貌は、見る人が見れば間違いなく美形と呼ばれモテる部類だろう。

だが、その体から発せられる雰囲気はあまりにも冷たく、非情を通り越したモノで無かつたらの話ではあるが。

「クツクツク、とりあえずは脱走完了といったところか。ありがとう、君のおかげで無事にここまで来れたよ」

『……………』

「フッフ、わかってている。君との約束はきちんと果たすさ、こう見えても私は義理堅いのでね」

男は地球とは違い場所の、殆ど無人の拘置所に拘留されていた犯罪者である。

数々の悪行を尽くし、人々が多大な犠牲を払ってまで身柄を拘束されたが、こうして脱獄してきたのだった。

そして、その要因ともなったアクセサリーに満足気な笑みを浮かべつつも視線を様々な方向にむけて何かを探しながら呟いた。

「だが私たちと対を成す存在……………確か　　だったか。この第9管理外世界、地球にいるのかな？」

『……………』

「……………そうか、なるほど。少し遠くにいるようだが、行けない距離

ではないな」

『……………』

「何をするのか？ フフ、折角外に出れたのだよ？ ウォーミングアップついでに君の敵の顔と実力を見ておくのも一興かと思うのだが？」

明らかに自分たちが負けるとは思っていないと、自信というよりは自分には勝って当たり前といった声で男は答えた。

事実、男の実力は超一流ともいえるほどの技量を持ち、それ故に自身を含む世界そのものへの見方がいつしか変わってしまったのだ。

自分以外の存在全てが、取るに足らない玩具以下の存在でしかないと。自分という人間と自分以外の人間は人の形をしたヒトというオモチャでしかないと。

「さて、私達の宿敵に挨拶をしに行こう……………ミクトラン」

『……………』

嘲るような笑を浮かべながら男……………イプサム・サイファーと、ミクトランと呼ばれたアクセサリーは空へと消えていった。

第二十三話 夜天の主との出会い（後書き）

タイトル通り、夜天の主との出会いの話でしたが……次回は言わずともバトルです。まあ、実際は無理ゲーですが。

執筆に時間が取れず、更新が遅れまくっておりますがチマチマ書いていきたいと思しますので今後もよろしく願いしますm()m()

第二十四話 敗北（前書き）

何故か早めに書けたので投稿してみました。

戦闘メインの話だと執筆が早いのか、それともテキストに書いているのかはわかりませんが。

後者だったら落ち込むというレベルを超えてる気がします……。○

r z

それでは第二十四話をお楽しみください。

第二十四話 敗北

図書館での貸出を終え、俺たちはゆっくりと図書館の出入り口から外に出た。

西の地平線へと沈む太陽が目で見えるが、時刻は十七時過ぎなのだから暗くなり始めるのは当然といったところだろう。

まだ春と夏の間くらいで少し明るいけど、静かな空気が少しずつ冷たくなっていくのがわかる。

「結構話し込んだじゃったわね……もう夕方になってるし」

「私も楽しくてつい時間を忘れてたわ……お話ししてくれておおきにな？」

「私も楽しかったよ？ はやてちゃんともお友達になれたから」

図書館もそれなりに大きいので外の道路までは少し距離はある。

すずかがはやての車椅子を押しつつ、俺とアリスはそれに続いて駐車場に向かって俺たちは歩いていく。

よく女三人寄れば姦しいというけど、この三人の場合は微笑ましくも穏やかだった。

まあ、俺は女の子の話に入り込むのはきついで、話が振られるまでは様子を見ているだけだったが。

「あ、そうだ。今度皆ではやての家に遊びに行ってもいいか？ それに今日いなかった子も紹介するぞ？」

「あ、うん、そんな時は腕によりをかけた料理も振舞うぞ？」

「お、そいつは楽しみだ」

はやての料理は自炊をしていることもあって腕前は中々らしいし、個人的にもはやての手料理には興味がある。

それに復讐者たちに気をつけてれば闇の書やヴォルケンリッターにも接触できるし、事情を話せば協力してくれる可能性もある。

何より、はやてに余計な罪の意識を持たせたくないし、全部を抱え込まなくていいことを伝えてやりたいしな。

心身共に傷だらけになっても疑問に思わないのは自分を蔑ろにしてるのと同じで、痛いなら痛いと言うのが当たり前なんだ。

我慢し続けるのにも限度があるんだし、時には吐き出さないとパンクしちゃうしな。

「アンタは何でご飯のことになると張り切るのかしら……？」

「む、俺だって料理はそれなりにできるからな。作るのも楽しいし、食べるのも楽しいしな」

「え！？ アンタ料理できたの！？」

「失敬な！ こう見えてもパンも作れるし、大抵のものは作れるっ
てのー！」

これでも前世では料理はもちろん、家事全般も交代制で色々やつたので困らない程度だと自負はしている。

流石にどこぞの赤い弓兵のような執事スキルA+は持ち合わせていないが、少なくともアリサよりはできるはずだ。

「ふふ、二人とも可愛い」

「むしろ微笑ましいと思うけどな、私は」

そうして俺とアリサが言い合いをしているのをすずかとはやてはクスクスと微笑んで見つめていた。

少しは止めようと思わないだろうか？ いや、すぐに終わる口論だから別に構いはしないんだけどさ。

……だがそう思った時、俺は言い表せない程の寒気を感じ、灰色に染まった世界をこの目にした。

「え……？ な、何よこれ？」

「周りが、灰色になってる？」

「な、何やこれ？」

これはおそらく封時結界、ユーノが周辺に被害が出ないよう結界内外のズレを生じさせる結界魔法の一つだ。

だがこの結界はユーノが張ったものではないし、何よりジュエルシードが無い以上発動させる理由もないからユーノ及びびなのはやフェイトたちも除外される。

そうなると管理局の人間という可能性もあるが、それはないだろう。俺が感じた冷たい何かには覚えがある。

フェイトの母であるプレシアとの初対面、そしてプレシアが自意識を保ちつつも操られていた時に纏っていたものとそっくりだ。

ああそうだ、これは永遠の闇の欠片の放つ無自覚にして冷たい無の感情そのものだ。

『マスター、後ろ！』

「くっ!？」

「え、一真君!？」

咄嗟にセツトアップを完了させ、すぐさま後ろにいるはやてたちを守るようにしてシールドを展開する。

黒色の魔力光、それはなのはやフェイトたちとは似ても似つかないほど醜悪かつ冷酷で、狙われた自分たちが物理的に跡形も残らない程の密度を持った魔法だった。

「っ……ええい!」

かなりの圧力がシールドにのしかかるが、俺はまともに受けようとせず軌道をずらして魔法を別方向へと受け流す。

いきなりのセツトアップに強度の高い魔法を使ったせいで僅かに息が乱れるが、それを無理矢理平常に戻して魔法が向かってきた先に視線を向ける。

「ほほう、それくらいの魔法は受け流せるようだね。流石はの使者とでも言っておこうかな？」

「……オマエ、何者だ？」

「ああ、そうか。名乗っていなかったね。

では軽く自己紹介といこう。私はイプサム・サイファー、君の宿敵

にして無への回帰を欲する者と名乗らせてもらおう」

全身を漆黒に染めた杖と姿をした銀髪の男、イプサム・サイファーという男が嘲りの笑みを浮かべながらそう名乗った。

空に浮かぶ男に対して鋭い目をしつつ、一真はフォルセティを両手で握り締める。
その表情は険しく、視界に映る男への戦意を高めつつも現状についての把握に思考を傾けていた。

先程の魔法は物理干渉がオンになっていた。つまり彼の相棒であるフォルセティが気づかなければ彼女たちは塵も残らず消え去っていただろう。

受け流した魔法の着弾先からは大きな爆発音と衝撃波が彼と近くにいた少女たちに伝わり、それが危険であったことを示唆していた。

「そう睨まないでくれるかな？ 私としては挨拶のつもりだったのだが、別に構いはしないだろう？」

「ふざけんな、さっきのは物理干渉も殺傷設定もオンになっていた。俺が防がなければ彼女たちは死んでいたんだぞ！？」

怒りという感情を滲ませた言葉を一真は口にするが、イプサムは何がおかしいのかわからないといった表情で一真を見下す。

「それがどうしたかな？ 人が一人死のうが意味など無いし、何故

君はそんなくだらないことを言うのか理解に苦しむね」

「デメエ……！」

イプサムが何てこともなく発した言葉に、一真はフォルセティを握り締める力を強め、眼光を更に鋭くする。

一真は命についての価値観は一般の人々とあまり違わなかったが、魔法という力を手にしてからは何よりも重いと考えるようになってくる。

だからこそイプサム・サイファーが言ったことが自分とは真逆に近い、真性の異常者であると認識したのだった。

「さて、外に出てきて間もないのでね……ウォーミングアップついでに楽しませてもらおうか？」

「くっ……！？」

そう言つて、イプサムは無数の魔法を一真と後ろにいる少女たちに対して放った。

しかし、一真は動くことができない。後ろにいるすずかたちを守らなければならない以上、全力で戦うことすらできないのだ。

だからこそ迫りくる殺人魔法の群れに、今度は範囲型の防御魔法を展開して防御に徹すること……それが一真にできることだった。

「ふむ、防御は中々……だが、これはどうかな？」

「なっ！？」

「耐えきれるかね？ シューティングスターフォール」

今度は先程の魔法とは密度が桁違いの、貫通効果を持つ無数の魔法が放たれる。

容赦無く連射される魔法に、一真の防御魔法は次第にミシミシと軋みながら罅が入っていく。

だが一真は体にかかる負担を度外視してまで防御魔法に魔力を注ぎ、すずかたちに傷一つさえ付けさせなかった。

「くっ……おおおおお！」

「ふむ、後ろにいるゴミに気を取られて十分に戦えない、か。全く、そんなのに構わず攻撃してくればいいだろうに」

「はあ、はあ、はあ……！」

「この程度で息切れか、つまらないな」

イプサムは心底つまらなそうにしているが、一真は戦意を更に強めて睨む。

右腕の取り付けからそう経っておらず、自身の魔法との相性テストすら行なっていない一真には負担が大きかったのだ。

イプサムの放つ魔法の練度はなのははおろか、大魔導師であるプレシアよりも上で防御に集中しなければあつという間に死んでいただろう。

「な、何なのよアンタは！ さっきから言いたい放題言ってくれちゃって！」

「そうや！ 何かわからんけど私らにできて！」

「何で、何で私たちにこんなことをするんですか！」

事情を知っているはずかやアリサ、そして魔法のことについて何も知らないはやてでも先程のやり取りが非常に危険であることを理解していた。

一真が大きく息を切らし、今にも倒れそうなほど疲弊しきつた後ろ姿に言い知れぬ何かを感じたのだろう、イプサムに対して非難するのも当然とも言えた。

だが、当の本人はつまらないものに邪魔されたといわんばかりに冷たい目をしながら彼女たちに杖を向けた。

「ゴミが囀るな、耳障りだ。先に消してあげようか？」

「させねえよ、クソツタレ！」

攻撃が止まった瞬間、一真はゲートを応用してイプサムに肉薄する。魔力刃を展開したフォルセティを全力で振り下ろすが、イプサムも魔力刃を瞬時に展開して軽く受け止めていた。

鏝迫り合いのギリギリという音が二人の間で生じ、両者の距離は限りなく近いものとなる。

「ほう、一瞬にして距離を詰めてくるか……いや、空間移動といったところかな？」

「教えてやる義理はない、ここでクタバレ！」

「発想も面白い、術式展開も正確かつスピーディーとは中々か」

「ちい……せえい！」

武器を弾いて次への攻撃へと転じる一真だが、表情には一切の甘えも油断もない。

一真の専心は奴の絶倒にのみ向けられ、未熟ながらも重い一撃が何度にも渡ってイプサムへと放たれる。

だが、その攻撃はいともたやすく受け流され、一真の心に僅かながらの焦りが生じていた。

先程の魔法、そして近接戦においても自身の何十倍もの技量を見せつけ、余裕を持って攻撃を受け流していく姿は楽しんでいるだけだった。

それは己の持つ技量に対する絶対の自信か、それともこちらの実力がその程度であると見下されているのか……おそらく両方だろう。

そうしたことによる焦りからか、一真の攻撃は徐々に大振りになり始めていた。

「……だが、甘いね！」

「なっ……がっ!？」

一瞬にも満たないその隙を見逃さず、イプサムは魔力刃で一真を切り裂いた。

左肩口から右脇腹への斬撃は一真の傷口から出血を生じさせ、滴り落ちる血液の量は致命傷ともいえるレベルだった。

しかし、それだけでは終わらなかった。イプサムはすぐさま一真の首を片手で掴み、さもつまらなそうな顔をしながら口を開いた。

「ぐっ……があ……!？」

「ふん、つまらないにも程があるね。まあ、少しは体も動かせだし、よしとしようかな……！」

イプサムはそう言い終わると一真を地面へと叩きつけるように投げつけ、一真は何もできないままアスファルトに叩きつけられた。

衝突の際に生じた鈍い音が短く周囲に響く。それが一真の敗北という事実を見ていた者たちに突きつけたのだった。

「一真！」

「一真君！」

「か、一真君！」

「来る、な……！」

残酷な事実を突きつけられた彼女たちは居ても立ってもいられずに一真の方へと走って向かおうとするが、一真の声で足を止めた。

地面に横たわる一真の呼吸は弱く、胸元の傷からは夥しいほどの血が溢れていることから既に瀕死であるのは確実だった。

だが、普通なら意識を失ってもおかしくない程の傷を負いつつも立ち上がるのは、使命以上に自分が守ると言った人たちが傍にいらこそだった。

膝は震え、目は霞み、フォルセティを握る手の力さえも徐々に弱くなり始めるといふ絶対の死が近づいても、一真の目は最後の最期まで諦めていなかった。

「ふふ、致命傷を負ってもなお立ち向かうか。滑稽であり惨め極まりないな」

「惨めで、結構。俺は……何があっても、守る！」

「そうかい、なら守ってみせなよ？」

「な……！？ くっ……！」

醜い嘲笑をしながらイプサムは空からすずかたちの方へと急速に接近していく。

あらゆる負の概念を纏って黒いデバイスから発せられる魔力刃を構えつつ、狂気に満ちた刃で命を奪う為に。

一真は激痛に顔を歪めながらもゲートを使用し、瞬時にすずかたちの前に現れてイプサムの攻撃を防御すべくフォルセティを構えた。

だが、そんな絶体絶命ともいえる中で、桃色と黄色の魔力弾がイプサムの動きを止めた。

「むっ……一体誰だい？ 折角の殺戮ショーだったのに」

「な、なのは、フェイト……？」

視線の先にはデバイスのメンテナンスに行っていたはずの、なのはとフェイトの二人であった。

二人はバリアジャケットを展開しており、それぞれのデバイスをイプサムに向けて即時に魔法を放てるよう狙いをつけていた。

「何だかよくわからないけど、これ以上はやらせないよ！」

「これ以上、一真たちを傷つけさせない！」

「へえ、少しは楽しめそうだね」

「残念だが、それは叶うことはない」

なのはたちとは別方向から声が聞こえる、まだ年若い少年の声。

青色の魔力光を伴った魔法と鎖がイプサムへと向けられるが、それを軽々と回避して少年の方を見る。

そこには、時空管理局執務官であるクロノ・ハラウンが戦闘態勢で構えていた。

「ほう、仕事が速いことだな狂信者の狗共」

「イプサム・サイファー、まさか近くにいるとは思っていなかったが……」

「一真、今治療するから動かないで！」

「ユー、ノ？」

イプサムは感心したといった感じで、クロノは忌々しそうにそう咳いてお互いを目で牽制しあう。

そんな中で別の少年が一真の近くにきて、すぐさま治癒魔法を展開してダメージを少しでも回復させようとするのはユーノであった。

彼らも結界の存在に気づいてここに急行したのだが、目の前の光景は想像もしないほどの惨状であった。

大怪我を負って立っているのがやっとの一真と、それを嬉々として見るイプサムを見れば何があったのかは想像できる。

一真と対峙しているこの男が、一真だけでなく一般人のすすかたち

をも手にかけてしようとしたのだと。

「ふふふ、ここは一先ず逃げさせてもらおう」

「くっ、待て！」

最後まで嘲りの笑みを絶やすことなく、イプサムは結界の解除と同時
時にその姿を消した。

そしてイプサムの姿が消えて安心したのか、一真は強固に保っていた意識が段々と薄れていく。

全身の力が抜け、フォルセティを握っている感覚すら曖昧になって自分の視線が地面に近づいている。

「悪い、もう無理だ」

その言葉と自身の名を悲鳴のように叫ぶ声と共に、一真の意識はどこまでも深い闇に落ちていったのだった。

第二十四話 敗北（後書き）

一真、完敗するの話でした。

大怪我を負いつつもすずかたちを守り抜くが、イプサムとの実力差は明白と思いつつ知るに至るといふ。

しかしこんなことで諦めるほど一真は弱くはなかったりしますが。

次回もなるべく早めに更新できるよう頑張りますので、よろしくお願ひしますm（）（）m

第二十五話 封印解除と交渉決裂（前書き）

またしても早く完成した上に文字数が今までよりも多いというオチになりました。

まあ、話の内容がぶっちゃけくどくなり過ぎて、自分自身でも「あれ〜？ どうしてこうなった」と思うくらいに。多分、分かりやすすぎる伏線を張ったのが原因かもしれません……。本当に、どうしてこうなった。

それでは第二十五話をお楽しみください。

第二十五話 封印解除と交渉決裂

、目を開けてくださいー

深い暗い闇の中で、振り切ったはずの名前で呼ばれるのを耳にした。重く感じる眼瞼まぶたを強引に押し上げ、その目に入っている情報を瞬時に認識すると知っている光景が目映った。

ああ、ここは音もなく雪が降る広い草原、そしていつか見た幼き少女が俺の前に立っているのがわかった。

「久しぶりというわけでもないが、どうしてここに？」

「貴方が死にかけているところで私が意識をここに呼びました。少し話したいことがありましたので」

少女の目が何となくジト目で俺を責めるかのように見つめてくるが、それを責めるのは勘弁してほしい。

あの場で何とかしなければ俺はおろか、すずかたちも奴の手によって命を落としていたと思うし。

「そうか、それでどういった話なんだ？」

「……まずは貴方と戦ったイプサム・サイファーと名乗る男と、彼の持っていた杖についてです」

奴について、俺も聞きたいことがいくつもあるから丁度いいだろう。あの男の持っていたデバイスらしき杖、あれはプレシアと対峙した時に感じた絶対の死の感覚の正体。

俺の予想が間違っただけならば、あれはおそらく永遠の闇が形になった存在だと思っただけだ……。

「まず彼の持っていた黒き杖、あれは永遠の闇の力を行使する上で最適化された存在です。」

貴方がフォルセイと名付けたあの子とは対となる、全てを無に帰すだけの呪いそのもの。

そして、それを手にした彼も貴方と対を成す存在と化した者……だからこそ、貴方にしか打倒できないのです」

奇しくも俺の知っている物語の一つであるRAVと内容が似通っているが、奴は後のことなど何も考えていない点で決定的に違っている。

あの物語のラスボスは自分の未来を望んでいたのに対し、奴はただ自らの欲を満たすためだけに力を振るっていたからだ。

それに永遠の闇にとって明確な目的など無く、ただ欲望を満たすために動く奴は都合のいい道具といってもいい。

その点ではある意味究極の利害の一致ともいえる。血に飢えた殺人鬼と凶器という関係は最早語るまでもないだろう。

「理解できたようですね、貴方もよく知っている物語の一つと同じ状況、戦うことは避けられないでしょう」

「だが君はわかっているとはずだが、今の俺では奴に打ち勝つことなど不可能だと思っただけ？」

はっきり言って地力が違いすぎるし、あらゆる面において俺はヤツに数十倍劣っているといってもいい。

こっちがやっこの思いでLv10になっても必死であるのに対し、

奴は軽くLv300を超えて今も尚強くなつて余裕でいるといえはわかりやすい。

ええつと、何？ 自分で言ったけど、何だこのどうあがいても絶望的なキャッチフレーズがお似合いだと思われるムリゲー。

「それならば封印していた力を使えるよう、ここで封印を解除することができません。」

ただ、これは貴方が使いこなせるまで一つに封印しようと思つていましたが……それでも貴方は望みますか？」

少女にそう聞かれて、俺はそういうことかと妙に納得していた。

実はというと、俺はフォルセティに何かしらの封印みたいなものがあるのは薄々気づいていた。

それは、あいつの基になった武装にはFモードという必殺技があり、俺が使えているのはその中でもライフルだけだったからだ。

ライフル以外のFモードにはクロウ、ソードと全部で三つの形態があつたのに他のモノは何故かイメージができていないのに扱えなかつたのだ。

フォルセティは俺のイメージ不足だつて言っていたが、当時は何で使えないんだらうかとガツクリしていたことがあつたがようやく合点がいった。

「……………ああ。これ以上アイツの好き勝手にさせるわけにもいかないし、今のままでは到底勝つことなんて無理だろう。」

それに、俺が守りたいと思う人たちのためにも俺は少しでも強くなりたい。だからこそ、俺はそれを望む」

それと同時に、改めてわかったのだ。最低でも全ての力を使いこなすくらいにならないければ絶対にヤツには勝てないってことが。ライフルすら使いこなせていない俺がそんなことを望むのは馬鹿げているが、戦う上で手札は多いことに越したことはないのも事実だ。

……何より、あんな奴に負けたままでは正直耐えられないんでね！

「わかりました。では……」

「

「むっつ……！？」

封印解除と思われる言葉を少女が呟いた時、俺の認識していなかった何かの鎖が砕けたのを感じた。

おもむろに自分の手を握ったり閉じたりして感触を確かめてみるが、特段何も変わったような気がしないのは何故だろう？

「それは貴方の無意識に封印を施していたからです。貴方が使おうとしても封印によって使えないようにしてましたから。」

それと封じていた能力を使えるようにしただけであって、実際に使えるのかは私にはわかりませんので気をつけてください」

「そうか、これでソードやクロウが使えるってことか……ん？ 実際には使えるかどうかわからないってどういうことだ？」

「言葉通りです。私がしたのはあの子で使える能力の制限を外しただけであって、貴方自身が強くなったわけではありませんから」

「……うそーん」

まあ、そんな都合よく強くなれるなら誰も修行やら訓練やらはしないってことか。

確かにいくら魔力が上がっても、いくら他人の業を手にしてもそれを使いこなすことができるかどうかはその人次第なわけだし。

他人の力を自分の力と思い込んで過信しないで済んだと考えれば、これは逆に少女に感謝するべきことだろう

何より、思い上がった状態で戦えば奴はおろか、自分自身の弱さにすら勝てないのは明らかだ。元々俺は弱っちいものだからせめて間違わないようにしないとな。

「……ふふ、貴方は面白い人ですね」

「ま、ここで言うてくれなければ俺は間違っていたと思うよ。色々ありがとな、大切なことを教えてくれて」

「……いえ、私にはこれくらいしかできませんから」

少しだけ俯いて目元を見せない少女を見て、俺は呆れ顔をしながら歩いて近づく。

俺の小さな足音に気づいたのか、少女はすつと顔を上げるところを見計らって左手の中指を弾くようにして額にぶつける……要はデコピンだ。

一瞬何が起きたのかわからないといったような顔をしていたが、徐々に痛みが出てきたのか涙目で額の部分を両手で覆っている。

「そんなに自分を卑下するなって。君にとってこれくらいってことは、俺にとって十分大切なことだったに違いないんだから」

「で、でも私は……」

「それだけでも助かる奴がいるんだ。少しくらい前向きに考えとくこと、いいな？」

「む……わかりました」

何か最初に会った時と比べると、この少女は随分人間じみてきた気がする。似ているとするならなのはかすずかだろうと思う。

こんなふうにいると苦しみのはすずかもそうだが、雰囲気としてはなのはが一番近い気がする。

「あ、聞き忘れてたけど俺が永遠の闇の欠片を倒した時に手に入れた石についてなんだが、何かわかるか？」

「あれはエメラルドタブレットと呼ばれるものです。それに貴方の持つ石は紛れも無い本物であり、小規模であれば人の願いを叶える力を持っています。」

永遠の闇が宿っていた時はその力の方向性が真逆に働くよう力を発揮していましたが、今は貴方が浄化したことで本来の力を発揮できるでしょう」

確かエメラルドタブレットというのは、錬金術の秘奥ともいえるアイテムだったような気がする。

ただ俺はそれについてよく知らないの、自分的にわかりやすく解釈するならFat で正しく機能した聖杯のような感じだろうか。そう考えるとあの石を使って願いを叶えることができるというわけだが、生憎と俺には願いなんでない……って、この手があったか！

「なあ、あの石で闇の書……いや、夜天の魔導書の管制人格は助け

「することはできるか？」

「……貴方が考えている方法で助けることはできると思いますが。ただその者が真に望み、願う力の強さが鍵になります。」

「ですが、成功したとしてもその子は元の力を振るうことはできないでしょう。」

「そうか……」

「これでリインフォースを救える可能性が多少出てきたわけだが、一番の問題は奴だろう。」

「俺と対となる存在である以上、俺が何とかして倒せるよう自分を磨かないといけなくなるからだ。」

「それこそ闇の書なんていう問題もあるんだから、必ずといっていいほど介入してくるに違いない。」

「だから右手のリハビリも多少強引にでもやっていかないと到底間に合わないし、いつ奴が俺の前に現れるかもわからないままだ。」

「だからこそ時間はあつてないようなもの、一分一秒ですら無駄にならないでできそうにない。」

「それでは貴方もあの世界に戻ってもらいます。ここでの出来事は向こうの世界で一瞬のことですが、あの子たちのためにも早く戻ってあげてください。」

「ああ、頼む。じゃあ、またな」

「では、またいつか会いましょう」

体が消えていくのを感じながら、俺の意識はこの始まりにして約束の場所から遠のいていった。

イプサムとの戦闘から少し時間が進み、あの場にいた一真以外の全員がアースラの会議室にいた。

あの場にいた者たちは落ち込んだ顔をしており、その中でもすずかやアリサ、はやての顔色は酷く暗い。

大怪我を負った一真はというとアースラへと運ばれ、すぐさま治療を受けて今は医務室のベッドで横たわっている。

殺傷設定の魔力刃による深い刀傷、それは肺にまで達して出血も酷かったことから意識不明の重体として予断を許さない状態であった。

そして何もすることができない一同は、事情聴取という形でこの会議室の椅子に座って状況の整理をしているのだった。

「そうでしたか……風樹一真君、彼が貴女たちを守ってくれたのですか」

「……はい」

一真の事を知る者、そして知らない者たちも沈痛な感情を隠せなかった。

特に、あの場で一真が戦っているのを見ていることしかできなかった。すずかたちの気持ちはそれ以上だった。

そして、魔法のことについて何も知らなかったはやても、今回悪い

形で魔法のことを知る羽目になってしまった。

イレギュラーどころではないと、一真がこの場所にいたならさぞ複雑な顔をしていたことだろう。

「彼を宿敵と呼んではいたが、本人とは面識がない、か。そうなる
とまた彼を狙う可能性が高いですね」

「ええ、一真君とは何かの因縁があるのかもしれないし、そうなる
可能性が高いわね。できればこちらで保護すべきだけど……」

リンディがそう言うが、一真は管理局とは関わりたくないという気
持ちがあるのをつい先程聞いたばかりだった。

彼が何故魔法のことについて知っているのか、デバイスを持っているの
のかも聞き出したいところではあるが、一真は意識不明のままであ
る。

また、一真のフォルセティについても現在解析に回されているが、
何故か解析できない上に外部からの接続などもできないのでどうし
ようもない。

一真が目覚めるまでこれといった行動もできず、ただ今後の方針に
ついて取りまとめること。それしか今はできなかったのだった。

悪いがそれは断らせてもらおうよ、リンディ・ハラオウン艦長殿

しかし、そんな手詰まりともいえる状況を打開する少年の声が小さ
くも響いた。

その声に会議室内の人間は驚き、どこからか聞こえてきたその声の

持ち主を探そうと会議室の中を見渡すがどこにもいない。

ああ、すまない。今そちらに赴こう！

その場にいた人々に彼の言葉が伝わった瞬間、僅かに生じた空間の歪みから一人の少年がゆつくりと顔を出した。

このアースラに運ばれる前とは違ってボロボロではなく真新しいバリジャケットを身に纏い、少しだけ笑みを浮かべた風樹一真がそこにいた。

「か、一真！ 怪我は大丈夫なの！？」

「まだクラクラするから万全とは言えないけど、少しの間くらいは問題ないし大丈夫さ」

「それって全然大丈夫じゃないよ！？ 医務室で横になってたほうがいいよ！」

「大丈夫、休むのは死んでからでもできるから」

「いやいやいや、それ意味合いちゃうし今の一真君が言うのは完璧にアウトや！」

一真の割と冗談には聞こえない軽口にツッコミが入るが、本人は何てこともないように空いている席に座る。

顔色は良いとは言えなそうなのに平気そうな顔をしているが、彼を身近に見てきた彼女たちは相当無理をしているというのが明らかに分かった。

「お体は大丈夫ですか風樹一真君？」

「一応は問題無い、あと手当てについては感謝する。それで話は変わるが、何か聞きたいことでもあるのかな艦長殿？」

「ええ、そうですね。では単刀直入に聞きます……貴方は何者ですか？」

それはこの場にいる誰もが疑問に思い、どこかで知りたいたいと思っていたことだった。

一真自身からは地球出身の九歳児であり、不思議な魔法使いというのが彼らの知っている素性であった。

いつも自分たちの背中を後押しして、助けを求める声には必ずといっていいほど手を差し伸べてくれた。

その行為と信条に少なからず尊さを感じはすれど疑うこともなく今までいたが、今回の件でそれは疑問へと変わっていた。

あの男と何かの因縁があるのか……そして正体不明のデバイスと魔法を使う一真に疑問を 問いただすことに誰もが反対をすることはなかった。

「……それについてはなのはたちが話した内容と同じだから答える気は無いな」

「そう、ですか。では貴方の使う魔法……それにデバイスは今解析室にあるはずですが、どうして貴方の手元に？」

「それはフォルセティと俺は特殊な繋がりがあって、たとえ世界が違っていてもそれを辿ることで瞬時に手元に呼び寄せることができるだけだ。」

ああ、俺の使う魔法は貴女たちとは違う術式……いや、あの場に辿り着いた者のみが使うことが許される秘奥だと言っておくよ」

さも事も無げに一真は口にしたが、それはなのはたちが知っている魔法とは根本的に異なっているという事実であった。

なのはのインテリジェントデバイスであるレイジングハートにはそんなことできないし、リンディたちの常識でもありえないことだ。無論、質問したリンディもそんなデバイスや術式も知るわけもなく、一真の存在とその魔法を未知の存在と認識するに至った。

「そうですか……ではあの場とは？」

「それは言えない。いや、言ったところで意味を成さないから黙秘ということだ」

「……そんなことが認められると思っているのか？」

「ふん、認める以前の問題だよ。それに俺はその艦長殿と話している、横から口を出すな三流執務官殿」

「なっ!？」

お前はお呼びでない態度を取る一真に、クロノはカチンときたように怒りの表情を浮かべる。

今にも飛びかかりそうな程に苛立ち、一真を睨むように見つめるが、当の本人は知らんぷりといったような表情でリンディにだけ視線を向けていた。

「落ち着きなさいクロノ」

「ですが！」

「これは命令です。二度も同じ事を言わせないでください、クロノ・ハラオウン執務官」

「……了解しました」

「……それで話に戻ってもらってもいいかな？」

母娘の公私関係での上下関係を疲れたような目で見つつも、一真は話を戻すためにそう言った。

「ええ、すみません。それでは最後に二つほど……貴方とイプサム・サイファーとの関係と、何故こちらの保護を断る理由を聞かせてくれませんか？」

「あの男との関係……俺には面識も何もないけど、いずれ俺の前に姿を現すだろうな。」

それと、そちらの保護を断るのは単純に管理局という組織に信用も信頼も置けないと判断しただけだ」

「なつ、時空管理局は次元世界の平和のために戦っているんだ！こちらの指示に従うのは当然だろう！？」

「クロノ、いい加減になさい！」

「……お前らの言う管理局至上主義を聞かされる地球人の気持ちになつてくれよ、本当にさ。」

郷に入れば郷に従え、それはお前たちだけが言えることじゃない

ことを自覚しない限り、俺はお前らを信用なんてできないよ。

そういうわけで俺は管理局の保護下に入らないし、そっちの指図も受けるいわれもない。故に不干渉とさせてもらおう」

確かに管理局側が言うことも正しいのだが、それが地球人にとって必ず正しいのかといわれればNOである。

それに自分たちのが正しい、だから従うのが当然というのは一真にしてみれば相手の都合の押し付けでしかなく、そこから信用などできるはずもないからだ。

それに今回の件は事故とはいえ管理局の失態とも捉えることが可能であり、一真にしてみれば被害者である自分に対するクロノの不用意な発言も大きい。

管理局の法だからといって今の立場的に一真に対して強く出れないし、無理に保護や協力を求めることなどできないのは当然である。それなのにクロノが管理局の方針に従うのは当然という発言には、元々管理局にいい感情を抱いていない一真の心証を害するのには十分だった。

故に、このように明確な拒絶をされるのは無理もなかった。

それも信用できないから関わらないでくれと、これ以上ない宣言までされたのだから管理局としてもたまったものではないだろう。

手がかりとなりうる最重要人物に、下手に干渉してくればお前らとも敵対するぞという口実を作ってしまったのだから。

……後に、この件でクロノはリンディにこれ以上ないほど怒られたらしいが、それはこの場で語ることはないので割愛する。

「あ、わかってると思うが、サーチャー仕掛けるとかストーリーカーまがいの行動もやめてくれよ？ 俺の心証を余計に悪くしたくない

ならな」

「……………わかりました」

「艦長!？」

「彼は郷に入れば郷に従えと言ったはずよ。それに、いくら管理局として正しいといっても管理外世界である以上、管理局の法が必ずしも通用するなんてありえないわ。

それを強要するのは傲慢でしか無いし、そんなことをして信用されることなんて到底無理だっていうことよ。

貴方も管理局の執務官として行動する以上、それを踏まえた発言をしてください。それとクロノ、後で私の執務室に来るように……………いいわね?」

「え……………あ、はい」

一真の真意を汲み取ったりリンディはクロノに対して諭すように言うが、既に後の祭りだった。

だから彼女にできることはこれ以上一真との繋がりを絶たないよう無理のない範囲で要求を受け入れ、それを逆に利用してイプサム・サイファーを逮捕することだった。

「それにもう時間も遅いし、これ以上はなのはさんたちにも悪いわね。また後日追って連絡するようにしましょう。

はやくてさんにも連絡がつくよう連絡手段を用意しますので少し待っていていただけませんか?」

「あ、はい。わかりました」

そうして、一真と管理局とのファーストコンタクトを終えることとなった。

元々辿るべき道を外れつつあるこの世界に、それが何を意味するのか……今は誰も知ることはなかった。

第二十五話 封印解除と交渉決裂（後書き）

一真、必殺技の封印解除と管理局との不干渉を決めるの話でした。

Fモード全解禁と管理局との不干渉を決定づけたわけですが、やることはてんこ盛りで一真が過労死しそうと作者が心配になってたりします（えー

でも一真も自身が望むハッピーエンドを目指すためにだらけている暇などなく、これからが正念場といったところですね。

……まあ、そう簡単にハッピーエンドになってさせませんけどね！
（ええー

次回もなるべく早めに更新できるよう頑張りますので、よろしくお
願いますm（ー）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6495k/>

魔法少女リリカルなのは ~ 自称魔法使いの幻想録 ~

2011年11月16日22時48分発行